

近世快人伝

夢野久作

青空文庫

まえがき

筆者の記憶に残っている変った人物を挙げよ……という当代一流の尖端雑誌新青年子の註文である。もちろん新青年の事だから、郵便切手に残るような英傑の立志談でもあるまいし、神経衰弱式な忠臣孝子の列伝でもあるまいと思つて、なるべく若い人達のお手本になりそうにない、処世方針の参考になんか絶対になりつこない奇人快人の露店を披ひらく事にした。

とはいえ、何しろ相手が了りようけん簡かんのわからない奇人快人揃いの事だからウツカリした事を發表したら何をされるかわからない。新青年子もコツチがなぐられるような事は書かないでくれという但ただし書がきを附けたものであるが、これは但書を附ける方が無理だ。奇行が相手の天性なら、それを書きたいのがこつちの生れ付きだから是非もない。サイドカーとアドバルン広告球を衝突させたがる人間の多い世の中である。お互いに運の尽きと諦めるさ。

頭山満

ナアーンダ。奇人快人というから、どんな珍物が出て来るかと思ったら頭山先生が出て来た。第一あんまり有名過ぎるじゃないか。あんなのを奇人快人の店に並べる手はない。明治史の裡面に蟠踞する浪人界の巨頭じゃないか。維新後の政界の力石じゃないか。歴代内閣の総理大臣で、この先生にジロリと睨まれて縮み上らなかつた者は一人も居ない偉人じゃないか……とか何とか文句を云う者が大多数であろう。

……怪しからん。頭山先生を雑誌の晒し物にすると是不埒な奴じゃ。頭山先生は現代の聖人、昭和維新の原動力だ。そんな無礼な奴は絞め上げるがヨカ……とか何とか腕まくりをして来る黒切符組もないとは限らないが、まあまあ待ったり。話せばわかる。

筆者のお眼にかかつた頭山先生は、御自身で、御自身を現代の聖人とも、昭和維新の原動力とも、何とも思つて御座らぬ。「俺は若い時分にチットばかり、漢学を習うたダケで、

世間の奴のように、骨を折って修養なぞした事はない。一向ツマラヌ芸無し猿じゃ」と自分でも云うて御座る。それでいて西郷隆盛の所謂、生命も要らず、名も要らず、金も官位も要らぬ九州浪人や、好漢安永氏の所謂「頭山先生の命令とあれば火の柱にでも登る」という二トロ・グリセリン性の青年連に尻を押されて、新興日本の尻を押して通して御座った……しかも一寸一刻も、寝ても醒めても押し外した事はなかった。日本民族をして日清、日露の国難を押し通させて、今は又、昭和維新の熱病にかかりかけている日本を、そのまんま、一九三五年の非常時の火の雨の中に押し出そうとして御座る。……ように見えるが、その実、御自身ではドウ思つて御座るかわからない。ただ相も変らぬ芸無し猿、天才的な平凡児として持つて生まれた天性を、あたり憚らず発揮しつつしながら悠々たる好々爺として、今日まで生き残つて御座る。老幼賢愚の隔意なく胸襟を開いて平々凡々に茶を啜り、談笑して御座る。そこが筆者の眼に古今無双の奇人兼、快人と見えたのだから仕方がない。世間の所謂快人傑士が、その足下にも寄り付けない奇行快動ぶりに、測り知られぬ平々凡々な先生の、人間性の偉大さを感じて、この八十幾歳の好々爺が心から好きになつてしまったのだから致し方がない。そうして是非とも現代のハイカラ諸君に、このお爺さんを紹介して、諸君の神経衰弱を一挙に吹飛ばしてみたくなつたのだから止むを得

ない。

元来、頭山先生が、この新青年に、きようが日まで顔を出さないのが間違っている。それも頭山先生が時代遅れのせいではない。却^{かえ}つて新青年誌の方が頭山老人の思想よりも立ち遅れている事を筆者は確信しているのだから是非もない。ここに先生の許しを得て、逸話を御披露する。

^{とうやまみつる}頭山満翁の逸話といったら恐らく、浜の真砂^{まさご}の数限りもあるまい。頭山満翁はさながらに逸話を作り生まれ来て来たようなもので、その奇行快動ぶりといったら天下周知の事実と云つても憚らない位である。

しかし仔細に点検して来ると、その鬼神も端倪^{たんげい}すべからざる痛快的逸話の中にも牢乎^{ろうこ}として動かすべからざる翁一流の信念、天性の一貫しているところを明白に認める事が出来る。

すなわち翁の行動には智力を用いた形跡がない。何でも行きなりバツタリの無造作、無鉄砲^{もつ}を以て押通して行くところに、翁の真面目^{しんめんもく}が溢るるばかりに流露している。そうしてその真面目が、日常茶飯事に対しては意表に出づる逸話となり、国事に触れては鉄壁を砕く狂瀾怒濤となつて行くものようである。

蛇は寸にして蛇を呑む。翁が十歳ばかりの年の冬に家人から十錢玉を一個握らせられて、蒟蒻こんやく買いに遣られた。その頃の蒟蒻は一個二厘、三厘の時代であつたから、定めし十個か二十個買つて来いという家人の註文であつたろう。

ところが十幾歳の頭山満は蒟蒻屋の店先に立つと黙つて十錢玉を一個投出したので、店の主人は驚いた。

「これだけミナ蒟蒻をば買いなさるとな」

翁は簡単にうなずいた。

蒟蒻屋の主人は蒟蒻を山のように数えて、翁の前に持つて来た。

「容れ物をば出しなさい」

翁はやはりだまつて襟元えりもとを寛げた。ここへ入れよという風に、うつむいて見せた。そうして主人が驚いて見ているうちに、氷よりも冷たい蒟蒻の山を懷中ふところに掴み込んで、悠々と家へ歸つた。

頭山翁は終生をこの無造作と放胆振りでもつて押通している。

「俺は無器用な奴じやがのう。しかし、その無器用な御蔭で、天下の形勢の凶星だけは見外はずさぬようになつとる」云々。

「しかしこの頃俺に書画、骨董や、刀劍の鑑定を持込んで来るには閉口しとる。一番わからん奴の処へ見せに来る訳じゃからの。ハハハハ」

グロの方ではコンナ傑作がある。

大阪に菊地なにがしという市長が居たことがある。仲々の遣手^{やりて}でシツカリ者という評判であつたが、これに頭山先生が、何かの用を頼むべく会いに行った事がある。同伴者は先生の親友で、後の玄洋社長^{のち}の進藤喜平太氏であつたというが、市長官舎の応接室に通されて待てども待てども菊地市長が現われて来ない。天下の豪傑、頭山満が来たというので、才物の菊地市長尊大ぶつて、羽根づくろいをするために待たせたものらしいという後人^{こうじん}の下馬評である。

ちようどその時に頭山先生は、腹の中でサナダ虫を湧かして、下剤を飲んでいたので、そいつが利いたと見えて待つているうちに尻の穴がムズムズして来た。そこで頭山先生懷^ふところ中から股倉へ手を突込んで探してみると、何かしら柔らかいものがブラリと下つてゐる。掴^{つま}んで引っぱつてみると、すぐにプツリと切れてしまった。股倉から手を出してみるといかにも名前の通りに白い、平べつたい、サナダ紐^{ひも}みたいなものが一寸ばかりブラブラして

いる。

見ると目の前に、見事な金蔴まきえ絵をした桐の丸胴の火鉢があつたので、頭山先生その丸胴の縁ふちくだんに件のサナダ虫を横たえた。進藤喜平太氏も不審に思つて覗いてみたが、何やらわからないので知らん顔をしていたという。

そのうちに又、頭山先生のお尻の穴がムズムズして来たので、又手を突込んで引っぱると、今度は二寸ばかりの奴が切れ離れて来たヤツを、やはり眼の前の火鉢の縁へ、前の一ひ片ときれと並べておいた。察するに頭山先生いい退屈しの凌しのぎを見付けたつもりであつたろう。悠々と股倉へ手を突込んで一寸、又二寸とサナダ虫の断片を取出して、火鉢の縁へ並べ初めた。

誰でも知っている通りサナダ虫は一丈じょうも二丈もある上に、短かい節々のつながりが非常に切れ易いので、全部を引出し終るにはナカナカ時間がかかる。とうとう火鉢の周圍まわりへ二まわり半ほど並べたところへ、やつとの事、御大将の菊地市長が出て来た。黒羽はぶたえ二重五つ紋に仙台平せんたいひらか何かの風采堂々と、二人を眼下に見下して、

「ヤア。お待たせしました」

と云いながら真正面の座布団に坐り込んだが、火鉢の縁へ手を載せたトタンにヒイヤリ

としたので、ちよつと驚いたらしく^{てのひら}掌を見ると、白い柔らかい、平べつたい、豆腐の破片みたようなものが手の平へ二三枚へバリ付いている。嗅いでみると異様なたまらない臭いがする。菊地市長いよいよ驚いたらしく^{うしろ}背後をかえりみて女中を呼んだ。

「オイオイ。この火鉢の縁の……コ……コレは何だ」

女中が真青に面喰った。ちよつと見たところ、正体がわからないし、自分が並べたおぼえがないので、返事に窮していると頭山先生が静かに口を開いた。

「それは僕の尻から出たサナダ虫をば並べたとたい」

菊地市長は「ウワアツ」と叫んで襖の^{ふすま}蔭に転がり込んで行つたが、それっ切り出て来なかつた。

二人は仕方なしに市長官舎を辞したが、門を出ると間もなく正直者の進藤喜平太氏が、「折角会えたのに惜しい事をした」

とつぶやいた。頭山先生は又も股倉へ手を突込みながら、

「フフン。あいつは詰らん奴じや」

まだある。

これは少々グロを通り越しているが、頭山翁の真面目を百パーセントに発揮している話だから紹介する。頭山翁が玄洋社を提^{ひっさ}げて、筑豊の炭田の争奪戦をやらせている頃、福岡随一の大料理屋常盤館^{とぎわ}で、偶然にも玄洋社壮士連の大宴会と、反対派の壮士連の大宴会が、大広間の襖一枚を隔ててぶつかり合った。

何がさて明治もまだ中途半端^{はんぱ}頃の血^{ちなまぐさ}腥い時代の事とて、何か一^ひと騒動初まらねばよいがと、仲居^{なかい}、芸妓連中^{げいぎ}が心も空にサービスをやっているうちに果せる哉^{かな}始まった。

合^{あい}の隔^{へだ}ての襖が一斉に、どちらからともなく蹴開^{けひら}かれて、敷居越^{しりは}しに白刃が入り乱れ、遂には二つの大広間をブツ通した大殺陣が展開されて行つた。

大広間に置き並べられた百^め匆^{ろうそく}蠟燭の燭台が、次から次にブツ倒れて行つた。

そうして最後に、床の間の正面に端座している頭山満の左右に並んだ二つの燭台だけが消え残っていた。これは広間一面に血の雨を降らせ合っている殺陣連中が、敵も味方も目が眩^{くら}んでいながらに、そうした頭山満の端然たる威風に近づく^ととハッと気が付いて遠ざかったからであつた。

その頭山満の左右と背後の安全地帯に逃げ損ねた芸者仲居が、小さくなって固まり合つて、生きた空もなくなっていた。しかし頭山翁は格別変^{けしき}つた気色もなく、活動のスクリー

ンでも見てるような態度で、めのまえ眼前の殺陣を眺めまわしていたが、そのうちにフト自分の傍そばに一人の舞妓がヒレ伏しているのに気が付くと、片手でその背中を撫でながら耳に口を寄せた。

「オイ。今夜俺と一緒に寝るか」

これは頭山翁お氣に入りの仲居、筑紫お常婆さんの実話である。この婆さんまたも亦、一通りならぬ変り物で、ミジンも作り飾りのない性格であつたから、機会があつたら別に紹介したいと思う。

この婆さんが黙って死んだのでホツと安心して御座る北九州の名士諸君が多い事と思うが、しかしまだまだ御安心が出来ませぬぞ。この婆さんから筆者がドンナ話を聞いているか知れたものではないのだから……。

頭山翁のノンセンス振りと来たら又一段と非凡離れがしている。つまるところは聖人以外の誰にでも出来る平々凡々振りであるが、その平々凡々振りが又なかなか容易に真似られないのだから不思議である。頭山翁の恐ろしさと偉大さは、その平々凡々なノンセンス振りの中に在ると云つてもいい位である。

嘗て頭山翁が持っていた、北海道の某炭坑が七十五万円で売れた事がある。

これを聞いた全日本の頭山翁の崇拜者連中、喜ぶまいことか、吾も吾もと押寄せて、當時靈南坂にあつたかの頭山邸は夜も昼も押すな押すなの満員状態を呈した。下では幾流れとなく板を並べた上に食器を並べて、避難民式に雲集した書生や壮士が入代り立代り飯を喰うので毎日毎日戦争のような騒動である。また階上の翁の部屋では天下のインチキ名士連が翁を取巻いて借錢の後始末、寄附、運動費、記念碑建立、社会事業、満蒙問題など、あらゆる鹿爪らしい問題を提げて、厚顔無恥に翁へ持ちかける。

翁はそんな連中に対して面会謝絶をしないのみか、どんな事を頼まれても否とは云わない。黙々として話を聞き終ると金ならば金、印形なら印形を捺してやつてミジンも躊躇しない。市役所へハキダメの物でも渡すように瞬く間に七十五万円を費消してしまった。残るものは借金取りの催促と、雲集した書生壮士ばかりになってしまった。

それでも、まだ印形や金を借りに来るものがある。しかも以前に、二度と来られないようなインチキで翁を引っかけて行つた人間が、シヤアシヤアと又遣つて来るのである。それでも翁は何も云わずに無理算段をした金を遣り、印形を貸す。翁の一家は、そのために、七十五万円の富豪から一躍、明日の米も無い窮迫に陥ってしまったが、それでも避難民張

りの米喰虫は雲集するばかり……。

或る人が見かねて、

「これはイカン。何とかしてコンナ恥知らずの連中を逐い出さねば、先生の御一家は野タレ死にをしますぞ」

と忠告した。翁はニコニコと笑つて疎髯そせんを撫でた。

「まあそう、急いで逐い出さんでもええ。喰う物が無くなったらどこかへ行くじやろ」

今一つノンセンス。翁と同郷の福岡に的野半助まつのはんすけという愉快な代議士君が居た。（別人

とも聞いているが）この代議士君……頭山先生は人物が出来とるから禅学をやったらキツト成功する……というので翁を掴まえ、禅学を説き立てた。翁は黙つてウンウンとうなずきながら聞いていたが、とうとうこの愉快な代議士君に引っぱり出されて鎌倉の円覚寺に釈宗演和尚しやくそうえんおしょうを訪う事になった。

釈宗演和尚は人も知る禅風練達の英僧、且つ雄弁家で的野代議士の崇拜の的であつた。さるほどに宗演老師は天下の豪傑頭山翁の来訪を喜んで、禅学に就いて弁ずる事良久ややしばし。徐ろに翁に問うて曰く、

「あんたは前にも禅学を志された事がありますかな」

翁曰く、

「ウム。在る。しかし素人じゃ」

「ハハア。誰に就いて御修業なされましたかな」

翁^{そば}傍に小さくなっている背広服の野代議士をかえりみて、

「ナニ。コイツに習うただけじゃ」

釈宗演和尚哑然。

ツイこの間新聞を賑わした法政大学の騒動の時、教授の一人である山崎^{がくどう}樂堂氏が喜多^{きた}文子^{ふみこ}五段の紹介か何かで単身、頭山翁を渋谷の自宅に訪問した。山崎樂堂氏は現代能評界に於ける一方の大御所で、單純率直、達弁の士である。

湯から上つて来た頭山翁は、翁の居間にチヨコンと坐っている樂堂君を見ると突立つたまま云つた。

「君一人か」

「ハイ」

と答えつつ樂堂君は簡単に一礼した。翁はこの時既に法政騒動の成行なりゆきと、樂堂氏の性格に関する概念を掴んでいたらしい事を、この簡単な問答の中から推測し得べき理由がある。

それから樂堂君が持つて生まれた快弁熱語を以て滔とうとう々と法政騒動の真相を披瀝ひれきすると、黙々として聞いていた翁は、やがて膝の前に拃はげられた法政騒動渦中の諸教授の連名に眼を落した。

「ウーム。あんまり複雑で、ワシにはよくわからんがのう。この教授の中で正しい事を主張しよる奴の頭の上に丸を付けてくれんか」

樂堂君ちよつと呆れたが命令通りに自分の味方の諸教授連の頭の上に丸を付けて見せると翁はニコニコと笑顔を見せた。

「フーム。正しい奴の方が、不正な奴よりもズツト多いじゃないか」

「ハイ」

翁はマジマジと樂堂君の顔を見た。

「フフ。意気地いくじがないのう。人数にんずの多い方が負けよるのか」

樂堂君は返事に窮した。こう端的に子供アシライにされようとは思わなかったので、眼

をパチパチさせていると翁は一層ニコニコ出した。

「ウムウム。まあええから、そげな騒動しよる連中を皆一緒にここへ連れて来なさい。わしが聞き役になつてやるけに、両方で議論してみなさい。わしが正しい方に加勢してやる」

山崎樂堂氏は大喜びで帰つてこの旨を全教授に通告した。しかし折角の翁の心入れも、樂堂氏と反対側の諸教授の不出席によつてオジャンとなつたという。法政騒動裏面史の一幕……。

どうしてコンナ巨大な平凡児が日本に出現したかという……つまり頭山満の立志伝を書くのと云われると筆者も少々困る。頭山満翁には、元来立志伝なるものがない。古往今来、あらゆる英雄豪傑は皆、豪^{えら}い者になろうと志を立ててから、その志に向つて勇往邁^{まい}進^{しん}したに相違ない。つまるところ志を立てなければ豪^{えら}い者になれない訳であるが、頭山翁の生涯を見ると、その志なるものを立てた形跡がない。従つてその立志伝なるものの書きようがないから困るのだ。

勿論、頭山翁は若い時代に、維新後の日本が、西洋文化に心酔した結果、日に月に唯物的に腐敗墮落して行く状況を見て、これではいけないぐらいの事は考えたかも知れないが、

それを救うためには自分が先ず^ま大人物にならなければとか、実社会に有力な人物にならなければとか、又は大衆の人氣を集めなければとか、人格者として尊敬されなければ……とかいったようなセセコマしい志を立てた形跡はミジンもない。持って生れた平々凡々式で、万事ありのまんまの手掴みで片付けて来ている。そこが頭山翁の古来ありふれた人傑と違っている点で、その平々凡々式の行き方が又、筆者をして頭山翁を好きにならしめた第一の条件になつてゐるらしいのだ。

事実、頭山翁を平凡人なりと断定されて腹を立てる取巻きの非凡人諸君の中には、頭山翁が超特級の非凡人でなければ差支える連中が多いようである。頭山翁の爪の垢を煎^{せん}じて第一に服^のませてやりたい人間は、頭山翁を取巻くそんな非凡人諸君に外ならないのだ。

維新後、天下の大勢を牛耳つて、新政府の政治と、新興日本の利権とを併せて壟^{ろう}断^{だん}しようとして試みた者は、所謂、薩長土肥の藩閥諸公であつた。その藩閥政治の弊害を打破べく今の議会政治が提唱され初めたものであるが、そもそもその薩長土肥の諸藩士が、王政維新、倒幕の時運に参^{さん}劃^{かく}し、天下の形勢を定めた中に、九州の大藩筑前の黒田藩ばかりが何故に除外されて来たのか。筑前藩には人物が居なかつたのか。もしくは居るとしても、天下を憂い、国を想う志士の氣骨^{きこつ}が筑前人には欠けていたのかという、ナカナカそうで

ない。事実はその正反对で、恐らく日本広しと雖も北九州の青年ほど天性、国家社会を患うる氣風を持つてゐる者はあるまいと思われる。そうした事實は、明治、大正、昭和の歴史に出て来る暗殺犯人が大抵、福岡県人である实例を見ても容易に首肯出来るであらう。

維新前の黒田藩には、西郷南洲、高杉晋作に比肩すべき大人物がジャンジャン居た。流石の薩州も一時は筑前藩の鼻息ばかりを窺つていた位である。有名な野村望東尼を仲介として西郷、高杉の諸豪は勿論、その他の各藩の英傑が盛んに筑前藩と交渉した形勢は、筆者の幼少の時に屢々、祖父母から語つて聞かされた事である。但しそれ等筑前藩の諸英傑が、何故に維新以後、音も香もなくこの地上から消え失せてしまったかという、その根元の理由に考え及ぶと、筆者も筆を投じて暗然たらざるを得ないものがある。

筆者の祖先は代々黒田藩の禄を喰んでいた者だから黒田様の事はあまり云いたくない。しかし何故に維新後に筑前閥が出来なかつたか……という真相を明らかにするためには、どうしても左の二つの事實を挙げなければならぬ事を遺憾とする。

一、当時の藩公が優柔不断であつた事。

二、黒田藩士が上下を問わず人情に篤く、従つて藩公に対する忠志が、他藩の藩士以上に潔白であつた事。

ところでここで今一つ、了解しておいてもらねばならぬ事は、昔の各藩の藩士が日本の国体を知らなかった……換言すれば昔の武士というものは、自分の藩主以外に主君というものは認識していなかった事である。

これは誠に怪^けしからぬ事で、今の人には到底考えられない、同時にあまり知られていない大きな事実で、同時に時節柄、御同様まことに不愉快な史実でもあり得るのであるが、しかしこの史実を認識しないで明治維新の歴史を読んでいると飛んでもない錯覚に陥る事がある。すくなくとも王政維新なる標語を各藩に徹底させるのが、どうして、あんなに骨が折れたのかと不思議の感に打たれるので、黒田藩では特にこうした傾向が甚しかった事が窺われるようである。

そこへ藩公が優柔不断と来ているからたまらない。佐幕派が盛んになると勤王派の全部に腹を切らせる。そのうちに勤王派が盛り返すと今度は佐幕派の全部を誅^{ちゅうりく}戮^{よく}する。そうすると藩士が又、揃いも揃った正直者ばかりで、逃げも隠れもせずにハイハイと腹を切る……といった調子で、最初から一方にきめておけば、どちらかの人物の半分だけは救われたろうに、藩論が変るごとに行き戻りに引つかかってバタバタと死んで行ったのだから

たまらない。とうとう黒田藩の眼星^{めぼ}しい人物は、殆んど一人も居なくなってしまうた。またま脱藩して生野^{いくの}の銀山で旗を挙げた平野次郎ぐらいが目つけもの……という情ない状態に陥った。

しかし世の中は何が仕合わせになるか、わからない。こうした事情で明治政府から筑前閤がノックアウトされたという事が、その後^{のち}に於ける頭山満、平岡浩太郎、杉山茂丸、内田良平等々の所謂、福岡浪人の濶歩^{かつぽ}の原因となり、歴代内閣の脅威となつて新興日本の氣勢を、背後から鞭撻しはじめた。……何も、それが日本のために仕合せであつたに相違ないと断定する訳ではない。随分迷惑な筋もあつたに違いないが、しかしそうした浪人の存在が、西洋文化崇拜の、唯物功利主義の、義理も、人情も、血も、涙も、良心も無い、厚顔無恥の個人主義一点張りで成功した所謂、資本家、支配階級の悩みの種となり、不言不語^{うち}の中に日本人特有の生命^{いのち}も要らず名も要らず、金^{かね}も官位も要らぬ底^{てい}の清浄潔白な忠君愛国思想を天下に普及、浸潤せしめた功績は大いに認めなければならぬであらう。

従つて歴史に現われない歴史の原動力として、福岡人を中心とする所謂九州浪人の名を史上に記念しておく必要がないとは言えないであらう。

勿論浪人と雖もいえど生きた血の通う人間である。家族もあればきんたま辜丸もある。生命もいのち金も官位も要らないとか何とか強情を張るにしても、そんな場面にぶつかると何と何とかが喰い繋いで生きて行かなければならない。況んやその命を捧げた乾児こぶんどもが、先生とか、親分とかいつていしゅう蝟集して、たよりすが縋つて来るに於てをやである。浪人生活の悩みは実に繋つてこの一点に存すると云つても過言でない。

だから……という訳でもあるまいが、彼等浪人生活者の中にはいつもその浪人式の圧迫力を利用して何かの利権をあさ漁っている者が多い。しかしその漁り得た利権を散じて、何等か浪人的立場に立脚した国家的事業に邁進するならばともかく、一旦、この利権を掴むと、今まで骨身にコタエた浪人生活から転向をして、フツツリと大言壮語を止め、門戸を閉して面会謝絶を開業する者が珍らしくない。又はこれを資本として何等かの政権利権に接近し、ついこの間まで攻撃罵倒していた、唯物功利主義者のお台所にしゅつにゅう出入して、不純な榮華に膨れ返っている者も居る。もつとも、そんなのは浪人の中でも、第一流に属する部類で、それ以下の軽輩浪人に到つては、浪人と名づくるのも恥かしいヨタモンとなり、ギヤングとなり、又は、高等乞食と化しつつ、自分の良心は棚に上げて他人の良心の欠陥を攻撃し、頼まれもせぬのに天下国家、社会民衆の事を思っているのは自分一人のような事

を云つて、放蕩無頼の限りをつくし、親兄弟を泣かせている者も居る。生命が惜しくて名誉が欲しくて、金や職業が、焦げつくほど欲しい浪人が滔々として天下に満ち満ちている状態である。

その中に吾が頭山満翁は超然として、一依旧様、金錢、名譽などは勿論の事、持つて生れた忠君愛国の一念以外のものは、数限りもない乾分、崇拜者、又は頭山満の沽券と雖も、往來の古草鞋ぐらいにしか考えていないらしい。否現在の頭山満翁は既に浪人界の巨頭なぞいう俗な敬称を超越している。そこいらにイクラでも居る好々爺ぐらいにしか自分自身を考えていないらしい。

嘗て筆者は数寄屋橋の何とか治療の病院に通う翁の自動車に同乗させてもらったことがある。その時に筆者は卒然として問うた。

「どこか、お悪いのですか」

「ウム。修繕りよるとたい。何かの役に立つかも知れんと思うて……」

その語氣に含まれた老人らしい謙遜さは、今でも天籟の如く筆者の耳に残っている。

以下は筆者が直接翁から聞いた話である。

「世の中で一番恐ろしいものは嬪かかあに正直者じゃ。いつでも本気じゃけにのう」

「四五十年も前の事じゃった。友達の宮川太一郎が遣つて来て、俺に弁護士になれと忠告しおった。これからは権利義務の世の中になって来るけに、法律を勉強して弁護士になれと云うのじゃ。その後、宮川は牛乳屋をやつておったが、まだ元気で居るかのう。俺に弁護士になれと云うた奴は彼奴あいつ一人じゃ」

又或時傍の骨格逞しい眼付きの凄い老人に筆者を引合せて曰く、

「この男は加波山事件かばさんの生残りじゃ。今でも、良え荷物え（国事犯的仕事。もしくは暗殺相手の意）があれば直ぐに引つ担いで行く男じゃ」

「西郷南洲の旧宅を訪うたところが、川口雪蓬せつほうという有名な八釜やかまし屋の爺おやじが居った。ドケナ（如何なる）名士が来ても頭ゴナシに叱り飛ばして追い返すという話じゃったが、俺は南洲の遺愛の机の上に在る大塩平八郎の洗心洞せんしんどう記きを引つ掴ふんで懷中ふところに入れて来た。それは南洲が自身で朱筆を入れた珍らしいものじゃったが、その爺おやじが鬼のようになって飛びかかつて来る奴を、グツと睨み付けてサツサと持つて来た。それから俺は日本廻国をは

じめて越後まで行くうちに、とうとうその本を読み終ったので、町^{ていねい}に礼を云うて送り返しておいたが、ちよつと面白い本じゃったよ」

これ程の豪傑、頭山満氏がタツタ一つ屁^へ古^こ垂^たれた話が残っているから面白い。

その日本漫遊の途次、越後路まで来ると行けども行けども人家の無い一本道にさしかかった。同伴者がペコペコに腹が減っていたのだから無論、大食漢の頭山満氏も空腹を感じていたに相違ないのであるが、何しろ飯屋は愚か、百姓家すら見当らないので、皆空腹を抱えながら日の暮れ方まで歩き続けた。

そのうちに、やつと一軒の汚ない茶屋が路^{みちばた}傍に在るのを発見したので、一行は大喜びで腰をかけて、何よりも先に飯を命じた。ちようど頭山満氏が第一パイ目の飯を喰い終るか終らない頃、その茶屋の赤ん坊が、頭山満氏のお膳の上の副食物を眼がけて這いかかつて来るうちに、すこしばかり立上ったと思うと、お膳の横に夥しい粘液を垂れ流し、その上に坐つて泣き出した。

それと見た茶屋の女房が、直ぐに走り上つて来て、何かペチャクチャ云い訳をしながら、自分の前垂れを外して、その赤ん坊の尻を拭い上げて、その粘液の全部を前垂れにグシャ

グシャと包んで上り口から投げ棄てると、そのまま臭気芬々たる右手を頭山満氏の前に差出した。

「ヘイ。あなた、お給仕しましょう。もう一杯……」

頭山満氏黙々として箸^{はし}を置いた。

「モウ良^ええ。お茶……」

頭山翁の逸話は数限りもない。別に一冊の書物になっている位だからここにはあまり人の知らないものばかりを選んで書いた。あんまり書き続けているうちに、諸君の神経衰弱が全癒^{なお}り過ぎては却^{かえ}つて有害だからこの辺で大略する。

次は現代に於ける快人中の快人、杉山茂丸翁に触れて見よう。

杉山茂丸

杉山茂丸^{しげまる}なる人物が現代の政界にドレ位の勢力を持っているか、筆者は正直のところ、全然知らない。どんな経歴を以て、如何なる体験を潜りつつ、あの物すごい智力と、不屈^{ふくつ}不撓^{ふたう}の意力とを養い得て来たかという事すら知らない。恐らく世間でも知っている人はあるまいと思われるので、筆者が知っているのは、そこに評価の不可能な彼……杉山茂丸の真面目^{しんめんもく}がスタートしている事と、同時に、そうであるにも拘らず^{かかわ}、その古今の名探偵以上の智力と、魅力とをもつて、政界の裡面を縦横ムジンに馳けまわり、馳け悩まして行く、その怪活躍^{こんにち}ぶりが今日まで、頭山満翁と同様に、新青年誌上に紹介されないのは嘘だという事を知っているのみである。

杉山茂丸は福岡藩の儒者の長男として生れた。そうして維新改革後、父母と共に先祖伝

来の知行所に引込み、そこで自ら田を作り、鋤^{くわ}の柄や下駄を製作し、又は父から授かった漢学を父の子弟に講義し、小学校の先生もつとめた事もあるという。その他の智識としては馬琴^{ばきん}、為永^{ためなが}の小説や経国美談、浮城物語^{うきしろ}を愛読し、ルッソーの民約篇とかを多少嗜^{かじ}っただけである。中村正直^{まさなお}訳の西国立志篇を読んだか読まぬかはまだ聞いた事がないが、いずれにしても杉山茂丸事、其日庵主^{きじつあんしゅ}の智情意を培^{やしな}った精彩が、右に述べたような漢学一^ひと通りと、馬琴、為永、経国美談、浮城物語、西国立志篇程度のもので、これに、後年になつて学んだ義太夫の造詣^{ぞうけい}と、聞き囁^{ささや}り式に学んだ禅語の情解的智識を加えたら、彼^{かれ}の精神生活の由来するところを掴むのは、さまで骨の折れる仕事ではあるまい。勿論彼の先天的に持つて生まれた智力と、勇氣は別問題にしての話である。

明治と共に生れ、明治と共に老いて来た彼は明治維新の封建制度破壊以後、滔々^{とうとう}として転変推移する、百^{ひゃく}色^{いろ}眼鏡式の時勢を見てじつとしておれなくなった。このままに放任しておいたら日本は将来、どうなるか知れぬ。支那から朝鮮、日本という順に西洋に取られてしまうかも知れぬと思つたという。その時代の西洋各国の強さ、殊に英国や露西亞^{ロシア}の強さと来たら、とても現代の青年の想像の及ぶところではなかつたのだから……。

杉山茂丸は茲ここに於て決然として起たつた。頑固一徹な、明治二十年頃まで丁ちん髻まんげを戴いて、民百姓は勿論、朝野の名士を眼下に見下していた漢学者の父、杉山三郎平かんえん灌園を説き伏せて隠居させ、一切の世事に関与する事を断念させて自身に家督を相続し、一身上の自由行動の権利を獲得すると同時に、赤手空拳、メクラ滅法の火の玉のようになって実社会に飛出したのが、彼自身の話によると十六歳の時だったというから驚く。大学を卒業してもまだウジウジしていたり、親から月給を貰つてスイートホームを作つたりしている連中とは無論、比較にならない火の玉小僧であつた。

その頃、彼の郷里、福岡で、豪傑ゴツコをする者は当然、一人残らず頭山満の率ゆる玄洋社の団中に編入されなければならなかつた。だから彼も必然的に頭山満と交まじわりを結んで、濛々たる関羽髯かんうひげを表道具として、玄洋社の事業に参劃し、炭坑の争奪戦に兵站へいたんの苦勞を引受れたり、有名な品川弥二郎の選挙大干渉に反抗して壮士を指揮したりした。それが彼の二十歳から二十四五歳前後の事であつたろうか。

しかし彼は他の玄洋社の諸豪傑連と聊いささか選せんを異にしていた。その頃の玄洋社の梁山りやうざん泊く連は皆、頭山満を首領とし偶像として崇拜していた。頭山満が左の肩を揚げて歩けば、玄洋社の小使まで左の肩を怒らして町に行く。頭山満が兵児帯へこおびを掴めば皆同じ処を掴む：

：といった調子であつたが、杉山茂丸だけはソナ真似を決してしなかった。否、むしろ玄洋社のこうした気風に対して異端的な考えをさえ抱いていたらしい事が、玄洋社を飛出してから以後の彼の活躍ぶりによつて窺うかがわれる。

彼は玄洋社の旧式な、親分乾分こぶん式の活躍、又は郷党的な勢力を以て、為政者、議會等を圧迫脅威しつつ、政界の動向を指導して行く遣口やりぐちを、手ぬるしと見たか、時代後れおくと見たか、その辺の事はわからない。しかし、たしかにモット近代的な、又は實際的な方法手段をもつて、独力で日本をリードしようと試みて来た人間である事は事實である。

事實、彼には乾兒こぶんらしい乾兒は一人も居ない。乾兒らしいものが近付いて来る者はあつても、彼の懷中ふところから何か甘い汁を吸おうと思つて接近して来る者が大部分で、彼の人格を敬慕するというよりも、彼の智慧と胆力を利用してようとする世間師の部類に属する者が多く、それ等の煮ても焼いても喰えない連中を巧みに使いこなして自分の仕事に利用する。そうして利用するだけ利用して最早もはや使い手がないとなると弊履へいりの如く棄ててかえりみないところに、彼の腕前のスゴサが常に發揮されて行くのである。嘗て筆者は彼からコンナ話を聞いた。

「福沢桃介という男が四五年前に、福岡市の電車を布設するために俺に接近して来たことがある。俺は彼に利用される振りをして、彼の金かねを数万円使い棄てて見せたら、彼奴めきやつ、驚いたと見えて、フツツリ来なくなってしまった。ところが、この頃又ヒョッコリ来はじめたところを見ると、何喰わぬ顔をして俺に仇討あだうちをしに来ていろいろ面白いじゃないか。だから俺も一つ何喰わぬ顔をして彼奴に仇あだを討たれてやるんだ。そうして今度は前よりもウンと彼奴の金を使つてやるんだ。事によると彼奴めが俺に仇あだを討ち終おせた時が身代限りをしている時かも知れぬから見ておれ」

因ちなみに彼……杉山其日庵主は、こうした喰うか喰われるか式の相手に対して最も多くの興味を持つ事を生涯の誇りとし楽しみとしている。そうして未だ嘗て喰われた事がないことを彼に対して野心を抱く人々の参考として附記しておく。

話がすこし脱線したが、其日庵主は玄洋社を離脱してから海外貿易に着眼し、シャンハイ上海や香港ホンコンあたりを馳けまわつて具つぶさに辛酸を嘗なめた。

その上海や香港で彼は何を見たか。

その頃は支那に於ける欧米列強の国権拡張時代であつた。従つて彼、杉山茂丸は、その

上海や香港に於て、東洋人の霊と肉を搾取しつつ鬱積し、醜酔し、糜爛し、毒化しつつ在る強烈な西洋文化のカクテルの中に、所謂白禍の害毒の最も惨烈なものを看取したに違いない。資本主義文化が体现するところの、虚無思想、唯物思想の機構の中に、血も涙も無い無良心な、獸性丸出しの優勝劣敗哲学と、功利道德の行き止まり状態を発見したに違いない。そうして王政維新後、滔々たる西洋崇拜熱と共に鵜呑みにされて来た、こうした舶来の思想に侵犯され、毒化されて行きつつ在る日本の前途を見て、逸早く寒毛樹立したに違いない。

当時の藩閥と、政党者流の行き方は、正にこの西洋流の優勝劣敗哲学、唯物一点張りの黄金崇拜式功利道德の顕現であつた。外国の政治組織を日本の政体の理想とし、權利義務式の功利道德、法律的理論を以て日本の国体を論じ合いつつ上下共に怪しまなかつた時代であつた。

その中に、藩閥にも属せず、政党の真似もしない玄洋社の一派は、依然として頭山満を中心として九州の北隅に蟠まりつつ、依然として旧式の親分乾分、友情、郷党関係の下に、国体擁護、国粹保存の精神を格守しつつ、日に日に欧化し、墮落して行く藩閥と政党を横目に睨んで、これを脅威し、戦慄せしめつつ、無けなしの錢を掻き集めては朝鮮、満蒙等

の大陸的工作に憂身^{うきみ}を寔^{やつ}して来た。

その中に政党屋流にも墮せず、玄洋社流にも共鳴しなかった彼、杉山其日庵主は、単身孤往^{こわう}、明治後半期の政界の裡面にグングンと深入りして行つた。

「玄洋社一流の真正直に国粹的なイデオロギーでは駄目だ。将来の日本は毛唐と同じような唯物功利主義一点張りの社会を現出するにきまつている。そうした血も涙も無い惨毒そのもののような社会の思潮に、在来の仁義道德『正直の頭^{こゝろ}に神宿る』式のイデオロギーで対抗して行こうとするのは、西洋流の化学藥品に漢法の振出し薬を以て対抗して行くようなものだ。その無敵の唯物功利道德に対して、それ以上の権謀術数と、それ以上の惨毒な怪線を放射して、その惨毒を克服して行けるものは天下に俺一人しか居ない筈だ。だから俺は、俺一人で……ホントウに俺一人で闘って行かねばならぬ。俺みたいな人間はほかに居る筈がないと同時に、俺みたいな真似は他人にさせてはならないのだ。だから俺は、どこまでも……どこまでも俺一人で行くのだ」

彼は若いうちに、そう悟り切ってしまったらしい。そうして今日までもこうした悟りを以て生涯を一貫して行く覚悟らしく見える。

それから後の彼は實際、目的のために手段を選まなかった。そうして乾児らしい乾児を一人も近づけないまま、万事タツタ一人の智慧と才覚でもって着々として成功して来た。彼はソレ以来いつも右のポケットに二三人の百万長者を忍ばせていた。そうして左のポケットにはその時代時代の政界の大立物を二三人か四五人忍ばせつつ、彼一流の活躍を続けて来た。「俺の道楽は政治だ」と口癖のように彼は云い続けて来たのであるが、しかし彼が果して、どんな政治を道楽にして来たか、知っている者は一人も居ない。同時に彼の左右のポケットに入れられている財界、政界の巨頭連が、どうして彼のポケットに転がり込んで来たか……もしくは転がり込ませられて来たか、知っているものは一人も居ないようである。そうして唯驚いて、感心して、彼の事を怪物怪物と評判して、彼のためにチンドン屋たるべく利用されているようである。

事實、彼は現代に於ける最高度の宣伝上手である。彼に説明させると日清日露の兩戦争の裡面の消息が手に取る如くわかると同時に、その兩戦役が、彼の指先の加減一つで火蓋を切られた事が首肯されて来る。世人はだから彼を綽名して法螺丸あだな ほうまるという。しかし一旦、彼に接して、彼の生活に深入りしてみると、その兩戦役前後に於ける朝野の巨頭連は皆、

彼の深交があつた事がわかる。事ある毎に彼に呼び付けられて、お説教を喰つて引退つていた事が、事実上に証明されて来る。そこで、イヨイヨホントウに心の底から驚いて、彼に何等かの御利益を祈願すべく、お賽銭さいせんを懐ふところにして参詣して来る実業家が何人居るかわからない。そうして彼が絶対にお賽銭を取らない神様である事がわかるにつれてイヨイヨ崇拜敬慕の念を高める事になつて来る。

そんな人間にはイクラ云つて聞かせる者が居てもわからない。

「君は法螺丸の法螺に引つかかっているのだ。そんな朝野の名士連は、皆、法螺丸に一身上の秘密や弱点を握られているか又は、彼等自身が法螺丸の巧妙、精密を極めた話術に魅せられて、法螺丸にそれだけの実力があるものと信じさせられているのだ。彼が古今無双のシャーロック・ホームズであると同時に、前代未聞のアルセーヌ・ルパンである事を君は知らないのだ。彼はそんな調子で現代日本の政界財界に、あらゆる機会を利用して法螺の空小切手からを濫発らんぱつしている。その空小切手を掴んだ連中は、その空小切手を潰されちゃ堪らないもんだから、寄つてたかつてその空小切手を裏書きすべく余儀なくされているのだ。福沢桃介が法螺丸にシテヤラレた話だつて、眉唾まゆつばものかも知れないんだよ」

と狐を落すように卓テーブルをたたいても、

「イヤ。たしかに法螺丸は豪いえらと思うね。それだけの空小切手を廻すだけでも、並の人間には出来ない事じゃないか」

といったような事になってしまう。

事実、法螺丸の法螺は、大隈重信の法螺とは段違いのところがある。少くとも大隈重信の法螺は、百科辞典の範疇を出でないのに対して、法螺丸の法螺はたしかに百科辞典を超越した一種の洒落氣しゃれけと魔力とを兼ね備えている。たとえば医学博士を掴まえて医術の講釈をこころみ、禅宗坊主を向うに廻わして禅学の弊害を説教する。三井物産の重役が来ると不景気の救済策を授け、外務大臣が来ると軍部の實力を説いて感心させ、軍部の首脳部と会谈すると外交の妙諦を説法して頭を搔かせる。皆、彼、法螺丸一流の悪魔のような理解力と、記憶力を基礎として、彼一流の座談の妙諦を駆使した、所謂、巧妙な空小切手であるのみならず、三時間でも五時間でもタツタ一人で喋舌しゃべつておいて、そんな連中が帰ると直ぐに、あとから訪問して待っていた客に、

「イヤ。どうもお待たせしました。彼奴きやつが来ると長尻でね。僕の所を煩悶解決所と心得て一人で喋舌しゃべつて帰るのですね」

なぞとズバズバやるので、相当気の強い連中でもグラグラと参ってしまふ。法螺丸の法螺がイヨイヨ後光がさして来る事になる。

次に、法螺丸の法螺の実例を列举してみる。

医学博士を掴まえて曰く、^{いわ}

「医者という商売は、商売とは云えませんが。何より先に脈を手取る瞬間から、こいつを殺してやろうとは思っていない。たしかに助けてやろうと思っているのだから、商売とは云い条、全然、商売気を離れている。人の面さ^{つら}え見れば儲けてやろうと思っている奴ばかり多い世の中にタツタ一つ絶対に信用出来るのはお医者様ですね」

と来るから大抵の医学博士は感心してしまう。すっかり喜んでしまつて、自分の苦心談や、研究の内容なぞをドン底まで喋舌つてしまふ。法螺丸は又、そいつを地獄耳の中に細大洩らさずレコードしておいて、ほかの医学博士に応用する。

「独逸^{ドイツ}の医学も底が見えて来ましたね。たとえばインシュリンの研究なんか……」

なぞと引つ冠^{かぶ}せて来るから肝を潰してしまふ。その肝の潰れた博士を選んで法螺丸は、政界の有力者の処へ腎臓病のお見舞に差し遣わすのだから深刻である。

禅宗坊主が寄附を頼みに来ると法螺丸曰く、

「禅宗は仏教のエキスみたいなものですな。面壁九年といって、釈迦一代の説法、各宗の精髓どころを達磨だるまという蒸溜器ランビキに容れて煎せんじて、煎じて、煎じ詰める事九年、液体だか気体だかわからない。マツチで火を点つつけるとボーツと燃えてしまつて、アトカタも残らない。最極上のアルコールみたいな宗旨が出来上つた。ところで、それは先ず結構としても、その最極上のアルコールをアラキのまま大衆に飲ませようとするからたまらない。大抵の奴は眼を眩まわして引つくり返つてしまふ。それから中毒を起して世間の役に立たなくなる。物を言いかけても十分間ぐらい人の顔をジイツと見たきり返事をしないような禅宗カブレの唐変木とうへんぼくが出来上る。又は浮世三分五厘ぶりん、自分以外の人間はミンナ影法師ぐらいにしか見えない。義理人情を超越してしまうから他人の物も自分のものも区別が付かない。女も、酒も、金も、職業も要らない。その代り縦の物を横にもしない。電車に乗せるたんびに終点まで行つてしまうような健康な精神病者や痴呆患者が出来上る。そんな禅宗病患者が殖ふえたら日本は運の尽きだと思ひますよ。私も考えますから、貴方がたもよく考えて下さい」といったような事を云われると、相手も宗教の問答に來たのじゃない。寄附を頼みに來た弱味があるのだから歩ふが悪い。「喝かつ」とも何とも云わずに歸つてしまふ。

潰れかかった銀行屋さんが来て、救いを求めると、法螺丸は背中を撫でてやらんばかりにして慰める。曰く、

「そんなに心配しているとその心配で銀行が潰れてしまうよ。百円紙幣が銀行を経営しているのじゃない。人間が百円紙幣を使つて銀行をやっているんだから、人間さえシツカリしておれば、潰れる氣づかいはないもんだよ。金が無くなると同時に銀行が潰れるように思うのは、世間を知らないで算盤ばかり弾いている人間特有の錯覚なんだよ。ウンと頑張り給え。世間は広いんだ。人間万事、氣で持つて行くんだ。金なんか氣持ちの家来みたいなもんだ。コンナ話がある聞き給え。二百万や三百万の金は屁でもなくなる話だ。

日清戦争以前の事だったが、支那の横暴を憎み、露西亞の東方経略を警戒した玄洋社の連中が、生命知らずの若い連中を満蒙の野に放つて、恐支病と恐露病に陥っている日本の腰抜け政府を激励し、止むを得なければ玄洋社の力で戦争の火蓋を切つてやろうというので、寄ると触ると腕を撫でたり四股を踏んだりしたもんだが、生憎な事に金が一文も無い。むろん頭山満も貧乏の天井を打っている時分だ。俺にも相談だけはしてくれたが、三月縛り三割天引という東京切つてのスゴイ高利貸連を片端から泣かせて、

かくばかりたふしても武蔵野の

原には尽きぬ黄金草こがねぐさかな

なんてやつてた時代だから満蒙経営どころか、わが家賃を払うのすら勿体ない非常時なんだ。

そこへ誰が聞いて来たか、ドエライ話が転がり込んで来たもんだ。その頃まだ元気で居た日本一の正直物、大井憲太郎という爺さんが、眼の色を変えて担ぎ込んだ話のようにも思うが、とにかくこんな話だ。……その頃まで北海道の砂金といったらカリフォルニアの向う張る勢いで、しかも夕張川の上流の各支流の源泉附近は到る処、砂金ならざるなしという評判で、全国の成金病患者がワンワンと押しかけていたものだ。……ところが不思議な事に、その砂金が、本流の夕張川の下流に在る名前は忘れたが一つの大きな滝を段階として、その下流には一粒の砂金も見当らない。つまるところ、その滝壺の底にはイザナギ、イザナミの尊みこと以来、沈澱している砂金が、計算してみると四百億円ぐらいは在るらしい……というのだ。エライ事を考えたもんだ。

これには流石さすがの頭山満もチョイト本気になったらしい。俺も貧すれば鈍するでスツカリ共鳴してしまつて技師を派遣する費用の調達を引受ける事になった。つまりその滝の横に

運河を掘ってその滝の上流を堰き止めて、滝壺の水を掻き干して、底の方に溜まっている四百億円の砂金をスコップで貨車へ積み込もうという曠古の大事業だ。その費用を調達のために俺は白真剣になつて東奔西走したものだ。その頃雇つていた抱え俵の車夫に、もしこの事業に成功した暁には、貴様に米俵一杯の砂金を遣ると云つたもんだから、真に受けた俵夫の奴め真夏の炎天をキチガイのように走りまわつたものだが、一方にこの話が玄洋社の連中に伝わつた時の壮士連の活気付きようと来たら、それこそ前代未聞の壮観だったね。四百億円あれば、朝鮮、支那、満洲、手に唾して取るべしと云うのだ。アトは宜しくお願いしますというので弦を離れた矢のように、手弁当でビュービューと満洲へ飛んで行く。到る処に根を下し、羽根を拡げて、日本内地から来る四百億円を待っている……という勇敢さだ。その中に俺の軍資金調達が不可能になつて、この話はオジャンになつた。一番残念がつたのは俺の俵屋だったが、満洲に根を下した豪傑連は、そんな事はわからない。一秒もジツとしておれない連中だからグングンと活躍を続けて行く。日清日露の両戦役に彼等の活躍がドレ位助けになつたかわからない。現在の満洲国の独立は夕張川の四百億円の御蔭と云つてもいい位だ。否、玄洋社連の四百億円の夢が、満洲に於て現実化されたと云つてもいいだろう。世の中というものは、そんなものだ。シツカリさえしておれ

ば恐ろしい事はない。気を大きく持つて時節を待ち給え。四百億円というと大戦後の独逸を、カイゼルもヒンデンブルグもヒトラーもコミにして丸ごと買える金額だからね。それ位の夢は時々見ていないと早死にするよ。ハハハハ」

可哀相にスツカリ気まりが悪くなつた銀行家は、法螺丸の俤くるまひ引きにも劣るというミジメな烙印を捺おされて、スゴスゴと歸つて行く。

デモクラシーと社会主義の華やかなりし頃、法螺丸の処に居る秘書役みたいな書生さんが、或る時雑誌を買つて来て、その中に書いてあるサンジカリズムの項を、先生の法螺丸氏に読んで聞かせた。するとその翌あぐる日のこと、東京市長をやつていた親友の後藤新平氏が遣つて来たので、法螺丸は早速引つ掟おえて講釈を始めた。

法螺丸「貴公はこの頃仏蘭西フランスで勃興しているサンジカリズムの運動を知っているか」

後藤新平「何じやいサンジカリズムというのは……」

法螺丸「これを知らんで東京市長はつとまらんど。今の社会主義やデモクラシーなんぞよりも数層倍恐ろしい破壊思想じや」

後藤新平「ふうむ。そんな恐ろしい思想があるかのう。話してみい」

法螺丸「心得たり」

というので、昨日聞いたばかりのホヤホヤのサンジカリズムの話を、その雑誌丸出しの内容に輪をかけたケレンやヨタ交りに、面白おかしく講釈すること約二時間、流石の後藤新平氏も言句も出ずに傾聴すると「シンペイ」するなども何とも云わずに、大急ぎで帰って行つた。アトに昨日雑誌を読んで聞かせた書生さんが手に汗を握つたままオロオロしているのに気が付いた法螺丸、ハツとするにはしたらしいが、何喰わぬ顔で、

「面白いだろう。後藤新平というのは存外正直もんじやよ」

そもそも杉山法螺丸が、どこからこれ程の神通力を得て来たか。生馬の眼を抜き、生猿きざるの皮を剥はぎ、生きたライオンの歯を抜く底ていの神変不可思議の術を如何なる修養によつて会得して来たか。

請う先ず彼の青年に説くところを聞け。

「竹片たけぎれで水をタタクと泡が出る。その泡が水の表面をフワリフワリと回転して、無常の風に会つて又もとの水と空気にフツと立ち帰るまでのお慰みが所謂人生という奴だ。それ以上に深く考える奴がすなわち精神病者か、白痴で、そこまで考え付かない奴が所謂オツチヨコチヨイの蛆虫うじむし野郎だ。この修養が出来れば地藏様でも閻魔大王えんまでも手玉に取れる

んだ。人生はそう深く考えるもんじやない。あんまり深く考えると、人生の行き止まりは三原山と華嚴の滝以外になくなるんだ。三十歳まで大学に通ってベースボールをやる必要なんか無論ないよ」

「其日庵という俺の雅号の由来を知っているかい。これは俺の処世の秘訣なんだから、少々惜しいが説明して聞かせる。論語の中で会参は日に三度己みたがのれをかえりみると云った。基督キリスは一日の苦勞は一日にて足れりと云ったが、俺は耶穌やそ教ではないが其日暮そのひぐらしが一番性に合っているようだね。……まず……朝起きると勿々から飯を喰う隙もないくらいジャンジャン訪問客が遣つて来る。一番多いのが就職口と高利貸で、親の脛すねを噛じつて野球をやったり、女給の尻を嗅ぎまわったり、豆腐屋の喇叭ラッパみたいな歌を唄ったりした功勞によつて卒業免狀という奴を一枚貰うと、そいつをオデコの中央に貼り付けて就職の權利でも授かった気で諸官庁会社を押しまわる。親爺おやじも亦親爺またで、倅せがれを育てるのと債券を買うのと同じ事に心得ているんだから遣り切れない。そこで就職出来ないとなると世の中が悪いと云つて俺の処へ訴えに来る。俺が世の中じやなし、知つた限りではないんだが、そんな連中もたしかに世の中の一部で、所謂大衆に相違ないんだから仕方なしに俺の責任みたやうな顔をして文句を聞いてやるんだ。高利貸は又高利貸で、勝手に俺の印いんぎよう形を信用し

て、手前一存の条件を附けて貸しやがった連中だ。中には一面識もない奴の借錢も混っているんだが、俺が議会に命じて作らせた法律というものを楯に取って来るから仕方ない。日歩五錢ぐらいを呉れるつもりで会ってやるんだ。その次が大臣病患者、政権利権の脾胃^{ひび}虚病^{きよや}み、人格屋の私生児の後始末、名家名門の次男三男の女出入りの尻拭い、ボテレン芸者の身上相談、鼻垂れ小僧と寝小便娘の橋渡しに到るまで、アラユル社会の難物ばかりが、ハキダメみたいに杉山博士の診察、投薬を仰ぎに来る。しかもどの患者もどの患者も方々の名医の処を持つてまわって、コジラかした上にもコジラかした救うべからざる鼻ポンや骨がらみばかりがウヨウヨたかつて来るんだから敵^{かな}わない。

もつともそういうこつちもお上^{かみ}に鑑札を願っている専門医じゃないのだから、診察料や薬札は一切取らない。その代りに万一助からなくなつて責任は無い。殺すつもりで生かしたり、生かすつもりで殺したりする事も珍らしくないんだが、毛頭怨まれる筋はないんだから呑気な商売だ。ともかくも会ってやつて、ともかくも病状を聞いてやる。金が有れば払ってやる。面識がある奴には紹介してやる。信用があれば小切手でも何でも書いてやる。それでも方法の附かない難物は、考えておいてやるから明日来いと云つて一先^{ひとま}ず追っ払っておく。むろん明日来たつて明後日^{あさって}来たつて成算の立ちっこない難物ばかりだが、アトは

野となれ山となれだ。その日一日を送りさえすればいいのだから、他人の迷惑になろうが、後になつて大事件になることが、わかり切つていようが構わない。盲目滅法に押しまくつてその日一日を暮らす。それから妻子や書生の御機嫌取りだが、これも生きている利子と思えば何でもない。好きな小説本か何か読んで何も考えずに寝てしまふ。

サテ翌る朝になつたと見えて雀の音がする。パツチリと眼を開くとサア今日こそは大変な日だぞ。昨日の尻は勿論の事、一昨日、再昨日……昨年、一昨年の尻が一時に固まつて来る日だぞと覚悟して待つているとサア来るわ来るわ。あらん限りのヨタや出鱈目を並べたり、恩人を裏切つたり、正直者を欺したりした方法でもって押し送つて来た過去の罪業が、一時に閨の声をあげて押しかけて来る。貴様が教えた通りに喋つたら議会の空気が悪化して解散になりそうになつた。万一解散になつたら俺は一文も運動費が無いとあれほど云つておいたではないか、という代議士や、貴方のお世話で娘を嫁に遣つたら相手は梅毒の第三期だつたと大声をあげて泣く母親や、先生から貰つた小切手は銀行で支払いませんというのや、貴方の紹介状に限つて大臣は会わないと云います。其日庵の紹介には懲り懲りだという話です。お蔭で会社が潰れて二百名の職工が路頭に迷いますというのや、貴方の乾分の弁護士のお蔭で三年の懲役が五年になりました。そのお礼を申上げに來ました

という紋々もんもん俱利迦羅くりからなんどが、眼の色を変えて三等急行の改札口みたいに押かけて来る。地獄に俺みたいな仏様が居るか居ないか知らないが、居るとしたら読むお経は一行も無いね。空気が在るから仕方なしに生きている。生きているから腹が減るのは止むを得ないという連中ばかりが、元来持つて行き処のない尻を俺の処へ持つて来るんだ。まあまあ待つたり、君等は自分の用事さえ済めば、アトは俺が死んでも構わない了りようけん。簡かんだろう。自分の尻を他人に拭いてもらう奴を小児こどもといい、自分の垂れ物を自分で片付ける奴を大人という。君は元来大人なのか小供なのか。前をまくつて見せろ……とか何とか云つて追つ払つてしまうが、その手の利かない奴は、仕方がないから前に倍した手酷い手段で押し片付けて行く。明日の事は考えない。きようさえ片付けばいいという方針だから、何を持つて来たつて驚かないんだ。

尤ももつとこの頃は年を老とつたせいとか、人に会うのと、字を書くのが大儀になった。心臓にコタエて息が切れたり脈が結けつ滞たいしたりするから、面会と字書きを御免蒙まうっている。一方から云うと、そんな自分の尻を持つて余しているような連中の尻をイクラ拭いてやったつて相手は当り前だと心得ている。俺に尻を拭いてもらうのを楽しみにイクラでも不始末を仕出かす事になる。結局、そんな世話を続行するのは日本亡国の原因を作るようなものだとつ

くづくこの頃思い当ったせいでもあるんだがね」

こうして縷述るじゆつして来ると彼の法螺の底力は殆んど底止ていしするところを知らない。

「自ら王将を以て任ずる奴は天下に掃き棄てる程居る。金將たり、銀將たり、飛車角、桂香を以て自ら任じつつ飯喰い種にして行く者が滔々として皆然しかりであるが、その飯喰い種を皆棄てて、将棋盤の外にいて将棋を指している奴は、なかなか居るものでない。だから世間の事が行き詰まるんだ。あぶなくて見ていられなくなるんだ」

という、頭山満以上の超凡超聖的彼自身の自負的心境を、そっくりそのまま認めてやらなければならなくなつて来るのであるが、彼とても人間である。時と場合によつては平凡人以下の血もあり涙もあるばかりでない。彼の手に合わない人物も多少は出現して来るのだから面白い。

頭山満曰く、

「杉山みたような頭の人間が又と二人居るものでない。彼奴は玄洋社と別行動を執とつて来た人間じやが、この間久し振りに合つた時には俺の事を頭山先生と云いおつた。ところがその次に会つた時は『頭山さん』とさん付けにして一段格を落しおつたから、感心して見

ていると、三度目に会った時は頭山君と云うて又一段調子を下げおった。今に俺を呼び棄ての小僧扱いにしおるじやろうと思うて楽しみにして待つとる」

これは杉山法螺丸の一番痛いところに軽く触れた言葉で、実に評し得て妙と云うよりほかはない。

又或る時、杉山法螺丸が何かのお礼の意味か何かで、頭山満に千円以上もする銘刀を一口贈った事がある。無論、飛切り上等の拵こしらえ付きで、刀剣道樂の大立物其日庵主が自慢のシロモノであつたが、その後、法螺丸が頭山満を訪問して、

「どうだ。あの刀は氣に入つたか」

と云うと頭山満ニツコリして曰く、

「うむ。あれはええ刀じやつた。質屋に持つて行つたら三十円貸したぞ。又あつたら持つて来てくれい」

其日庵主もこれには少々驚いたらしい。歸つて来て曰く、

「モウ頭山に物は遣らぬ。あいつの伴に遣つた方がええ」

法螺丸には男の児が一人しか居ない。これが親仁おやじとは大違いの不肖の子で、

「俺みたいな人間になる事はならぬぞ」

という訓戒を文字通りに固く守つて、托鉢坊主になったり、謡曲の師匠になったり又は三作文士になったりして文字通りに路頭に迷いそうなので、親仁も呆れて、感心な奴だと賞めながら月給を支給している。

「俺の倅は実に呆れた奴だ。小説を出版してくれと云うから読んでやると、最初の一二行読むうちに、何の事やらわからなくなる。屁へのような事ばかりを一生懸命に書き立てているのでウンザリしてしまう。たまたま俺にわかりそうな処を読んでみるとツイこの間、ヒドク叱り付けてやった俺の云い草をチャント記憶おぼえていやがって、そっくりその通りを小説の中味に採用していやがるのには呆れ返った。娘を売って喰う親は居るが、親を売って喰う倅が居るもんじやない。一生涯あの倅だけは叱らない事にきめた」

因ちなみに、その倅の筆名ペンネームは夢野久作という。親父の法螺丸が山のように借錢を残して死んでやろうと思つてゐるとは夢にも知らずに、九州の香椎かしいの山奥で、妻子五人を抱えて天然を楽しんでいる。焼野の雉子きぎす、夜の鶴。この愚息なぞも法螺丸にとっては、頭山満と肩を並べる程度の苦手かも知れない。

奈良原到

(上)

前掲の頭山、杉山両氏が、あまりにも有名なのに反して、両氏の親友で両氏以上の快人であつた故奈良原^{いたる}到翁^にがあまりにも有名でないのは悲しい事実である。のみならず同翁の死後^{いへど}と雖も、同翁の生涯を誹謗^{ひぼう}し、侮蔑する人々が尠^{すくな}くないのは、更に更に情ない事実である。

奈良原到翁はその極端な清廉潔白と、過激に近い直情径行が世に容れられず、明治以後の現金主義な社会の生存競争場裡に忘却されて、窮^{きゆううし}死した志士である。つまり戦国時代と同様に滅亡した英雄の歴史は悪態^{あしごさま}に書かれる。劣敗者の死^{しかばね}屍は土足にかけられ、唾^{つばき}

せられても致^{いたしかた}方がないように考えられているようであるが、しかし斯^か様な人情の反覆の流行している現代は恥^はずべき現代ではあるまいか。

これは筆者が故奈良原翁と特別に懇意であつたから云うのではない。又は筆者の偏屈から云うでもない。

志士としては成功、不成功なぞは徹頭徹尾問題にしていなかつた翁の、徹底的に清廉、明快であつた生涯に対して、今すこし幅広い寛容と、今すこし人間味の深い同情心とを以^{もつ}て、敬意を払い得る人の在りや無しやを問いたいために云うのである。

その真黒く、物凄く輝く眼光は常に鉄壁をも貫く正義観念を凝視していた。その怒つた鼻。一文字にギューと締つた唇。殺気を横たえた太い眉。その間に凝結、^{ほうはく}磅礴している凄^{せい}愴の気魄はさながらに鉄と火と血の中を突破して来た志士の生涯の断面そのものであつた。青黒い地獄色の皮膚、前額に乱れかかつた縮れ毛。^{よろい}鎧の仮面に似た黄褐色の怒^ど髭、^{らんぜん}乱髭。それ等に直面して、その黒い瞳に凝視されたならば、如何なる天魔鬼神でも一^{ひと}縮みに縮み上つたであろう。^い沉んやその老いて益々筋骨隆々たる、精悍^{せい}そのもののよ^{えど}うな巨軀に、一刀を提^ひげて出迎えられたならば、如何なる無法者と雖も、手足が突張つて動けなくなつたであろう。どうかした人間だつたら、その翁の真黒い直視に会つた瞬間に

「斬られたツ」という錯覚を起して引っくり返ったかも知れない。

事実、玄洋社の乱暴者の中ではこの奈良原翁ぐらい人を斬った人間は少かったであろう。そうしてその死骸を平気で蹴飛ばして瞬またたき一つせずに立去り得る人間は殆んど居なかったであろう。奈良原到翁の風貌には、そうした冴え切った凄絶な性格が、ありのままに露出していた。微塵みじんでも正義に背く奴は容赦なくタタキ斬り蹴飛ばして行く人という感じに、一ひととめ眼で打たれてしまうのであった。

この奈良原翁の徹底した正義観念と、その戦慄に価する実行力が、世人の嫌忌を買ったのではあるまいか。そうしてその刀折れ矢尽きて現社会から敗退して行つた翁の末路を見てホツとした連中が「それ見ろ。いい気味だ」といったような意味から、卑怯な嘲罵を翁の生涯に対して送つたのではあるまいか。

実際……筆者は物心付いてから今日まで、これほどの怖い、物すごい風采をした人物に出会つた事がない。同時に又、如何なる意味に於ても、これ程に時代離れのした性格に接した事は、未だ曾かつて一度もないのである。

そうだ。奈良原翁は時代を間違えて生れた英傑の一人なのだ。翁にしてもし、元龜天正の昔に生を稟うけていたならば、たしかに天下を聳しょう動どうしていたであろう。如何なる権威

にも屈せず、如何なる勢力をも眼中に措かない英傑児の名を、青史に垂れていたであろう。こうした事實は、奈良原翁と対等に膝を交えて談笑し、且つ、交際し得た人物が、前記頭山、杉山両氏のほかに、あまり居なかった。それ以外に奈良原翁の人格を云為するものは皆、瘦犬の遠吠えに過ぎなかった事實を見ても、容易に想像出来るであろう。

明治もまだ若かりし頃、福岡市外（現在は市内）住吉の人参畑という処に、高場乱子女史の漢学塾があった。塾の名前は忘れたが、タカが女の学問塾と思つて軽侮すると大間違い、頭山満を初め後年、明治史の裏面に血と爆弾の異臭をコビリ付かせた玄洋社の諸豪傑は皆、この高場乱子女史と名乗る変り者の婆さんの門下であつたというのだから恐ろしい。彼の忍辱慈悲の法衣の袖に高杉晋作や、西郷隆盛の頭を撫で慈しんだ野村望東尼とは事変り、この婆さん、女の癖に元陽と名乗り、男髪おとこがみの総髪に結び、馬乗袴うまのりばかまに人斬庖刀を横たえて馬に乗り、生命知らずの門下を従えて福岡市内を横行したというのだから、デートリツヒやターキーがすべつたの、女学生のキミ・ボクが転んだの候そうろうといったつて断然ダンチの時代遅れである。時は血ちなまぐさ腥い維新時代である。おまけに皺苦茶の婆さんだからたまらない。

わが奈良原到少年はその腕白盛りをこの尖端婆さんの鞭撻下にヒレ伏して暮した。そのほか当時の福岡でも持て余され気味の豪傑青少年は皆この人参畑に預けられて、このシュル・モダン婆さんの時世に対する炬の如き観察眼と、その達人的な威光の前にタタキ伏せられたものだという。

その当時の記憶を奈良原到翁に語らしめよ。

「人参畑の婆さんの処にゴロゴロしている書生どもは皆、順繰りに掃除や、飯饔や、買物のお使いに遣られた。しかし自分はまだ子供で飯が饔けんじやったけにイツモ走り使いに逐いまわされたものじやったが、その当時から婆さんの門下というところ、福岡の町は皆ビクビクして恐ろしがつておった。

自分の同門に松浦愚という少年が居った。こいつは学問は一向出来ん奴じやったが、名前の通り愚直一点張りで、勤王の大義だけはチャント心得ておった。この松浦愚と自分は大の仲好しで、二人で醤油買いに行くのに、わざと二本の太い荒縄で樽を釣下げて、その二本の縄の端を左右に長々と二人で引っぱって樽をブランブランさせながら往来一パイになつて行くと往来の町人でも肥料車でも皆、恐ろしがつて片わきに小さくなつて行く。なかなか面白いので二人とも醤油買いを一つの楽しみにしていた。

或る時、その醤油買いの帰りに博多の櫛田神社の前を通ると、社内に一パイ人ばかりがしている。何かと思つて覗いてみると勿体らしい衣冠束帯をした櫛田神社の宮司が、拝殿の上に立つて長い髻ひげを撫でながら演説をしている。その頃は演説というと、芝居や見世物よりも珍しがつて、演説の出来る人間を非常に尊敬しておつた時代じゃけに、早速二人とも見物を押しかけて一番前に出て傾聴した。ところがその髻神主の演説に曰いわく、

『……諸君……王政維新以来、敬神の思想が地を払つて来たことは実にこの通りである。

真に慨嘆に堪えない現状と云わなければならぬ。……諸君……牢記ろうきして忘るる勿れ。神様

というものは常に吾が〇〇以上に尊敬せねばならぬものである。その実例は日本外史ひもとを繙ひもといてみれば直ぐにわかる事である。遠く元弘三年の昔、九州随一の勤王家菊池武時は、逆

臣北条探題、少式しょうしき大友等三千の大軍を一戦に蹴散けちらかさんと、手勢百五十騎ひつさを提ひげて、

この櫛田神社の社前を横切つた。ところがこの戦いは菊池軍に不利であることを示し給う神慮のために、武時の乗馬が鳥居の前で俄にわかに四足を突張つて後退し始めた。すると焦燥あせりに焦燥つている菊池武時は憤然として馬上のまま弓に鏑かぶら矢やを番つえた。

「この神様は牛か馬か。皇室のために決戦に行く俺の心がわからんのか。

武士もののふのうわ矢のかぶら一すぢに

思ひ切るとは神は知らずや」

と吟ずるや否や神殿の扉に発矢^{はつし}とばかり二本の矢を射かけた。トタンに馬が馳け出したのでそのまま戦場に向ったが、もしこの時に武時が馬から降りて、神前に幸運を祈ったならば、彼は戦いに勝ったであろうものを、斯^{かよう}様な無礼を働らいて神慮を無視したために勤王の義兵でありながら一敗地に塗^{まみ}れた……』

衣冠束帯の神主が得意然とここまで喋^{しゃべ}舌つて来た時に、自分^{わし}と松浦愚の二人はドツチが先か忘れたが神殿に躍り上つていた。アツと云う間もなく二人で髭神主を殴り倒おし蹴倒おす。松浦が片手に提げていた醤油樽で、神主の脳天を食らわせたので、可愛そうに髭神主が醤油の海の中にウームと伸びてしまった。……この賽^{さい}銭^{せん}乞食の奴、神様の広告のために途方もない事を吐^ぬかす。皇室あつての神様ではないか。そういう貴様が神威^{けい}を流し、国体を誤る国賊ではないか……というたような氣持であつたと思うが、二人ともまだ十四か五ぐらいの腕白盛りで、そのような氣の利いた事を云い切らんじやつた。ただ、

『この畜生。罰^{ばち}を当てるなら当ててみよ』

と破^われた醤油樽を御神殿に投込んで人參畑へ帰つて来たが、帰ってからこの話をする、それは賞められたものじやつたぞ。大将の婆さんが涙を流して『ようしなさつた。感心感

心』と二人の手を押おしいただ戴だいて見せるので、塾の連中が皆、金鷄勲章きんしでも貰うたように俺達の手柄を羨ましがったものじやったぞ。ハハハハハ」

人参畑の婆さんがいつまで存命して御座ったか一寸調査しかねているが、とにもかくにも、こうした人参畑の豪傑青少年連は、その後健児社のちという結社を組織して、天下の形勢を睥睨へいげいする事になった。これが後の玄洋社の前身であつたが、天下の形勢を憂慮する余り、近所界限の畑や鶏舎を荒し、犬猫の影を絶ち、営所の堀の臺がまを捕つて来て、臟腑を往来に撒布するなぞ、乱暴狼藉到らざるなく、健児社の連中といえ、大人でも首を縮める程の無敵な勢力を持つていたものであつた。

その中でも乱暴者の急先鋒は我が奈良原少年で、仲間から黒旋風李達こくせんふうりきの綽名あだなを頂戴していた。奈良原到が飯饗めしたき当番に当たると、塾の連中が長幼を問わず揃つて早起をした……というのは、飯の準備が出来上るまで寢床に潜っていると、到少年がブスブス燃えている薪を掴んで来て、寝ている奴の懷中に突込むからであつた。しかもその燃えさしを懷中に突込まれたまま、燃えてしまうまで黙つて奈良原少年の顔をマジリマジリと見ていたのが塾の中にタツタ一人頭山満少年であつた。そうして奈良原少年が消えた薪を引くと同時に

起上つて奈良原少年を取つて伏せて謝罪あやまらせたので、それ以来二人は無二の親友になつたものだという。

ちやうどその頃が西南戦争の直前であつた。維新後に於ける物情の最も騒然たる時代であつた。

既掲、頭山、杉山の項にも述べた通り、筑前藩の志士は維新の鴻こうぎ業後、筑前閥を作る事が出来なかつた。従つて不平士族の数は他地方に優まさるとも劣らなかつた筈である。

そんな連中は有為果敢の材を抱きながら官途に就く事が出来ず鬱勃たる壮志を抱いたまま明治政府を掌握している薩長土肥の横暴振り、名利の争奪振りを横目に睨んでいた。尊王攘夷を標榜して徳川を倒しておきながら、サテ政権を握ると同時に攘夷どころか、国体どころか、一も西洋二も西洋と夷敵いてき紅毛人の前にペコペコして洋服を着、洋食を喰くらつて、アラン限りブルジョア根性を發揮し、屈辱的条約をドシドシ結びながら、恬然てんぜんとして徳川十五代将軍と肩を並べている大官連の厚顔無恥振りに皆を決していた。そのうちに福岡にも鎮台が設けられて、町人百姓に洋服を着せた兵隊が雲集し、チャルメラじみた喇叭ラッパを鳴らして干ほしいわし鰯鰯の行列じみた訓練が始まつた。

その頃、士族の下ツ端連したばの成れの果は皆、警官（邏卒ろそつ、部長、警部等）に採用されていたものであったが、この羅卒（今の巡査）連中が皆鎮台兵と反りそが合わなかった。……俺達のような腹からの士族と同じように、町人百姓が戦争の役に立つものか……といったような一種の階級意識から、犬と猿のように仲が悪く、毎日毎日福岡市内の到る処で、鎮台兵と衝突していたものであるが、しかも、そうした不平士族の連中の中には西郷隆盛の征韓論の成立を一日千秋の思いで仰望していたものが少くなかった。祖先伝来の一党ひつざを提げて西郷さんのお伴をして、この不愉快な日本を離れて士族の王国を作りに行かねばならぬ。武士の生涯は武を以て一貫せねばならぬ。町人や百姓と伍あきして食物を漁り合ねばならぬ、犬猫同然の国民平等の世界に、一日でも我慢でくが出来るか……とか何とか云って鼻の頭をコスリ上げている。

そこへ征韓論が破れて、西郷さんが帰国したというのだから一大事である。

その頃、筑前志士の先輩に、越智彦四郎おち、武部小四郎、今村百八郎、宮崎車之助くるまのすけ、武井忍助ろくすけなぞいう血気盛んな諸豪傑が居た。そんな連中と健児社の箱田六輔氏等が落合おしかつて大事を密議している席上に、奈良原到以下十四五を頭かしらくらしいの少年連が十六名ズラリと

列席していたというのだから、その当時の密議なるものが如何に荒っぽいものであったかがわかる。密議の目的というのは薩摩の西郷さんに呼応する拳兵の時機の問題であったが、その謀議の最中に奈良原到少年が、突如として動議を提出した。

「時機なぞはいつでも宜しい。とりあえず福岡鎮台をタタキ潰せば良えのでしょう。そうすれば藩内の不平士族が一時に武器を執つて集まつて来ましょう」

席上諸先輩の注視が期せずして奈良原少年に集まつた。少年は臆面もなく云つた。

「私どもはイツモお城の石垣を登つて御本丸の掠の実を喰いに行きますので、あの中の家内なら、親の家よりも良う知つております。私どもにランプの石油を一カンと火薬を下さい。私ども十六人が、皆、頭から石油を浴びて、左右の袂に火薬を入れたまま石垣を登つて番兵の眼を掠め、兵營や火薬庫に忍込みます。そして蘭法附木で袂に火を放つて走りまわりましたならば、そこから火事になりましょう。火薬庫も破裂しましょう。その時に上の橋と下の橋から斬り込んでおいでになったならば、土百姓や町人の兵隊共は一同たまりもありますまい」

これを聞いた少年連は皆、手を拍つて奈良原の意見に賛成した。口々に、
「遣つて下さい遣つて下さい」

と連呼して詰め寄ったので並居る諸先輩は一人残らず泣かされたという。その中にも武部小四郎氏は、静かに涙を払って少年連を諫止した。

「その志は忝ないが、日本の前途はまだ暗澹たるものがある。万一吾々が失敗したならば貴公達が、吾々の後跟を継いでこの皇国廓清の任に当らねばならぬ。また万一吾々が成功して天下を執る段になっても、吾々が今の薩長土肥のような醜い政権利権の奴隸になるかならぬかという事は、ほかならぬ貴公達に監視してもらわねばならぬ。間違うても今死ぬ事はなりませんぞ」

今度は少年連がシクシク泣出した。皆、武部先生のために死にたいのが本望であつたらしいが結局、小供たちは黙って引込んでおれというので折角の謀議から逐退けられてしまつた。

かくして武部小四郎の乱、宮崎車之助の乱等が相次いで起り、相次いで潰滅し去つた訳であるが、後から伝えられているところに依ると、これ等の諸先輩の拳兵が皆、鎮台と、警察に先手を打たれて一敗地に塗れた原因は、皆奈良原少年の失策に起因していた。奈良原少年一流の急進的な激語が破鐘のように大きいのでその家を取巻く密偵の耳に筒抜け

に聞えたに違いないという事になった。それ以来「奈良原の奴は密議に加えられない」という事になって同志の人は事ある毎に奈良原少年を敬遠したというのだから痛快である。しかも前記の乱の鎮定後明治政府に対して功績を挙ぐるに汲々たる県当局では、残酷にも健児社に居残っている少年連を悉く引^{ことごと}拵^{ひつとら}えて投獄した。一味徒党の名前を云えというので、年端^{としは}も行かぬ連中に、夜となく昼となく極烈な拷問をかけたというのだから、呆れた位では追付かない話である。

その当時の事を後年の奈良原翁は筆者に追懷して聞かせた。

「現在（大正三年頃）玄洋社長をやつとる進藤喜平太は、その当時まあだ紅顔の美少年で、女のように静かな、溫柔^{おとな}しい男じやつたが、イザとなるとコレ位、底強い、頼もしい男はなかつた。熊本県の壮士と玄洋社の壮士とが博多東中洲の青^{あお}柳^{やぎ}の二階で懇親会を開いた時に、熊本の壮士の首領^{なにかし}で某という名高い強い男が、頭山の前に腰を卸して無理酒を強^しいようとした。頭山は一滴もイカンので黙つて頭を左右に振るばかりであつたが、そこを附け込んだ首領^{なにかし}の某がなおも、無理に杯を押付ける。双方の壮士が互い違いに坐っているの^{なにかし}で互いに肩^{かた}臂^{ひじ}を張つて睨み合つたまま、誰も腰を上げ得ずにいる時に、進藤がツカツカと立上つて、その首領某の襟首を背後から引掴むと、杯盤の並んだ上を一気に梯子段の処

まで引摺つて来て、向う向きに突き落した。そのあとを見返りもせずニニコと笑いながら引返して来て『サア皆。飲み直そう』と云うた時には大分青くなつておつた奴が居たようであつたが、その進藤と、頭山満と自分と三人は並んで県庁の裏の獄舎で木馬責めにかけられた。背中の三角になつた木馬に跨らせられて腰に荒縄を結び、その荒縄に一つ宛漬物石を結び付けてダンダン数を殖やすのであつたが、頭山も進藤も実に強かつた。石の数を一つでも余計にブラ下げるのが競争のようになって、あらん限り強情を張つたものであつた。三人とも腰から下は血のズボンを穿いたようになってゐるのを頭山は珍らしそうにキョロキョロ見まわしている。進藤も石が一つ殖える度毎に嬉しそうに眼を細くしてニニコして見せるので、意地にも顔を歪める訳に行かん。どうかした拍子に進藤に向つて『コラツ。貴様の面が歪んだぞ』と冷やかしてやると進藤の奴、天井を仰いで『アハアハアハ』と高笑いしおつたが、後から考えるとソウいう自分の方が弱かつたのかも知れて、ハハハ。とにかく頭山は勿論、進藤という奴もドレ位強い奴かわからんと思うた。役人どもも呆れておつたらしい。

それから今一つ感心な事がある。

獄舎ごくやにいる間には副食物に時々魚類さかなが付く。……といつても飯の上に鰯の煮たのが並ん

でいる位の事じやったが、そのたんびに頭山は箸の先で上の方の飯を、その鰯と一所に払い除けて、鼻に押当てて嗅いでみる。そうしてイヨイヨ腥くないとこまで来てから喰う。尋常に喰うても足らぬ処へ、平生大飯喰いの頭山が妙な事をすると思うて理由を聞いてみると、きようは死んだ母親何とかの日に当るけに精進をしよるというのじや。それを聞いてから自分はイツモ飯となると頭山の横に座ったものじやがのう。ハハハ」

進藤喜平太翁も、その時分の事を筆者に述懐した事がある。

「拷問ちうたて、痛いだけの事で何でもなかったが、酒が飲めんのは降参した。飲みとて飲みとてならぬところへ、ちようど虎烈刺が流行つてなあ。獄卒がこれを消毒のために雪隠に撒れと云うて酔を呉れたけに、それを我慢して飲んだものじや。むろん米の酔じやけに飲むとどことなくポーツと酔うたような気持になるのなあ……まことに面目ない、浅ましい話じやったが、奈良原が、あの面付きでシカメて酔を飲みよるところはナカナカ奇観じやったよ。奈良原は酒を飲むといつも酔狂をしおったが、酔では酔興が出来るので残念じやと云うておった」

同じ健児社の同志で運よく年少のために捕えられなかった宮川太一郎（今の政友代議士、宮川一貫氏の父君）氏が、同志に与うべく牛肉の煮たのを獄舎に持って行き、門衛の看守

に拒まれたので鉄門の間に足を突込んで、死を決して駄々を捏ね始め、終日看守を手古摺てこずらせた揚句あげく、やっと目的を達すると、その翌日からドシドシ肉を運び始めて大いに当局を弱らせたのもこの時の事であつたという。

そのうちに西南の戦雲が、愈濃厚いよいよになつて来たので、県当局でも万一を慮おもつたのであるう、頭山、奈良原を初め、健児社の一味を尽く兵營ことごとの中の営倉に送り込むべく獄舎から鎖に繋いで引出した。その時は健児社の健児一同、当然斬られるものと覚悟したらしく、互いに顔を見合わせてニツコリ笑つたという事であるが、同じ時に奈良原少年と同じ鎖に繋がれる仲よしの松浦愚少年が、護送の途中でこんな事を云い出した。

「オイ。奈良原。今度こそ斬られるぞ」

「ウン。斬るつもりらしいのう」

「武士というものは死ぬる時に辞世チユウものを詠よみはせんか」

「ウン。詠んだ方が立派じやろう。のみならず同志の励みになるものじやそうな」

「貴公は皆の中で一番学問が出来できとるけに、嘸さぞいくつも詠む事じやろうのう」

「ウム。今その辞世を作りよるところじやが」

「俺にも一つ作ってくれんか。親友の好誼よしみに一つ頒わけてくれい。何も詠まんで死ぬと体裁

が悪いけになあ。貴公が作ってくれた辞世なら意味はわからんでも信用出来るけになあ。一つ上等のヤツを頒けてくれい。是非頼むぞ」

流石さすがの豪傑、奈良原少年も、この時には松浦少年の無学さが可哀そうなような可笑おかしいように、胸が一パイになって、暫くの間返事が出来なかったという。

一方に盟主、武部小四郎は事敗れるや否や巧みに追捕の網を潜くぐって逃れた。香椎かしいなどで泊とどまっている宿へイキナリ踏込まれたので、すぐに脇差を取って懷中に突込み、裏口に在った策さくを拾ひろって海岸に出て、汐干狩の連中に紛れ込むなぞという際どい落付を見せて、とうとう大分まで逃げ延びた。ここまで来れば大丈夫。モウ一足で目指す薩摩の国境という処まで来ていたが、そこで思いもかけぬ福岡の健児社の少年連が無法にも投獄拷問たうちまされているという事実を風聞すると天を仰いで浩嘆こうたんした。万事休すというので直に踵かかとを返した。幾重いくえにも張廻はりまわしてある厳重を極めた警戒網を次から次に大手を振って突破して、一直線に福岡県庁に自首して出た時には、全県下の警察が舌を捲いて震駭しんがいしたという。そこで武部小四郎は一切が自分の一存で決定した事である。健児社の連中は一人も謀議に参与していない事を明弁し、やはり兵営内に在る別棟の獄舎に繋がれた。

健児社の連中は、広い宮庭の遙か向うの獄舎に武部先生が繋がれている事をどこからともなく聞き知った。多分獄吏の中の誰かが、健気な少年連の態度に心を動かして同情していたのであろう。武部先生が、わざわざ大分から引返して来て、縛に就かれた前後の事情を聞き伝えると同時に「事敗れて後に天下の成行を監視する責任は、お前達少年の双肩に在るのだぞ」と訓戒された、その精神を實現せしむべく武部先生が、死を決して自分達を救いに御座ったものである事を皆、無言の裡に察知したのであった。

その翌日から、同じ獄舎に繋がれている少年連は、朝眼が醒めると直ぐに、その方向に向つて礼拝した。「先生。お早よう御座います」と口の中で云っていたが、そのうちに武部先生が一切の罪を負つて斬られさつしやる……俺達はお蔭で助かる……という事実がハッキリとわかると、流石に眠る者が一人もなくなつた。毎日毎晩、今か今かその時機を待つているうちに或る朝の事、霜の真白い、月の白い宮庭の向うの獄舎へ提灯が近付いてゴトゴト人声がし始めたので、素破こそと皆蹶起して正座し、その方向に向つて両手を支えた。メソメソと泣出した少年も居た。

そのうちに四五人の人影が固まって向うの獄舎から出て来て広場の真中あたりまで来たとすると、その中でも武部先生らしい一人がピッタリと立佇まって四方を見まわした。少

年連のいる獄舎の位置を心探しにしている様子であつたが、忽ち雄獅子の吼えるような颯^さ爽^{そう}たる声で、天も響けと絶叫した。

「行くぞオオ——オオオ——」

健児社の健児十六名。思わず獄舎の床に平伏^{ひれふ}して顔を上げ得なかつた。オイオイ声を立てて泣出した者も在つたという。

「あれが先生の声の聞き納めじやつたが、今でも骨の髄まで泌み透つていて、忘れようにも忘れられん。あの声は今日^{こんにち}まで自分の臟腑^{はらわた}の腐り止めになつてゐる。貧乏^{きつ}というものは辛^き勞^{らう}いもので、妻子が飢え死によるのを見ると氣に入らん奴の世話にでもなりとうなるものじゃ。藩閥の犬畜生にでも頭を下げに行かねば遣り切れんようになるものじゃが、そげな時に、あの月と霜に冴え渡つた爽快な声を思い出すと、腸^{はらわた}がグルグルとデングリ返つて来る。何もかも要らん『行くぞオ』という氣もちになる。貧乏が愉快になつて来る。先生……先生と申うてなあ……」

と云ううちに奈良原翁の巨大な両眼から、熱い涙がポタポタと滾^{こぼ}れ落ちるのを筆者は見た。

奈良原到少年の腸^{はらわた}は、武部先生の「行くぞオ——オ」を聞いて以来、死ぬが死ぬまで腐ら

なかつた。

(下)

月明の霜朝に、自分等に代つて断頭場に向つた大先輩、武部小四郎先生の壮烈を極めた
だいおんじよう
大音声、

「行くぞオーオ」

を聞いて以来、奈良原到少年の腸は死ぬが死ぬまで腐らなかつた。

その後、天下の国土を以て任ずる玄洋社の連中は、普通の人民と同様に衣食のために駈
廻らず、同時に五斗米に膝を屈しないために、自給自足の生活をすべく、豪傑知事安場
すかず
保和から福岡市の対岸に方る向い浜あた（今の西戸崎附近とぎき）の松原の官林を貰つて薪を作り、
福岡地方に売却し始めた。奈良原到少年もむろん一行に参加して薪採りの事業に参加し
て粉骨碎身していたが、その後、安場知事の人格を色々考えてみると、どうも玄洋社を尊
敬していいようである。却かえつて生活の糧かてを与えて慰撫しているつもりらしく見えたので、
或夜、奈良原到はコッソリと起上つて誰にも告げずに山のように積んである薪の束の間に、

枯松葉を突込んで火を放ち、悉く焼棄してしまった。つまり天下の政治を云為する結社が区々たる知事風情の恩義を蒙るなぞという事は面白くないという気持であつたらしいが、対岸の福岡市では時ならぬ海上の炬火を望んで相当騒いだらしい。馳付けた同志の連中も、手を拍つて快哉を叫んでゐる奈良原少年の真赤な顔を見て啞然となつた。一人として火を消し得る者が無かつたという。

こうした奈良原少年の精神こそ、玄洋社精神の精髓で、黒田武士の所謂、葉隠れ魂のあらわれでなければならぬ。玄洋社の連中は何をするかからぬという恐怖觀念が、明治、大正、昭和の政界、時局を通じて暗々の裡に人心を威圧しているのもこの辺に端を發しているのではなからうか。

そのうちに四国の土佐で、板垣退助という男が、自由民権という事を叫び出して、なかなか盛んにやりおるらしい。明治政府でもこれを重大視しているらしい……という風評が玄洋社に伝わった。

その当時の玄洋社員は筆者の覚え束ない又聞き記憶によると頭山滿が大將株で奈良原到、進藤喜平太、大原義剛、月成勲、宮川太一郎なぞいう多士濟々たるものがあつた

が、この風聞に就いて種々凝議した結果、とにも角にも頭山と奈良原に行つて様子を見てもらおうではないかという事になった。

その当時の評議の内容を伝え聞いていた福岡の故老は語る。

「大体、玄洋社というものは、土佐の板垣が議論の合う者同志で作つておつた愛国社なんぞと違つて、主義も主張も何もない。今の世の中のように玄洋社精神なぞいうものを仰々しく宣言する必要もない。ただ何となしに気が合つて、死生を共にしようというだけでそこに生命^{いのち}知らずの連中が、黙つて集まり合うたというだけで、そこに燃え熾^{さか}つてゐる火のような精神は文句にも云えず、筆にも書けない。否^{いや}文句以上、筆以上の壯觀で、烈々^{うだい}宇内を焼きつくす概があつた。頭山が遣るというなら俺も遣ろう。奈良原が死ぬというなら俺も死のう。要らぬ生命^{いのち}ならイクラでも在る。貴様も来い。お前も来い。……という純粹な精神的の共產主義者の一団とも形容すべきものであつた。それじゃけに、愛国社の連中は一度^{ひとたび}、時を得て議論が違つて来ると、外国の社会主義者連中と同じこと直ぐに離れ離れになる。もつとも今の政党は主義主張が合うても利害が違つと仲間割れするので、今一段下等なワケじゃが、玄洋社となると理窟なしに集まつとるのじゃけに日本の国体と同じことじゃ。利害得失、主義主張なぞがイクラ違つても、お互いに相許しとる気持は一つじゃ

けに議論しながら決して離れん。玄洋社は潰れても玄洋社精神は今こんにち日まで生きておつて、国家のために益々さか壮んに活躍しおるのじゃ。そげなワケじゃけに、その当時の玄洋社で一口に自由民権と聞いても理窟のわかる奴は一人も居らんじやつた。それじゃけに、ともかくもこの二人に板垣の演説を聞いてもうて、国のためにならぬと思うたならば二人で板垣をタタキ潰してもらおう。もし又、万一、二人が国のためになると思うたならば玄洋社が総出で板垣に加勢してやろう。ナア二人が行けば大丈夫。口先ばかりの土佐ツポオをタタキ潰して帰つて来る位、何でもないじやろう」

といったような極めて荒っぽい決議で、旅費を工面して二人を旅立たせた……：……というのであるが何が扱さて、無双の無頓着主義の頭山満と人を殺すことを屁へとも思わぬ無敵の乱暴者、奈良原到という、代表的な玄洋社式がつながって旅行するのだから、途中は弥次喜多どころでない。天魔鬼神も倒退たいとう三千里に及ぶ奇談を到る処に捲起して行つたらしい。

当時の事を尋ねても頭山満翁も奈良原翁もただ苦笑するのみであり多くを語らなかつたが、それでも辛うじて洩れ聞いた、差支えない部類に属するらしい話だけでも、ナカナカ凡俗の想像を超越しているのが多い。

二人とも或る意味での無学文盲で、日本の地理など無論、知らない。四国がドツチの方

角に在るかハッキリ知らないままに、それでも人に頭を下げて尋ねる事が二人とも嫌いなまんまに不思議と四国に渡つて来たような事だったので、途中で無茶苦茶に道に迷つたのは当然の結果であつた。

「オイオイ百姓。高知という処はドツチの方角に当るのか」

「コツチの方角やなモシ」

「ウン。そうか」

と云うなりグングンその方角に行く。野でも山でも構わない式だからたまらない。玄洋社代表は迷わなくても道の方が迷つてしまう。その中うちに或る深山の谷間を通つたら福岡地方で珍重する忍しのぶぐさ草が、左右の崖に夥しく密生しているのを発見したので、奈良原到が先ず足を止めた。

「オイ。頭山。忍草しのぶが在るぞ。採つて行こう」

「ウム。オヤジが喜ぶじやろう」

というので道を迷っているのも忘れて盛んにむしり始めたが、その中うちに日が暮れて来たので気が付いてみると、荷車が一台や二台では運び切れぬ位、採り溜めていた。

「オイ。頭山。これはトテモ持つて行けんぞ」

「ウム。チツと多過ぎるのう、帰りに持つて行こう」

それから又行くと今度は山道七里ばかりの間人家が一軒も無い処へ来たので、流石^{さすが}の玄洋社代表も腹が減つて大いに弱つた。ところへ思いがけなく向うから箒^{ざる}を前後に荷^{かつ}いだ卵売りに出会つたので呼止めて、二人で卵を買つて噉^{すす}り始めたが、卵というものはイクラ空腹でも左程沢山に噉れるものでない。十個ばかり噉^{うち}る中に、二人とも硫黄臭いゲツプを出すようになる、卵売りは大いに儲けるつもりで、道^{みち}傍^{ばた}の枯松葉を集めて焼卵を作り、二人にすすめたので又食欲を新にした二人は、したたかに喰べた。

ところでそこまでは先ず好都合であつたがアトが散々であつた。そこからまだ半道も行かぬ中に二人は忽ち鶏卵中毒を起し、猛烈な腹痛と共に代る代る道傍^{かたが}に踞^{かか}み始めたので、道^{みち}が一向に拂^はらない。併^{しか}し強情我慢の名を惜しむ二人はここでヘタバツてなるものかと齒を噛みしめて、互いに先陣を争つて行くうちに、やっと人家近い処へ来たので二人とも通りかかった小川で尻を洗い、宿屋に着くには着いたが、あまりの息苦しさに、ボーオとなつて腰をかけながら肩で呼吸^{いき}をしているところへ宿屋の女中が、
「イラツシャイマセ。どうぞお二階へお上りなされませ」

と云つた時には階子段を見上げてホツとタメ息を吐^ついたという。

それからその翌日の事。二人とも朝ツパラからヘトヘトに疲れていたのも、宿屋からすめられるままに馬に乗ったら、その馬を引いた馬士まごが、途中の宿場で居酒屋に這入った。するとその馬と一緒に居酒屋へ這入ろうとしたので乗っていた頭山が面喰らったらしい。慌てて居酒屋の軒先に掴まって両足で馬の胴を締め上げて入れまいと争ったが、とうとう馬の方が勝って頭山が軒先にブラ下った。その時の恰好の可笑おかしかったこと……と奈良原翁が筆者に語って大笑いした事がある。

そのうちに高知市に近付くと眼の前に大きな山が迫って来て高知市はその真向いの山向うに在る。道路はその山の根方をグルリとまわって行くのであるが、その山を越えて一直線に行けば三分の一ぐらいの道程みちのりに過ぎない……と聞いた二人の心に又しても曲る事を好まぬ黒田武士の葉隠れ魂……もしくは玄洋社魂みたいなものがムズムズして来た。期せずして二人とも一直線に山を登り始めたが、その山が又、案外峻嶒けんそな絶壁だらけの山で、道などは無論無い。殆んど生命いのちがけの冒険続きでヘトヘトになって向うへ降りたが、後から考えると、たとえ四里でも五里でも山の根方をまわった方が早かったように思った……という。やはり奈良原翁の笑い話であった。

そうした玄洋社代表が二人、そうした辛苦艱難しんくかんなんを経てヤツと高知市に到着すると、板

垣派から非常な歓迎を受けた。現下の時局に処する玄洋社一派の主義主張について色々な質問を受けたり議論を吹っかけられたりしたが、頭山満はもとより一言も口を利かないし、奈良原到も、今度はこつちから理窟を云いに來たのではない、諸君の理窟を聞きに來ただけじゃ……と睨み返して天晴れ玄洋社代表の貫禄を示したのでイヨイヨ尊敬を受けたらしい。

それから二代表は毎日毎日演説会場に出席して黙々として板垣一派の演説を静聴した。そうして何日目であつたかの夕方になつて二人が宿屋の便所か何かで出会うと、頭山満は静かに奈良原到をかえりみて微笑した。

「……どうや……」

「ウム。よさそうじやのう。此奴こやつどもの方針は……国体には触さわらんとするがのう、今の藩閥政府の方が国体には害があると思うがのう」

「やってみるかのう……」

「ウム。遣るがよからう」

と云つて奈良原到は思わず腕を撫でたという。実は奈良原としてはブチコワシ仕事の方が望ましかつた。土佐の板垣一派の仕事を木葉微塵こつばみじんにして歸るべく腕に撚よりをかけて來たも

のであったが、それでは持つて生れた彼一流の正義観が承知しなかった。

「演説はともかく、板垣という男の至誠には動かされたよ、この男の云う事なら間違うてもよい。加勢してやろうという気になった」

と後年の奈良原到翁は述懐した。

玄洋社が板垣の民権論に加勢するに決した事がわかると当時の藩閥政府はイヨイヨ震しんが駭いした。玄洋社と愛国社に向つて現今の共産党以上の苛烈な圧迫を加えたものであったが、これに対して愛国社が言論に、玄洋社が腕力に堂々と相並んで如何に眼醒めざましい反抗を試みたかは天下周知の事実だからここには喋ちやうちやう々しない事にする。

「結局。自由民権のあらわれである自治政治と議会政治は、板垣の赤せきせい誠を裏切つて日本を腐敗墮落させた。日本人は自治権を持つ資格のない程に下等な民族であることを現実の通りに暴露したに過ぎなかったが、これに反して板垣の人格はイヨイヨ光つて来るばかりである。昨日きのう、久し振りに板垣と会つて来たが昔の通りに立派な男で、手を握り合つて喜んでくれた。耳が遠くなつて困ると云いおつたがワシが持つて生れた破鐘われがね声で話すと、よくわかるよくわかるとうなずいておつた。今のような世の中になったのはつまるところ、自由民権議論もよくわからず、日本人の素質もよく考えないままに、板垣の人物ばかり

を信用しておつた頭山とワシの罪じゃないかと思うとる」

ところでこの辺までは先ず奈良原到の得意の世界であつた。

幸いにして議会が開設されるにはされたが、その当初は選挙といつても全然暴力選挙のダイナマイト・ドン時代で、選挙運動者は皆、水盃の生命いのちがけであつた。すこしばかりの左翼や右翼のテロが暴露しても満天下の新聞紙が青くなつて震え出すような現代とは雲泥の差があつたので、従つて奈良原到一流のモノスゴイ睨みが到る処に、活躍の価値を発見したものであつたが、それからち、日本政界の腐敗墮落が甚しくなるに連れて、換言すれば天下が泰平になるに連れて、好漢、奈良原到も次第に不遇の地位に墜ちて来た。

しかもその不遇たるや尋常一様の不遇ではなかつた。遂には玄洋社一派とさえ相容れなくなつた位、極度に徹底した正義観念——もしくは病的に近い潔癖わさわいに禍わざされた御蔭で、奈良原到翁は殆んど食うや喰わずの惨澹たる一生を終つたのであつた。

それから後の奈良原到翁の経歴は世間の感情から非常に遠ざかつていたし、筆者も詳しくは聞いていないのであるが大略左さのような簡単なものであつたらしい。

明治二十年頃（？）福岡市須崎すさきお台場だいばに在る須崎監獄の典獄（刑務所長）となり、妻帯

後間もなく解職し、爾後、数年閑居、日清戦役後、台湾の巡查となつて生蕃討伐に従事した。それから内地へ帰来後、夫人を喪い、数人の子女を親戚故旧に托し、独、福岡市外千代町役場に出仕していたが、その後辞職して自分の娘の婚嫁先である北海道、札幌、橋本某氏の農園の番人となり、閑日月を送る事十三年、大正元年、桂内閣の時、頭山満、杉山茂丸の依嘱を受けて憲政擁護運動のため九州に下り、玄洋社の二階に起居し、後、大正六七年頃、対州の親戚某氏の処で病死した。享年七十……幾歳であつたか、実は筆者も詳しく知らない。

その遺児の長男、奈良原牛之介うしのすけというのが又、親の血を受けていたらしい。天下無敵の快男児で、乱暴者ばかり扱い狃なれている内田良平、杉山茂丸も持て余した程の喧嘩の専門家であつた。その乱暴者を、極めて溫柔おとなしい文学青年の筆者と同列に可愛がつたのが筆者の母親で、痛快な、男らしい意味では筆者よりも数十層倍、深刻な印象を、負けん気な母親の頭にタタキ込んでいる筈であるが、この男の伝記は後日の機会まで廻避して、ここには前記、失意後の乱暴才ヤジ、奈良原到翁の逸話を二三摘出してこの稿を結ぶ事にする。

奈良原翁は少年時代に高場乱子、武部小四郎等から受けた所謂、黒田武士の葉隠れ魂、

悪く云えば馬鹿を通り越しても満足せぬ意地張根性がドン底まで強かった。氣に入らない奴は片端からガミつける。処嫌わずタタキつける。評議の席などで酔っ払った奈良原到が、眼を据えて睨みまわすと、いい加減な調子のいい事を云っている有志連中は皆青くなつて、座が白けてしまったという。そんな連中が奈良原の貧乏な事をよく知っていて、時世後れの廢物だとか、玄洋社の面よごしとか何とか、在る事無い事デマを飛ばして排斥したので、奈良原到は愈々不遇に陥つたものらしい。

しかし後年の奈良原到翁には、別にそんな連中を怨んだような語氣はなかった。多分、新時代の有志とか、代議士とかいうものは一列一体に太平の世に湧いた蛆虫ぐらいにしか思つていなかったのであらう。一依旧様、権門に媚びず、時世に諛らず、喰えなければ喰えないままで、乞食以下の生活に甘んじ、喰う物が無くなつても人に頭を下げない。妻子を引連れて福岡の城外練兵場へ出て、タンポポの根なぞを掘つて来て露命を繋いでいたというのだから驚く。御本人に聞いてみると、

「ナニ、タンポポの根というても別に喰い方というてはない。妻が塩で茹で、持つて来よつたようじゃが最初の中は香氣が高くてナカナカ美味いものじゃよ。新牛蒡のようなものじゃ。しかし二三日も喰いよると子供等が飽いて、ほかのものを喰いたがるのには困つた

よ。ハツハツハツ」

と笑っているところは恰まるで飢饉の実話以上……ここいらは首陽山に蕨わらびを採った聖人の兄弟以上に買つてやらなければならぬと思う。別に周の世を悲しむといったような派手なメアテが在った訳ではなかったし、聖人でも何でもない。憐れな妻子が道伴みちづれだったのだから尚なおさら更である。

その時代の事であつたろうと思うが、筆者の母親の生家に不幸のあつた時のこと、仏に旧交のあつた奈良原到が、どこから借りて来たものか上下チグハグの紋服はかまに袴はかまを穿いて悔みに来た。

「ほんの心持だけ……」

と皆に挨拶をして香こう奠でんと書いた白紙しろかみの包みを仏前に供え恭うやうやしく礼拝して帰つたので皆顔を見合わせた。一体あの貧乏人がイクラ包んで来たのだろう……というので打寄つて開いてみると中には何も這入っていないかった。正真正銘の白紙だけだったので皆抱腹絶倒した。

しかし心ある二三の人は涙を浮べて感心した。

「奈良原到は流石さすがに黒田武士じや、普通の奴なら貧乏を恥じて、挨拶にも来ぬところじや

が……」

生存している老看守某の話によると、奈良原到の須崎典獄時代には、囚人の奈良原を恐るる事、想像の外であったという。ドンナに兇猛な囚人でも、奈良原典獄が佩劍はいけんを押えて、

「その縄を解け。こつちへ連れて来い」

と云つて睨み付けると、今にも斬られそうな殺氣に打たれたらしい。眼を白くして縮み上つたという。

或る夜のこと、死刑にする筈の四人の囚人が、破獄したという通知が来たので、奈良原典獄は直ぐに駈付けて手配をさせた。そうして自身は制服のままお台場の突角とっかくに立つて海上を見渡していると、やや暫くしてから足下の石垣をゾロゾロ匍はい登って来る者が居る。よく見ると、それがタツタ今破獄したばかりの四人の囚人たちで、海水にズブ濡れのまま到翁の足下にひれ伏して三拝九拝しているのであった。

後から取調べたところによると、その囚人はトテも兇暴、無残な連中で、看守をタタキ倒して破獄の後のち、お台場の下に浮かべてある夥しい材木の蔭に潜んで追捕の手を遣り過し、

程近い潮場の下の釣船を奪つて逃げるつもりであつたが、その中^{うち}に四人の中の一人が、

「……オイ……石垣の上に立つて御座るのがドウヤラ典獄さんらしいぞ」

と云うと皆、恐ろしさに手足の力が抜けて浮いていられなくなった。齒の根がガチガチ鳴り出して、眼がポオとなつてウツカリすると波に漂^{さら}われそうになつて来たので四人がだんだん近寄つて来て……これはイカン。こんな事ではドウにもならんから、破獄を諦めよう。一思いに奈良原さんの前に出て行つて斬られた方がええ……という事に相談がきまると、不思議にも急に腰がシャンとなつて、身内が温まつて、勇氣が出て来た。吾^わ後れじと石垣を匍^{はい}登^{のぼ}つて来た……という話であつた。これなぞは囚人特有の一種の英雄崇拜主義の極端なあらわれの一つに相違ないので、奈良原到の異常な性格を端的に反映した好逸話でなければならぬ。

「その頃の囚人の気合は今と違つておつたように思ふなあ」

と嘗^{かつ}て奈良原翁は酒を飲み飲み筆者に述懐した。

「ワシは長^{なが}卷^{まき}直^{なお}しの古刀を一本持つておつた。二尺チョツと位と思われる長さのもので、典獄時代から洋^{サア}剣^{ベル}に仕込んでおつたが良う切れたなあ。腕でも太股でも手ごたえが変らん位で、首を切るとチャプリンと奇妙な音がして血がピューと噴水のように吹出しながら

たおれる。ああ斬れた……と思う位で水も溜まらぬというのが全くその通りであつた。その癪刀身は非常に柔らかくて鉛か飴のような感じがした。台湾の激戦の最中に生蕃の持つてゐる棒なぞを斬ると歸つて来てから鞆さやに納まらん事があつたが、それでも一晩、床の間に釣り下げておくと翌る朝は自然と真直まつすぐになつておつた。生蕃征伐に行つた時、大勢の生蕃を珠数じゆずつなぎに生捕つて山又山を越えて連れて歸る途中で、面倒臭くなると斬つてしまう事が度々であつた。あの時ぐらい首を斬つた事はなかつたが、ワシの刀は一度も研とがないまま始終切味が変らんじやつた。

生蕃という奴は学者の話によると、日本人の先祖という事じゃが、ワシもつくづくそう思うたなあ。生蕃が先祖なら恥かしいドロコではない。日本人の先祖にしては勿体ない位、立派な奴どもじや。彼奴等きやつは、戦争に負けた時が、死んだ時という覺悟を女子供の端くれはしまでもチャンと持つていたので、生きたまま捕虜にされると何とのお愉快な、理窟のわからんような面付きつらきをしておつた。彼奴等は白旗を揚げて降参するなどという毛唐流の武士道を全く知らぬらしいので、息の根の止まるまで喰い付いて来よつたのには閉口したよ。そいつを抵抗出来ぬように縛り上げて珠数つなぎにして歸ると、日本人は賢い。首にして持つて歸るのが重たいためにこうするらしい。俺達は自分の首を運ぶ人夫に使われている

のだ……と云うておつたそうじやが、これにはワシも赤面したのう。途中で山道の谷合いに望んだ処に來ると、ここで斬るのじやないかという面付つらつきで、先に立っている奴が白い齒を剥むき出して冷笑しいしい、チラリチラリとワシの顔を振り返りおつたのには顔負けがしたよ。そんな奴はイクラ助けても帰順する奴じやないけに、總督府の費用を節約するために、ワシの一存で片端かたっぱしから斬り棄すてる事にしておつた。今の日本人の先祖にしてはチツと立派過ぎはせんかのうハツハツハツハツ」

日本に歸つて千代町の役場に奉職している時は毎月五円の月給（巡査の月給二円五十錢、警部が三円時代）を貰つていたが、その殆んど全部が酒代さかてになつていた事は云う迄もない。今は故人になつた前の福岡市の名市長、佐藤平太郎氏は神戸署の一巡査の身で、外人の治外法権制度に憤慨し、神戸居留地域を離るる一間ばかりの処で、人力車夫に暴行して逃げて行く外人を斬つて棄て、天下を騒がした豪傑であるが、氏は語る。

「巡査を罷やめて故郷に歸り、久し振りに昔の面小手友達めんこての奈良原を千代町の寓居に訪うてみると、落ちぶれたにも落ちぶれないにも四畳半といえ、四畳半、三方の壁の破れから先は天下の千畳敷に續まづいてゐる。その秣まぐさを積んだような畳の中央に虱しらみに埋まつたまま悠々

と一升徳利を傾けている奈良原を発見した時には、流石さすがの僕も胸が詰ったよ。僕も相当、落ちぶれたおぼえはあるが、奈良原の落ちぶれようには負けた。アンマリ穢きたないので上りかねているのを無理に引っぱり上げた奈良原は大喜びだ。

『久し振りだ。丁度いいところだから一杯飲め。まずその肴さかなを抓つまめ』という。見ると禿はげちよろけた椀の蓋に手前が川で掴んで来たらしい一寸すんぐらいの小蝦こえびが二匹乗っかっている。『遠慮なく喰え』という志は有難いが、それを肴に奈良原が一升の酒を飲むのかと思うと涙がこぼれた。一匹の小蝦のどが咽喉のどを通らないのを無理に冷酒ひやざけで流し込んで『これが土産だ』と云ってその時の僕の全財産、二十錢を置いて来た」云々。

そうした貧乏のさなかに大変な事が起った。奈良原翁が病氣になったのだ。

何だか酒が美味おいしくない。飯が砂を嚙むようで、頭がフラフラして死にそうな気がするの
で、千代町役場からその月の俸給を一円借りて近所の医者いしやの処へ行った。一円出して診察を請うて薬を貰ったが、

「どうです。助かりますか」

と問うてみると若い医者いしやが首をひねった。

「どうも非道ひどい肺炎ですから、絶対に安静にして寝ておいでなさい。御親戚の方か何かに

附添つておもらいなさい」

奈良原翁は、こうした言葉を「もう助からない」意味と取つて非常に感謝した。

……俺はイヨイヨ死ぬんだ。奈良原到がコレ以上に他人に迷惑をかけず、コレ以上に世道人心の腐敗墮落を見ないで死ぬるとは何たる幸福ぞ。よしよし。一つ大いに祝賀の意を表して、愉快に死んでやろう……。

奈良原翁は、その足で今一度役場に立寄つて町長に面会した。

「オイ。町長。イヨイヨ俺も死ぬ時が来たぞ」

「ヘエツ。何か戦争でも始まりますか」

「アハハ。心配するな。今医者が俺を肺炎で死ぬと診断しおつた。そこでこれは相談じゃが、香奠かでんと思うて今月の俸給の残りの四円を貸してくれんか」

「ヘエヘエ。それはモウ……」

というので四円の金を握ると今度は酒屋へ行つて、酒を一樽買つて引ひき栓せんを附けて例の四畳半へ届けさした。

その樽と相前後して帰宅した奈良原翁は、軒先の雨垂落あまだれおちの白い砂を掻集めて飯茶碗へ入れ、一本の線香を立て樽と並べて寢床の枕元に置いた。それから大きな汁椀に酒を引い

て、夜具の中でガブリガブリやっているうちにステキない心持になった。ハハア。こんな心持なら死ぬのも悪くないな……なぞと思ひ思い朝鮮征伐の夢か何かを見ている中^{うち}に前後不覚になつてしまった。

そのうちにチューチューという雀の声が聞えたので奈良原翁はフツと気が付いた。ハハア。極楽に來たな。極楽にも雀が居るかな……なぞと考えて又もウトウトしているうちに、今度は博多灣の方向に當つてボオ——ボオ——という蒸氣船の笛が鳴つたので奈良原翁はムツクリと起上つて眼をこすつた。見ると、誰が暴れたのかわからないが昨夜の大きな酒樽が引っくり返つて、栓が抜けている横に、汁椀が踏^{ふみつぶ}潰^{つぶ}されている。通夜^{つや}の連中に飲ましてやるつもりで、残しておいた酒は一滴も残らず破れ畳が吸い込んで、そこいら一面、真赤になつて酔払っている。

その樽と、枕を左右に蹴飛ばした奈良原翁は、蹠々^{そうそうろうろう} 踉々^{ろうろう} として昨日^{きのう}の医者^きの玄関に立つた。診察中の医者^きの首筋を、例の剛力でギューと掴んで大喝した。

「この藪医者。貴様のお蔭で俺は死^{しにそこ}損^{そこ}のうたぞ。地獄か極楽へ行くつもりで、香奠^{しんも}を皆飲んで終^{しも}うた人間が、この世に生き返つたらドウすればええのじゃ」

度を失つた医者はポケットから昨日の皺苦茶の一円札を出して三拝九拝した。

「……ど……どうぞ御勘弁を、息の根が止まります」

「馬鹿奴^め……その一円は昨日^{きのう}の診察料じや。それを取返しに来るような奈良原到^きと思うか。見損なうにも程があるぞ」

「どうぞどうぞ。お助けお助け」

「助けてやる代りに今日の診察料を負ける。そうして今一遍、よく診察し直せ。今度見損うたなら斬つてしまふぞ」

^{ちなみ}因にその診察の結果は全快、間違いなし。健康^{もうしづん}申分^{ぶん}なし。長生き疑いなしというものであつた。

大正元年頃であつた。桂内閣の憲政擁護運動のために、北海道の山奥から引っぱり出された奈良原到翁は、上京すると直ぐに旧友頭山満翁を当時の寓居の靈南坂に訪れた。

互いに死生を共にし合つた往年の英傑児同志が、一方は天下の頭山翁となり、一方は名もなき草叢^{そうそうり}裡^{きゆうそだい}の窮措大翁となり果てたまま悠々^{きゆうかつ}久^{じよ}濶^わを叙^{じよ}する。相共に憐れむ双^{そうか}鬢^んの霜といったような劇的シーンが期待されていたが、実際は大違いであつた。両翁が席を同じゆうして顔を見合せてみると、双方ともジロリと顔を見交してアゴを一つシヤク

り上げた切り一言も言葉を交さなかった。知らぬ者が見たら、銀座裏でギャング同志がスレ違った程度の手軽い挨拶に過ぎなかったが、しかし、その内容は雲泥の違いで、両翁とも互いに、往年の死生を超越して気魄が、老いて益々壮なるものが在るのを一瞥の裡に看取し合つて、意を強うし合っているらしい。その崇高とも、厳肅とも形容の出来ない気分が、席上に^{ほうはく}磅^{えり}して来たので皆思わず襟を正したという。

それから入^{いり}代^{かわ}り立代り来る頭山翁の訪客を、奈良原翁はジロリジロリと見迎え、見送つていたが、やがて床の間に置いてある大きな^{すずりいし}硯石に注目し、訪客の切れ目に初めて口を開いた。

「オイ。頭山。アレは何や」

頭山翁は、その硯をかえりみて微笑した。

「ウム。あれは俺が字を書いてやる硯タイ」

奈良原翁は、それから間もなく頭山翁に見送られて玄関を辞去したが、門前の広い通りを黙つて二三町行くと、不意に立止つて鴉^{からす}の飛んで行く夕空を仰いだ。タツタ一人で^{かぜん}呵然として大笑した。

「頭山が字を書く……アハハハ。頭山が字を書く。アハハ。頭山が書を頼まれる世の中に

なつてはモウイカン、世の中はオシマイじゃワハハハハハ……」

そこいらに遊んでいる子供等が皆、ビツクリして家の中へ逃込んだ。

奈良原翁が晴れの九州入をする時に、当時二十五か六で、文学青年から禅宗坊主に転向していたばかりの筆者は、思いがけなく到翁の侍従役を仰付おおせつけられて、共々に新橋駅（今の汐留駅）に来了。翁は旧友から貰ったという竹製のカンカン帽に、手織木綿もめん縞しまの羽織着流し、青竹の杖、素足に古い泥ダラケの桐下駄きりげた、筆者は五リン刈の坊主頭に略法りやくほ衣うえ、素足に新しい麻裏という扮装である。荷物も何も無い気楽さに直ぐに切符売場へ行つて、博多までの二等切符を買つて来ると、三等待合室の中央に立つて待っている到翁が眼早く青切符を見咎みとがめてサツと顔色を変えた。

「それは中等の切符じゃないかな」

その頃から十四五年ぜん前までは二等の事を中等と云った。従つて一等の白切符を上等と称し、三等の赤切符を下等と呼んだ。

「はい。昔の中等です。御老体にコタえると不可いけませんから……」

「馬鹿ッ」

という大喝が下等待合室を、地雷火のように驚かした。

「馬鹿ッ。アンタは、まだ若いのに何という不心得な人かいな。吾々のような人間が、国家に何の功労があれば中等に乗るかいな。下等でも勿体ない位じゃ。戻いて来なさい。馬鹿ナッ」

と云ううちに青竹の杖が、今にも筆者の坊主頭に飛んで来そうな身構えをした。……飛んでもない国士のお供を仰付けられた……と思ひ思い大勢の下等客の視線を浴びながら、買換えに出て行つた時の、筆者の器量の悪かつたこと……。

それから予定の通り下等の急行列車に乗込むと、又驚いた。

ちようど二人分の席が空^すいていたので、窓際の席を翁にすすめると翁は青竹の杖を突張つて動かない。

「イヤイヤ。アンタ窓の処へ行きなさい。わしは年寄で、夜中に何度も小便に行かねばならぬけにウルサイ」

どちらがウルサイのかわからない。云うがままに窓の前に席を取ると又々驚いた。筆者に尻を向けて、ドッコイショと中央の通路向きに腰を卸^{おろ}した翁は、袂^{たもと}から一本の新しい日本蠟燭^{ろうそく}を出して、マッチで火を点^つけた。何をするのかと思うと、その蠟涙^{ろうるい}を中

夾の通路のマン中にポタポタと垂らしてシツカリとオツ立てた。驚いて見ているうちに、今度は腰から煤竹筒すすだけづつの汚ない煙草入を出して、その蠟燭の火で美味おいしそうに何服も何服も刻煙草きざみたばこを吸うのであったが、まだ発車していないので、荷物なんかを抱えて通抜けようとする奴なんかが在ると、翁が殺人狂じみた物凄い眼を上げて、ジロジロと睨むので、一人残らず引返して出て行く。痛快にも傍若無人にもお話にならない。見るに見かねた筆者が、

「マツチならコチラに在りますよ」

と云ううちに煙草を吸い終った翁は、蠟燭の火を蠟涙と一緒に振切つて、古新聞紙に包んで袂に入れた。蠟涙を引っかけられた向側の席の人が慌ててマントの袖そでを揉んでいたが、翁は見向きもしなかった。

「マツチや線香で吸うと煙草が美味おいしゆうない。燃え火で吸うのが一番美味おいしいけになあ」奈良原翁の味覚が、そこまで発達している事に氣附かなかった筆者は全く痛み入ってしまつた。この塩梅あんばいでは列車に放火して煙草を吸いかねないかも知れない。

「北海道の山奥で雪に埋れていると酒と煙草が楽しみでなあ。炉の火で吸う煙草の味は又格別じゃ。もつとも煙草は滅多に切れぬが酒はよく切れたので閉口した。万止むを得ん時

には砂糖湯を飲んだなあ。アルコールも砂糖も化学で分析してみると同じ炭素じゃけになあ」

筆者はイヨイヨ全く痛み入ってしまった。同時にそこまで考える程に苦しんだ翁が気の毒にもなった。

国府津こうづに着いてから正宗の瓶と、弁当を一個買つて翁に献上すると、流石さすがに翁の機嫌が上等になつて来た。同時に翁の地声がダンダン潤おいを帯びて来て、眼の光りが次第に爛々らんらんけいけいと輝き出したので、向い合つて坐つていた二人が気味が悪くなつたらしい。箱根を越えない中うちにソコソコと荷物を片付けて、前部の車へ引移つてしまったので、翁は悠々と足を伸ばした。世の中は何が倅しあわせになるかわからない。筆者もノウノウと両脚を踏伸ばして居ねむりの準備を整える事が出来た。その二人の脚の間へ翁が又、弁当箱の蓋に才ツ立てた蠟燭の火を置いたので、筆者は又、油断が出来なくなつた。

翁は一服すると飯を喰い喰い語り出した。

「北海道の山の中では冬になると仕様がなけに毎日毎日聖書を読んだものじゃが、良え本じやのう聖書は……アンタは読んだ事があるかの……」

「あります……馬太伝マタイと約翰伝ヨハネの初めの方ぐらいのものです」

「わしは全部、数十回読んだのう。今の若い者は皆、聖書を読むがええ。あれ位、面白い本はない」

「第一高等学校では百人居る中で恋愛小説を読む者が五十人、聖書を読む者が五人、仏教の本を読む者が二人、論語を読む者が一人居ればいい方だそうです」

「恋愛小説を読む奴は直ぐに実行するじやろう。ところが聖書を読む奴で断食をする奴は一匹も居るまい」

「アハハ。それあそうです。ナカナカ貴方は通人ですなあ」

「ワシは通人じゃない。頭山や杉山はワシよりも遥かに通人じゃ。恋愛小説なぞいうものは見向きもせぬのに読んだ奴等が足下にも及ばぬ大通人じゃよ」

「アハハ。これあ驚いた」

「キリストは豪いえら奴じやのう。あの腐敗、墮落したユダヤ人の中で、あれだけの思い切った事をズバリズバリ云いよったところが豪い。人触ふるれば人を斬り、馬触ふるれば馬を斬るじゃ、日本に生れても高山彦九郎ぐらいのネウチはある男じゃ」

「イエス様と彦九郎を一所いっしょにしちや耶蘇教やそ信者が憤りおこやしませんか」

「ナア二。ソレ位のところじやよ。彦九郎ぐらいの気概を持った奴が、猶太ユダヤのような下等な国に生れれば基督キリスト以上に高潔な修業が出来るかも知れん。日本は国体が立派じやけに、よほど豪い奴でないと光らん」

「そんなもんですかねえ」

「そうとも……日本の基督教は皆間違うとる。どんな宗教でも日本の国体に捲込まれると去勢されるらしい。愛とか何とか云うて辜丸さんたまの無いような奴が大勢寄集まって、涙をロボロこぼしおるが、本家の耶蘇はチャンと辜丸さんたまを持っておった。猶太でも羅馬ロウマでも屁とも思わぬ爆弾演説を平気で遣やりつづけて来たのじやから恐らく世界一、喧嘩腰の強い男じやろう。日本の耶蘇教信者は殴られても泣笑いをしてペコペコしている。まるで宿引きか男めかけのような奴ばっかりじや。耶蘇教は日本まで渡って来るうちに印度洋インドかどこかで辜丸さんたまを落いて来たらしいな」

「アハハハハ。基督の十字架像に大きな辜丸さんたまを書添えておく必要がありますな」

「その通りじや。元来、西洋人が日本へ耶蘇教を持込んだのは日本人を去勢する目的じやった。それじやけに本家本元の耶蘇からして去勢して来たものじや。徳川初期の耶蘇教禁止令は、日本人の辜丸さんたま、保存令じやという事を忘れちやイカン」

筆者はイヨイヨ驚いた。下等列車うちの中で殺人英傑、奈良原到翁から基督教ときんた丸の講釈を聞くという事は、一生の思い出と気が付いたのでスツカリ眼が冴えてしまった。

奈良原到翁の逸話はまだイクラでもある。筆者自身が酔うた翁に抜刀で追おっかけられた話。その刀をアトで翁から拝領した話など数かず限かぎりもないが、右の通、翁の性格を最適切にあらわしているものだけを挙げてアトは略する。

ちなみ因に奈良原翁は嘗て明治流血史というものを書いて出版した事があるという。これはこの頃聞いた初耳の話であるが、一度見たいものである。

次は江戸ツ子のお手本、はなかわとすけろく花川戸助六、ばんすい幡随院長兵衛いんちようべえに对照してヒケを取らない博多ツ子のお手本、故、篠崎仁三郎君を御紹介する。にさぶろう

篠崎仁三郎

(上)

……縮屋^{ちぢみや}新助じゃねえが江戸っ子が何でえ。徳川三百年の御治世がドウしたというんだ。憚^{はばか}んながら博多の港は、世界中で一番古いんだぞ。埃及^{エジプト}の歴山^{アレキサンドリア}港よりもズツト古いんだ。神世の昔×××様のお声がかりの港なんだから、いつから初まったか解かれねえ位^{くれえ}だ。ツイこの頃まで生きていた太田道灌^{どうかん}のお声がかりなんてえシミツタレた町たあ段式^{もったい}が違うんだ。

勿^{もったい}体なくも日本文化のイロハのイの字は、九州から初まったんだ。アイヌやコロボツクルの昔から九州は日本文化の日下^{ひのした}開山^{かいざん}なんだ。八幡様や太閤様の朝鮮征伐、唐^{から}、天^て

笠んじくの交通のカナメ処になつて、外国をピリピリさせていた名所旧跡は、みんな博多を中ま心んなかにして取囲んでゐるんだ。唐津、名護屋なごや、怡土城いと、太宰府みすき、水城みすき、宇美うみ、宮崎はこざき、多々羅たたら、宗像むなかた、葦屋あしや、志賀島しかのしま、残島のこのしま、玄海島、日本海海戦の沖の島なんて見ろ、屈辱外交の旧跡なんて薬にしたくもないから豪気だろう。伊豆の下田の黒船以来、横浜、浦賀、霞が関なんて毛唐に頭ア下げつ放しの名所旧跡ばかりに取巻かれてゐる東京なんかザマア見やがれた。

もう一ペン云つてみようか。江戸ツ子が何でえ。博多には博多ツ子が居るのを知らねえか。名物の博多織までシャンとしてゐるのが見えねえか。博多小女郎の心意気なんか江戸ツ子にやあわかるめえ。

日増しの魚や野菜を喰つてゐる江戸ツ子たあ臍はらわた腑が違ふんだ。玄海の荒海を正面に控えて「襟えり垢あかの附かぬ風」に吹き晒さらされた哥あんな兄ちゃんだ。天下の城の鯨しやちほこの代りに、満蒙露西ロシ亜アの夕焼雲を横目に睨にらんで生れたんだ。下水どぶの親方の隅田川に並んでゐるのは糞船くそふねばかりだろう。那珂川なかの白砂では博多織を漂さら白すんだぞ畜生……。

芸妓げいしやを露払いにする神田のお祭りが何だ。博多の山笠やまがさか昇あがきは電信柱を突きたおすんだぞ。飛鳥山あすかの花見ぐらいに驚くな。博多の松囃子ドンタクを見ろ。町中が一軒残らず商売を休んで

御馳走を並べて、全市が仮装行列をやるんだ。男という男が女に化けて、女という女が男に化けて飲み放題の踊り放題の無礼講が三日も続くんだぞ。謝肉祭カーニバルの上を行くんだ。巡查や兵隊までが仮装ドンタクと間違まちがえられる位、大あばれに暴れるんだぞ。そんな馬鹿騒ぎの出来る町が日本中のどこに在るか探してみろ。それでいて間違いなんか一つもないんだ。翌る日になると酔うた影も見せずにキチンと商売を初めるんだ。絹ずくめの振袖でも十両仕立ての袴はんてん纏はでもタツタ一度で泥ダラケにして惜しい顔もせずに着棄て脱ぎ棄てだ。三味線知らぬ男が無ければ、赤い扇持たぬ娘も無い。博多は日本中の諸芸の都だ。町人のお手本の居る処だぞ。来るなら来い。臟腑はらわたで来い。大竹を打割って締込みにして来い……。

×

×

×

ここに紹介する博多はかたつこ児の標本、篠崎仁三郎君は、博多大浜おおはまの魚市場でも随一の大株、湊屋みなとやの大将である。近年まで生きていた評判男であるが正に名僧仙崖せんがい、名娼明月めいげつと共に博多の誇りとするに足る不世出の博多ツ子の標本と云つてよからう。但、博多語が日本の標準語でないために、その洒脱な言葉癖をスケッチしてピントを合わせる事が出来な

いのが、千秋の遺憾である。

同君の経歴や、戸籍に関する調査は面倒臭いから一切ヌキにして、イキナリ同君の真面目しんめいに接しよう。

筆者が九州日報の記者時代、同君を博多旧魚市場に訪問して「博多ツ子の本領あずき」なる話題について質問した時の事である。短躯肥満、童顔豊頬にして眉間に小豆大の疣いぼを印したミナト屋の大将は快然として鉢巻を取りつつ、魚鱗うろこの散乱した耀台ばんだいに胡座あぐらを掻き直した。競場せりばで鍛い上げた胴間声どうまを揺すつて湊屋一流の怪長広舌を揮い始めた。

「へエ。貴方あなたは新聞記者さん……へエ。結構な御商売だすなあ。社会の木魚タタキ。無冠の太夫……私共のような学問の無いものにや勤まりまつせん。この間も店の小僧に『キネマ・ファンたあ何の事かいなあ』て聞かれましたに、西洋の長唄の先生の事じやろうて教えておきましたれア違いますそうで。キネマ・ファンちう者は日本にも居るそうで。私は又、杵屋勘五郎きねやが風邪引いたかと思うておりましたが……アハハハ。

魚市場の商売ナンテいうものは学問があつちや出来まつせん。早よう云うてみたなら詐欺インチキと盗人ぬすこの混血児あいのこだすなあ。商売の中でも一番商売らしい商売かも知れませんが……。

第一、生しな魚をば持つて来る漁師が、漁獲高とれだかを数えて持つて来る者は一人も居りまつせん。沖で引つかかった鯖さばなら鯖、小鯛こたいなら小鯛をば、穫れたら穫とれただけ船に積んでエツサエツサアと市場の下へ漕ぎ付けます。アトは見張りの若い者か何か一人残つて、櫓ろを引上げてそこいらの縄なわ暖簾のれんに飲みげに行きます。

その舟の中の魚を数え上げるのは市場の若い者で、両手で五匹ぐらいずつ一掴みにして……ええ。シトシトシト。フタフタ。ミスミス。ヨスヨスヨスと云いおる中うちに、三匹か五匹ぐらいはチャンと余計に数えております。永年数え慣れておりますケン十人見張つておりまして同じ事で、メ《しめ》て千とか一万とかになった時には、二割から三割ぐらい余分に取込んでおります。

そいつを私が糶ぼん台だいに並べて、

『うわアリヤリヤリヤ。拳けん々安かア安かア安かア。両拳りゃんこ両拳両拳。うわアリアリア安か安か安か』

と糶せるうちに肩を組んで寄つて来た売子の魚屋やつが十尾コン一円二十銭で落いたとします。その落いた魚屋やつの襟印を見て帳面に『一円五十銭……茂兵衛』とか何とか私共一流の走書きに附込んだ魚やつを泄さらうように引つ担いで走り出て行きます。払いの悪い奴なら一円七十銭に

も八十銭にも付けておきますので、後で帳面を覗きに来ても一円三十銭やら二円五十銭やら読み分ける事は出来まつせん。学問のある人の書くような読み易い字で、帳面をば附けたなら私共の商売は上つたりで……。つまり何分かの口銭を取った上に、数える時に儲ける。帳面に附ける時に又輪をかける。独博奕ひとりばくちの雁木鏝がんぎやすりという奴で行き戻り引つかかるのがこの市場商売の正体で、それでもノホホンで通つて行くとところが沽券こけんと申しますか、顔と申しますか。しかもその詐欺インチキと盗人の附景氣のお蔭で、品物がドンドン捌さばけて行きますので、地道に行きよつたら生物なまものは腐つてしまいます。世の中チウものは不思議なものです。

……へエ。博多児はかたつこの資格チウても別段に困難むずかしい資格は要りません。懲役に行かずに飯喰いよれあ、それで宜ええ訳で……。もつともこれが又、博多児の資格の中でも一番困難しい資格で御座います。ほかの資格は何でもない事で……。個条書にしたなら四ツか五つ位も御座いましょうか。

◇第一个条が、十六歳にならぬ中うちに柳町の花魁おいらんを買うこと――

◇第二个条が、身代構わずに博奕を打つ事――

◇第三個条が、生命いのち構わずに山笠やまを昇かぐ事――

◇第四個条が、出会い放題に××する事――

◇第五個条が、死ぬまで鰓ふくを喰う事――

◇第六個条が……まあコレ位に負けといて下さい。芸者を連れて松囃子ドンタクに出る事ぐらいにしといて下さい。もつともこれは私共の若い時代じぶんの事で、今は若い者が学校に行きますお蔭で皆、賢明りこうになりました故け、そげな馬鹿はアトカタも無のうになりました。その代り人間が信用つきあいにく悪うなりましたが。

……へエ。私がその資格を通つたかと仰おつしや言るのですか。これは怪けしからん。通つたにも通らぬにも甲の上ダラケの優等生で……へエ。

十五になつて高等小学校を出ると直ぐに紺飛白こんがすりの筒ツポを着て、母様かかさんの臍へそ繰くりをば仏壇の引出から掴み出して、柳町へ走つて行きましたが、可愛がられましたなあ。『小かちんあんちゃんちん
哥あんちゃん兄あんちゃん小かあんちゃん哥あんちゃん兄あんちゃん』ち云うと息の止まる程、花魁に抱き締められましたなあ。ハハハ。帰りがけに真鍮の指環いびがねをば一個花魁から貰いましたが、その嬉しさというものは生れて初めてで御座いました。日本一の色男になったつもりで家うちへ帰つても胸がドキドキして眼の中が熱あつつうなります。そこで上り框かまちに腰をかけて懷中ふつくちからその貰うた指環をば出して、

掌てのひまんなかの中央へ乗せて、タメツ、スガメツ引つくり返かやいておりますと、背後うしろからヌキ足さし足、覗おやしいて見た親父が、大きな拳骨で私の頭をゴツウ——ンと一つ啖くらわせました。その拍子だいじに大切な指環がどこかへ飛んで行いてしまいました。

私は土間へ引つくり返つてワンワン泣き出しました。何をいうにも今年十五の色男だすケに根どたまつから他愛どたまがありません。そこへ奥から母親かかさんが出て来まして、

『何事なんごと、泣きよるとナ』

と心配して聞きましたから、

『指環いびがねの無のうなつたあ。ウワア——』

と一層、高音たかねを揚げて精一ぱいに泣出しますと、母親は私の坊主頭を撫でながら、

『ヨカヨカ。指環ぐらい其中いんま、買こうちやる』

と慰めてくれました。私は腹立ち紛れに、

『アンタに買うてもろうたチャ詰つままん』

と怒鳴つてメチャメチャに泣出しましたが、あん時はダイブ失恋しておりましたナア。

鰻うくも、ずいぶん喰くいましたなあ。

私の口から云うのも何で御座いますが、親父は市場でも相当顔の利いた禿頭はげで御座いましただけに、その頃はまだ警察から禁めとられておりましたフクを平気で自宅うちの副食物ごさいにしておりました。まあだ乳離れしたバツカリの私の口へ、雄精しんこうなぞを箸で挟んで入れてくれますので母親がビツクリして、

『馬鹿な事ばしなさんな。年端としはも行かん児供こどもが中毒あたつて死んだならどうしなさるな』と押止めますと、親父は眼を剥むいて母親を怒鳴がみ付けたそうです。

『……甘いこと云うな。鰻ふくをば喰きい能きらんような奴は、博多の町では育ち能うらんぞ。今から慣ならしておかにや、詰つまらんぞ。中毒あたつて死ぬなら今の中うちじゃないか』

そげな調子で、いつから喰くい初めたか判然わかりませんが、鰻ふくでは随分、無茶をやりました。最初が一番毒の少ないカナトウ鰻をば喰くいましたなれが、だんだん免疫なれて来ますと虎鰻、北枕ナンチいうものを喰くわんとフク喰くうたような氣持になりまっせん。北枕などを喰くうた後で、外へ出て太陽光ひなたに当たると、眼が眩もうてフラフラと足が止まらぬ位シビれます。その氣持えの良え事えというものは……。

それでもダンダンと毒に免疫なれて来ると見えて、後日しまいには何ともうなつて来ます。北枕を喰くうた奴も一町内に三人や五人は居るような事でトント自慢になりまっせんケニ、一番

恐ろしいナメラという奴を喰うてみました。

ナメラというのは小さい鰻で、全身が真黒でヌラツとした見るからに気味の悪い恰好をしておりますが大抵の鰻好が『鰻は洗いよう一つで中毒らん。しかしナメラだけはそう行かん』と申します。そうかと思うと沖から来る漁夫なぞは『甘い事云いなさんな。ナメラが最極上利く』と云う者も居ります。

そこで私共の放蕩仲間が三四人申合わせてそのナメラを丸のままブツ切りにして味噌汁に打込んで一杯飲む事にしましたが、それでも最初はヤツパリ生命が惜しいので、そのナメラの味噌汁をば浜外れの蒲鉾小舎に寝ている非人に遣ってみました。

『ホラ……余り物ば遣るぞ』

と云うて蒲鉾小舎の入口に乾いて在る面桶に半分ばかり入れてやりましたので、非人はシキりに押頂いておりますが、暫くしてから行ってみますと、喰うたと見えて面桶が無い。本人もまだ生きて煙草を吸うている様子です。そこで安心して皆で喰べましたが、美味う御座いましたなあ。ソレは……トモ良え氣持に酒が廻わってしまいました。

それから帰り途にその非人の処を通りかかりましたが、酔うたマギレの上機嫌で、『最前の味噌チリ喰うたか』

と尋ねてみますと老人としよりの躰いざりの非人が入口に這い出して来てペコペコ拝み上げました。

『ヘイヘイ。ありがとう様で御座ります。アナタ方も召上りましたか』

と爛ただれた瞳めをシヨボシヨボさせました。

『ウン。喰うた。トテモ美味うまかつたぞ』

と正直に答えますと、暫く私どもの顔を見上げておりました非人は、先刻さいぜん、呉れてや
つた味噌チリの面桶めんつうを筵むしろの蔭から取出しました。

『ヘイ。それなら私も頂戴いただきまっしょう』

とモウ一ペン面桶を拝み上げてツルツル喰い始めたのには驚きました。非人で試験ためして
みるつもりが、正反対ひつちやうこつちに非人から試験された訳で……。

これはマア一つ話ですがそげな来歴わけで、後日しまいにはそのナメラでも満足たんのうせんようになつ
て、そのナメラの中でも一番、毒の強い赤肝を雁皮がんびのように薄く切ります。それから大き
な禪へこだら、鹽まづに極上井戸水を一パイ張りまして、その中でその赤肝の薄せんまいぎ切りを両手で丸
めて揉みますと、鹽一面に山のごと泡が浮きます。まるで洗濯石鹼あらうしやぼんを揉むようで……そ
の水を汲み換え汲み換え泡の影が無のなるまで揉みました奴の三杯酢さんぱいそを着さにして一杯飲のも
うモノナラその美味うまさというものは天上界だすなあ。喰い残りを掃溜とろりへ捨てた奴を、鶏とりが

拾いますとコロリコロリ死んでしまいますがなあ。

……へエ。私は四度死んで四度とも生き返りました。四度目にはもう絶望つまらんちいうて棺桶へ入れられかけた事もあります。私の兄貴分のだいそう大惣ナンチいう奴は棺の中でお経を聞きながらビツクリして、ウウ——ンと声を揚げて助かりました位で……イエイエ。作りごとじや御座いまっせん。この理窟ばかりは大学の博士はかせさんでもわからん。へエ。西洋の小説にもそのような話がある……墓の下から生いき上った……へエ。それは小説だっしょうが、これは小説と違います。正直正銘シラ真剣のお話で……。

御承知か知りませんが、鰻あたに中毒ると何もかも痲痺しびれてしもうて、一番しまい間際がけに聴覚みみだけが生き残ります。

最初、唇くちの周囲ぐもりがムズ痒いような気持で、サテは少ちつと中毒ったかな……と思ううちに指の尖端さきから不自由になつて来ます。立とうにも腰が抜けているし、物云おうにも声が出ん。その中うちに眼がボウ——ツとなつて来て、これは大おお変おとが出来たと思うた時にはモウ横に寝ているやら、座っているやら自分でも判然わからんようになっております。ただ左ひだり右みぎの耳みみだけがハッキリ聞こえておりますので、それをタヨリに部屋の中の動静ようすを考えておりますと

ころへ、聞慣れた近所の連中の声がガヤガヤと聞こえて来ます。気の早い連中で、モウ棺箱を担い込んで来ている模様です。

『馬鹿共が。又三人も死んでケツカル。ほかに喰う品物が無いじゃあるまいし』

『知らぬ菌蕈喰うて死んだ奴と鰻喰うて死んだ奴が一番、見ともないナア』

『駐在所にや届けといたか』

『ウン。警察では又かチウて笑いよった。いま警察から医師が来て診察するち云いよった』

『診察するチウて脈の上った人間はドウなるもんかい』

『棺の中へ入れとけ。ドツチにしても形式ばかりの診察じやろうケニ』

『蓋だけせずに置けや。親兄弟が会いげに来るケニ……』

『親兄弟も喜ばうバイ、此輩どもが死んだと聞いたならホツとしよう』

『可哀相に……泣いてやる奴も居らんか……電信柱の蟬ばかりか。ヤ……ドツコイシヨ

……』

『重たいナア。死んだ奴は……』

『結構な死態タイ。良え了簡バイ。鰻に喰われよる夢でも見よう』

『ハハハ。鰻の方が中毒ろうバイ』

『しかしこの死態をば情婦い見せたナラ、大概の奴が愛想尽かすばい。眼球をばデングリ返いて、鼻汁垂れカブって、涎流つとる面相あドウかいナ』

『アハハハ。腐った鰓に似とる。因果覲面バイ』

『オイオイ。ここは湊屋の仁三郎が長うなつとる。誰か両脚の方ば抱えやい』

『待て待て。その仁三郎は待て。今俺が胸の処をば触つて見たれあ、まだどここのう温い様ある。まあだ生きとるかも知れん』

『ナニ。生きとるかも知れん。馬鹿吐け。見てんやい。眼球ア白うなつとるし、辜丸も真黒う固まつとる。浅蜷貝の腐ったゴト口開けとる奴ばドウするケエ』

『まあまあ。そう云うな。一人息子じゃけに、念入れとこう』

この時ぐらい親の恩を有難いと思うた事は御座いません。親というものが無かつたならこの時に私は、ほかの連中と一所に棺箱へ入れられて、それなりけりの千秋楽になつておりました訳で……。

『その通りその通り。助けてくれい助けてくれい』

と呼ぼうにも叫ぼうにも声は出ず、手も合わせられませぬ。耳を澄まして運を天に任かせておるその恐ろしき。エレベータの中で借金取りに出会つたようなもので……ヘエ……。

それでもお蔭様で生き上りますと又、現金なもので、折角、思い知った親の恩も何も忘れて博奕は打つ……××はする……。

……へエ。その××ですか。これはどうも商売の奥の手で、この手を使わぬ奴は人氣が立たず。魚類さかなが売れません。まあ云うてみればこの奥の手を持たん奴は魚売の仲間かぞに這入らんようなもので……へへへ。

その頃、私はまあだ問屋とんやの糶ばんだい台に座らせられません。禿頭はげの親爺おやじがピンピンして頑張がんぢやうっておりましたので……その親父おやじが引いてくれた魚類さかなの荷籠めごに天秤棒ぼおこを突込んで、母親かかさんが洗濯してくれた絆纏はんてん一枚、草鞋わらじ一足、赤禪あかべこ一本で、雨風を蹴破けやぶってワアツと飛出します。どこの町でも魚類さかなう売りは行商人あきないにんの花形役者はながたで……早乙女あんにゃんが採った早苗なえのように頭の天頂てつぺんに手拭てのこいをチョット捲き付けて、

『ウワ——イ。ナマカイランソ（鰯いわしの事）、ウワ——アアイ……』

と横筋違よこすじかいに往来おおかんば突抜けて行きます。号外と同じ事で、この触おらびごえ声の調子一つで売れ工合が違いますし、情婦おなごの出来工合が違いますケニ一生懸命の死物狂いで青天井を向いて叫おらびます。そこが若い者のネウチで……。

しかも呼込まれる先々が、大抵レコが留守だすけ二間違いの起り放題で、又、間違うてやりますと片身かたみの約束の鯖さばが一本で売れたりします。おかげでレコも帰つて来てから美味うまいものが喰えるという一挙兩得になるワケで……。

それでも五六軒も大持てに持てて高価たかい魚がアラカタ片付く頃になりますと、もうヘトヘトになつて、息が切れて、走ろうにも腰がフラ付きます。太陽てんとう様が黄色きんなく見えて、生な汗あせが背中を流れて、ツクツク魚売さかなうり人の商売が情無なさけうなります。何の因果でこげな間に生れ付いたか知らん。孫子の代まで生物なまものは売らせまいと思ひ思ひ空からになつた荷籠めごを担いで帰つて来ます。

それでも若い中うちには有難いもので、その晩一寝入りしますと又、翌る朝は何とのお生魚さかなを売りに行きとうなります。

バクチは親父おやじが生きとる中うちは遣りませんでしたが、死ぬると一気に通夜の晩から初めまして、三年経たぬ中うちに身代をスツテンテレスコにして終しまいました。それを苦に病んで母親も死ぬる……というような事で、親不孝者の標本おてほんは私で御座います。ヘイ。

今では身寄タヨリが在りませぬので、イクラ働いても張合いが御座いまっせん。それで

も世界中が親類いじんと思うて、西洋人の世話までしてみましたが、誰でも金かねの話だけが親類で、他事あとは途中みちで擦すれ違ちごうても知らん顔です。

『道楽はイクラしても構わん。貴様ぬしが儲けて貴様ぬしが遊ぶ事じゃケニ文句は云わんが、赤の他人でも親類になる……見ず知らずの他人の娘でも蹴倒けたおす金の威光だけは見覚えておけよ』

というのが死んだ親父の口癖で御座いましたが、全くその通りの懸かけ念ねなしで、五十幾いく歳のこの年になって、ようようの事、世間が見えて来ましたがチツト遅う御座いましたナア。人間万事身から出た錆さびと思うて……親不孝の申もうし訳わけと思うて、誰でも彼でも親切にしてやる片手間には、イツモ親父の石塔に頭を下げておりますが、お蔭で恩知らずや義理知らずに出会うても格別腹も立ちまつせん。両親の墓に線香を上げるとスウィツとしてしまします。

バクチの失敗しくじり談ばなしですか。バクチの方はアンマリ面白い事は御座いまっせんばい。資金かねに詰ねまって友達の生胆いきぎを売もって大間違いを仕出ちかしたのを幕切ちよんにして、立派にやめてしまいましたが、考えてみると私わたし輩しどもの一生は南京花火のようなもので……シユシユシユシユポンポン……ウワアーイというただけの話で……。

……へエ……その生胆売りの話ですか。どうも困りますなあ。アンマリ立派な話じゃ御座いませんで……あの時のような遣切ない事はありまっせんじやった。今まで誰にも云わずにおりましたが……懲役に遣られるかも知れませんで……。決して悪気でした事では御座いせんじやったが、人間の生胆きもと枕草紙かよいは警察が八釜やかましゅう御座いますケ二なあ……。

もつとも友達ともだちの生胆を売ったチウたて、ビックリする程の事じゃ御座いません。生胆の廃物利用をやつて見た迄の事だす。前のバクチの一件の続きですが……私が二十三か四かの年の十二月の末じやったと思ひますケ二、明治二十年前後の事だしつろうか。

前にも申しました通りバクチは親父の生きとる中うちは大おお幅で遣れませんでした、死ぬると一気に通夜の晩から枕経まくらぎようの代りに松切坊主まつきりぼうずを初めしたので、三年経たぬ中うちに身代がガラ崩れのビケになつてしもうた。それを苦にした母親が瘡せ細つて死ぬる。折角来てくれた女房までもが見損みそんのうたと吐こいて着のみ着のままで逃げてしもうた。その二十三か四の年の暮が仙崖さんの絵の通り『サルサルの年祝うた』になつてしもうた。

借金で首がまわらぬと申しますが、あの味わいバツカリは借金した者でないと理解わかりません。博多の町中、行く先々、右も左も虱しらみの卵生み付けたゴト不義理な借錢かりばかり。

真正面の青天井に見当を附けて兵隊^{ちんたい}さん式にオチニオチニと歩まぬと、虱の卵を生み附けられた顔がイクラでも眼に付きます。その虱の卵が一つ一つに孵化^われて、利が利を生みよる事を考えると、トテモ博多の町に居られた沙汰では御座いませぬ。こげな事にかけますと私はドウモ気の小さい方と見えまして……ヘイ。

私の女郎買とバクチの先^{せん}達^{だつ}で大和屋惣兵衛^{やまとやそうべえ}、又の名を大惣^{だいそう}という男が居りました。

最前チョットお話ししました棺の中でお経を聞いてビックリした豪傑で、お寺の天井に居る羅漢様と生き写しの面相^{つらよう}で、商売の古道具屋に座つて、煙草を吸うております中^{うち}に蜘蛛^{くも}が間違えて巣を掛けよるのを知らずにおつたという大胆者^{おちつきもん}で御座います。

平生^{ふだん}から私の事をドウ考えているか判然^{わか}りませんでした^かが、イヨイヨ押詰^しまった師走^{しわす}の二十日頃にこの男の処へ身の上相談に行きますと、相変らず煤^{すす}け返つた面^{つら}で古道具の中に座つておりましたが、私の顔をジイツと見ながら、黙つて左の掌^てを出せと申します。何を云うかわからん、気味^{きび}の悪いところがこの男のネウチで、唧^{くわ}え煙管^{ぎせる}のまま私の掌^{てのひら}を見ておりましたが、

『これはナカナカ運のいい手相じゃ。長崎へ行けばキット運が開けると手筋に書いてある』と云います。私は呆れました。

『馬鹿吐け。長崎へ行く旅費がある位なら貴様の処へ相談に来はせぬ』

『まあ待て。そこが貴様の運のええところじゃ。運氣のお神様は貴様の来るのを待つて御座った』

と云ううちにチョット出て行きますと、瞬く間に五十兩の金を作つて来たのには驚きました。

『実は俺も生れてから四十五年、ここへ坐つ居つたが、イヨイヨこの家へ居ると四十六の年が取れん位、借金の下積したづみになつとる。ちようど女房と子供が、実家の餅搗もちつきの加勢に行とるけに、この店をば慾いがつとる奴の処へ行て委任状と引換えに五十兩貰うて来た。序ついでに俺のバクチの弟子で女房の弟おとこに当るチットばかり耳の遠い常つんしゅう吉きという奴も、長崎へ行きたがつとるけに、今寄つて誘うて来た。三人連れで長崎へ行て一旗揚げてみよう。

異人相手の古道具ふるものは儲かる理窟を知つとるけに、大船に乗った気で随ついて来い』

と云います。日本一アブナイ運の神様ですが、迷うておりました私は大喜びで、そこへボンヤリ這入つて来た、今の話のツン州わかくという若者と三人で久し振りに前祝を一パイ遣つて、夜汽車に乗つて長崎へ来ました。

ところで途中、湯町にも武雄（いずれも女の居る温泉場）にも引つかからず長崎へ着いて、稲佐^{いなさ}という処の木賃宿へ着いた迄は上出来でしたが、その頃の五十両というところの五
百円ぐらいには掛合いましたもので、三人とも長崎見物の途中から丸山の遊廓に引つかか
つて、チョツトのつもりがツイ長くなり、毎日毎日チャンチャンチャンと花魁船^{おいらんぶね}
を流している中^{うち}に五十両の金が、溝^{すいどう}鼠^{ねずみ}のように逃げ散らかってしもうた。仕方なし
にモトの木賃宿に帰つて来ると泣^な面に蜂^{なきつら}という文句通りに、大惣が大熱を出いて、煎餅
布団をハネ除^のけハネ除^のけ苦しがる。今で云う急性肺炎じやったろうと人は云いますが、お
医者に見せる錢^{ぜに}なぞ一文も在りませんけに、濡^ぬ手拭^{れてのこい}で冷やいてやるばかり。そのうち
に大惣がクタビレて来たらしく、氣味^{きび}の悪いくらい静かになつて来た。半分開いた眼が硝^び
子^{イドロ}のゴト光つて、頬ベタが古新聞のゴト折れ曲つて、唇^{あばら}の周圍^{ばね}が青黒う変^なつて、水を遣
つても口を塞ぎます。洗濯板のようになつた肋^{ただごと}骨^{こつくりだ}を露^{あばら}出してヒヨツクリヒヨツク
リと呼吸^{いき}をするアンバイが、どうやら尋常事^{ただごと}じやないように思われて来ました。
そのうちに夜が更けて二時か三時頃になります。背後^{うしろ}の山^{やま}手^てでお寺の鐘が、陰に籠つ
てゴオオ——ンンと来ますと、私は、もうイカンと思いました。スヤスヤ寝入つとる大惣
を揺り起いて耳に口を寄せました。

『……大惣……大惣……』

大惣が返事の代りに私の顔をジイッと見ます。

『貴様はモウ詰まらんぞ』

何度も何度も大惣が合点合点しました。涙を一パイ溜めております。

『……イロイロ……セワニ……ナツタ……』

『ウム。そげな事あドウデモよかバツテン、イッソ死ぬなら俺へ形見ば遣らんか』
大惣は寝たまま天井をジイッと見した。

『……シネバ……シネバ……何モイラン……何デモ遣ルガ……何モナイゾ……』

『ホンナ事に呉れるか』

『……ウム。オレモ……ダイ……大惣じゃ』

『よし、それなら云おう。貴様が死んだなら済まんが、貴様の生胆きもば呉れんか』
大惣が天井を見たままニンガリと物凄く笑いました。

『ウム。ヤルひやくひろ。臓腑ひやくひろデモ……きんたま。寧丸きんたまデモ……ナンデモ遣ル。シネバ……イラン』

『よしつ。貰うたぞ。今……きも。生胆の買手をば連れて来るケニ、貴様あ今にも死ぬゴトうん
うん呻唸うめきよれや』

大惣が今一度、物凄くニンガリしながら合点合点しました。私は直ぐに木賃宿を飛出しました。

その頃は長崎に、支那人の生胆いきざん買いがよく居りました。福岡アタリの火葬場にもよくウロウロしておりましたそうで……真夜中でも何でも六神丸の看板を見当てにしてタタキ起しますと、大抵手真似で話が通じましたもので、私は日本語のすこし出来る支那人チャンチャンを引っぱって木賃宿へ帰つて来ました。

その支那人は体温計ねつばかりと聴診器のみラッパを持つて来ておりました。私とツン州と二人で感心して見ております前で、約束通りにウンウン呻吟うめきよる大惣の脈を取つて、念入りに診察しますと病人の枕元で談判を初めました。

『この病人は明日の正午頃あした ひるまでしか保たん。死骸を蒲団に包んで私の家うちに担いで来なさい。高価たかく買います。私の店はこの頃開いた店じゃケニ高い。ほかの家は皆安い。死骸の片付けも皆して上げます。頭毛かみげも首の骨もチャント取つて上げます。生胆きんのほかに胃腸いぶくろにながつている小さい青い袋を附けて下されば七円五十銭。それが温ぬくい中に持つて来なされば十二円五十銭……』

支 那 坊主は掛値を云うものと思ひましたケニ、思ひ切つて大きく吹かけました。

『イカンイカン。二十五円二十五円。一文も負からん。ほかの処へ持つて行く。ほかに知つとる店がイクラでも在る』

『それなら十五円……』

『ペケペケ。絶対^{たくさん}ペケある。二十五円二十五円。アンタは帰れ。モウ話しせん』

私は支那人の足下を見てしまいました。魚市場の倅だすけに物は云わせません。支那^{チャンチ}人坊主は未練そうに立上りかけました。

『そんなら十七円五十銭……ぬくい中^{うち}……』

『ウーム……』

と私は腕を組んで考えました。ここいらが支那^{チャンチ}人の本音かなと思うておりますところへ、横から大惣が蒼白い手を伸べて私の着物の袖を引っぱりました。

『……ヤスイヤスイ……ウルナウルナ……』

『わたし。最早^{もう}帰ります。十八円……いけませんか』

『ペケ……ペケ……オレノ……キモハ……フトイゾ……ペケペケ……』

『ええ。要らん事云うな。大惣……黙つて呻^{うめ}吟きよれ』

『ウンウン。ウンウン。水ヲクレイ』

『ホラ。遣るぞ。末期の水ぞ。唐人さんドウかいな。もう死によるが。早よう話をばきめんとほかの処へ持つて行くがナ』

とうとう支那人が負けて二十円で手を打ちまして、ほかの処へ持つて行かぬように、五円の手附を置いて帰りました。

『ヤレヤレ。クタビレタ』

『ウンウン……ウンウン……スマンスマン……』

『モウ呻吟^{うめ}かんでもヨカ。御苦労御苦労。こちらの方がヨツポド済まん。ところで済まん序^{ついで}にチヨツト待つとれ。骨休めするケニ』

私はその五円札を一枚持つて飛出して、近所の酒屋から土瓶に二杯、酒をかうて、木賃宿から味噌を一皿貰うて来ました。何しろ暫く飢渴^{かわ}いておったところですから、骨休めというので、ツン公と二人で爛もせぬ酒をグブリグブリやっております、とその横で大惣がウンウン唸り出しました。又、私の袖を引きますので五月蠅^{せから}しい奴と思うて振向きますと、大惣の奴、熱で黒くなつた舌を甜^なめずりまわしております。

『……オレ……モ……一パイ……ノム……』

『途方もない事をば云うな。馬鹿……その大病で酒を飲むチウ奴があるか。即死^{しまえ}てしまう

ぞ』

大惣の落ち^{くぼ}込んだ眼の色が変りました。涙をズウウと流しながら歯^はぎしりをして半分起き上ろうとします。

『ソノ……サケハ……オレノ……キモノ……テツケジャ……。オレモ……ノム……ケンリ……ケンリガ……アル……』

私は胸が一パイになりました。

『アハハハハ。これは謝罪^{あやま}った。俺が悪かった悪かった。よしよし。わかったわかった。寝とれ寝とれ。サア飲め。ウント飲め。末期の水の代りに腹一パイ飲め……』

そんな状態^{わけ}で、病人と介抱人が日本一の神様みたようになってグーグー眠ってしまいました。したが、その中に大惣の声で……、

『オイオイ。湊屋。起きんか。モウ正午^{ひる}過ぎぞ』

と云うて私を揺り起しますので、ビックリして跳ね起きますと……ナント……大惣が起きて、私どもの枕元に座っております。神霊^{ごしん}の上がつたようなポカンとした顔^{つら}をしております。

『ウワア。貴様……起きとるとや』

『ウン。氣持きしよくのええけに起きてみた』

『何や。……全快なおったとや』

『ウン。今、小便に行いて来たが、ちいっとばつかしフラフラするダケじや。全快ようなったらしい』

『ウワア……それは大變事おおごとの出来とる。いま全快ようなっちゃイカン』

『イカンち云うたてチャ俺が困る』

『コツチも困るじやないか。貴様の生胆きもの手附の金をばモウ崩くずいてしもうとる』

『何でもええ。貴様に任せる。生胆きもの要るなら遣る』

『馬鹿……今、貴様の生胆きもを取れあ、俺が懲役けいやくに行くだけじやないか……おいツン州……大變事おおごとの出来たぞ』

『……芽出度めでたい……』

『殴くちわせるぞ畜生。芽出度過あやぎて運の尽きとるじやないか』

『ドウすれあ良ええかいな』

『仕様はない。逃げよう。支那人チヤンチヤンが来て五円戻せチュータてちや、あの五円札は酒屋から取戻されん。そんならちいうて大惣ひじょうの病氣をば今一度、非道ひじょうなす訳には尚更行かん……』

よしよし……俺が一つ談判して来てやろう』

それから木賃宿のオヤジに談判しますと、宿賃は要らん。大病人に死なれちゃタマラン。早よう出てくれいと云います。

コツチは得たり賢しです。直ぐにヒヨロヒヨロの大惣をツン州の背中へ帯で十文字に結び付けて、外へ出ましたが、別段、どこへ行くという当ても御座いません。その中^{うち}にフト稲佐の山奥へ、私の知っている禅宗坊主が居る事を思い出しまして、昨夜^{ゆんべ}の鐘の音は、もしやソイツの寺じゃないか知らんと気が付きました。何ともハヤ心細い、タヨリにならぬ空頼みをアテにして、足に任せて行くうちに、何しろ十二月も三十日か三十一日という押詰ま^うつての事で、ピューピュー風に吹かれた大病人上りの大惣が寒がります。哀れなお話で、今にも凍え死にそうな色になつて『寒い寒い』と云いますので、タツタ一枚着ておりました私の襦袢^{どてら}を上から引^かつ被^{かぶ}せて、紅^{あか}褌^{べこ}一貫で先に立って、霜柱だらけの山蔭をお寺の方へ行きますと、暫く行く中^{うち}に、大惣は元来の大男で、ツン州の力が足らぬと見えて、十文字に縛った帯^{ももじょう}が太股^{もも}に喰い込んで痛い^うと大惣が云い出しました。

私はトウトウ腹が立ってしまいました。裸^{はだか}体のままガタガタ震えながら大惣を呶^が鳴^み付けました。

『太平樂吐こくな。ええ。このケダモノが……何かあ。貴様が死しきえすれあ二十円取れる。市役所へ五十錢附けて届けられあ葬式は片付く。アトは丸山に行いて貴様の狂除なじみをば喜ばしうと思とう居とる処とに、要らん事に全快ようなつたりして俺達をば非道ひどい眼に合わせる。捕らぬ狸の皮算用。夜中三天のコツケコーコーたあ貴様ぬしが事タイ。それでも友達甲斐に連れて来てやれあ、ヤレ寒いとか、太股ももどうの痛いとか、太平樂ばっかり祈り上げ奉る。この石垣の下に捨てて行くぞ……エエこの胆泥棒きもぬす……』

『ウ——ム。棄てるなら……助けると思おもうて……酒屋の前へ棄ててくれい。昨夜ゆうべの釣銭つるをば四円二十錢置いて行いてくれい』

『ウハッ……知つとつたか。外道げどうサレ』

そんな事で向うの禅宗寺へ逃込みますと、有難いことにその和尚という奴が、博多の聖し福寺ようふくじから出た奴で、私たちの友達ですケニなかなか人物が出来でております。

『ワハハハ。それは芽出度めでたい。人間そこまで行いてみん事には、世の中はわからん。よろしい引受けた。その支那人なら私も知つてゐる。ウチの寺へ石塔を建てて、その細工賃を一年ばかり石屋へ引つかけて、拙僧わしに迷惑をかけとる奴じゃ。ええ気味きびじゃええ気味じゃ。文句附けに來たら私が出てネジで上げる。心配せずに一杯飲みな。オイ。了了了了。昨夜ゆうべ

の般若湯はんにゃとうの残りがあろう。ソレソレ。それとあのギスヶ煮にぼし（博多名産、小魚の煮干）の罐を、ここへ持つて来なさい』

というたような事でホツと一息しました。その寺で大惣に養生をさせまして、それから三人で平戸の塩鯨の取引を初めましたのが運の開け初めで、長崎を根拠ねじろにして博多や下関へドンドン荷を廻わすようになりましたが、その資本もとてというたなら、大惣の生胆いきぎも一つで御座いました。人間、酒と女さえ止めれば、誰でも成功するものと見えますナア。ハハハハ……」

湊屋仁三郎の逸話は、この程度のものならまだまだ無限に在る。仁三郎の一生涯を通ずる日常茶飯が皆、是々こゝこゝ的で、一言一行、一挙手一投足ことごと、悉く人間味に徹底し、世間味を突抜けている。哲学に迷い、イデオロギイに中毒して、神経衰弱を生命いのちの綱にしている現代の青年が、百年考えても実践出来ない人生の千山万岳をサツサと踏破り、飄々ひょうひょう乎として徹底して行くのだから手が附けられない。もしそれ百尺竿頭かんとう、百歩を進めた超凡越聖ぜつがくむそう、絶学無造作ぜつがくむそう裡に、上は神仏かみの頤あごを蹴放けはなし、下は聖賢の鼻毛を数えるに到つては天魔はだし、鬼神も跣足で逃げ出し、軒の鬼瓦も腹を抱えて転がり落ちるであらう。……こうした

湊屋仁三郎一流の痛快な消息のドン底を把握し、神経衰弱の無限の乱麻を一刀両断しようと思うならば請う、刮^{かつ}目^{もく}して次回を読め！

(中)

諸君は博多二輪^{にわか}加の名を御存じであろう。御覧にならない方々のためにチョツと知ったか振りを御披露申上げておくが、博多二輪加の本領というものは、東京の茶番狂言や、大阪二輪加なぞと根本的に仕組みの違つたもので、一切の舞台装置や、台本なぞいう面倒なものの御厄介にならない。普通在来の着のみ着のままに、半^{めかつら}面をかけて舞台に上るなり、行きなり放題の出会い頭にアツと云わせたり、ドツと笑わせたりするのがこのニワカ芸術の本来の面目である（註曰——現在では台本や装置、扮装に凝^こって、単に普通の喜劇を、博多言葉に演ずる程度にまで墮落してしまっている）。だから本来の博多仁輪加では、その出演者同志がお互いに、人生、人情、世態に通曉徹底していなければいけない。お互いに舞台上の演出効果——蔭の花を持たせ合つて、透^すかさず舞台気分を高潮させ合い、共同一致のファインプレイを演出し合うだけの虚心坦懷さがなければ仁輪加の花は咲かない。

この生活苦と、仁義、公儀の八釜やかましい憂世うきよを三分五厘に洒落しやれ飛ばし、上かみは国政の不満から、下しもは閨中けいちゆうの悶々事もんもんじに到るまで、他愛もなく笑い散らして死中に活あり、活中死あり、枯木に花を咲かせ、死馬に放屁ていせしむる底ていの活策略の縦横無礙むげなものがなくては、博多仁輪加の軽妙さが生きて来ないのである。

湊屋の大將こと、篠崎仁三郎は、その日常の生活ことごとが悉くノベツ幕まくなしの二輪加の連鎖であつた。浮世三分五厘、本来無一物の洒々しやしやらくらく落々らくらくを到る処に脱胎だつたい、現前しつつ、文字通りに行きなりバツタリの一生を終つた絶学、無方の快道人であつた。古今東西の如何なる聖賢、英傑いえどと雖も、一個のミナト屋のオヤジに出会つたら最後、鼻毛を読まれるか、顎骨あごぼねを蹴放けはなされるかしない者は居ないであろう。試みに挙こす。看よ。

前回の通り、親友の生胆いきぎもを資本もとしてにして、長崎の鯨取引に成功した湊屋仁三郎は、生れ故郷の博多に錦を？ 飾り、漁類問屋をやつてゐる中うちに、日露戦争にぶつつかり、奇貨おくべしというので大倉喜八郎の牛缶ならに倣ならつて、軍需品としての魚の缶詰製造を思い立つたが、慣れない商売の悲しさ、缶の製造業者に資本を喰くわれて、忽ち大失敗の大失脚。スツテンテンの無一物となつた三十八年の十一月の末、裾縫すそぬいの切れた浴衣一枚で朝鮮に逃げ渡り釜山漁業組合本部に親友林駒生氏こまおを訪れた。林駒生氏は本伝第二回に紹介した杉山茂

丸氏の末弟で、令兄とは雲泥、霄壤しょうじょうも啻ただならざる正直一本槍の愚直漢として、歴代総督のお気に入り、御引立を蒙つていた統監府の前技師であつた。左さはその直話である。

「ヨオ。仁三郎か。よく来た……と云いたいが何というザマだ。この寒いのに浴衣一枚とは……」

「ウム。俺おらあ途方もない幽霊に附纏われた御蔭で、この通りスツテンテンに落ぶれて来た。何とかしてくれい」

「フウン。幽霊……貴様の事ならイズレ女の幽霊か、金かねの幽霊じゃろ」

「違う。金や女の幽霊なら、お茶の子サイサイ狃なれ切つとるが、今度の奴は特別あつら誂えの日本さすの水雷艇みたような奴じゃ。流石さすがのバルチック艦隊も振放しかねて浦塩うらじおのドックに這入り損しつこのうとる。その執拗しつこい事というものは……」

「フウン。そんなに執拗い幽霊か」

「執拗いにも何も話にならん。トテモ安閑として内地には居おられん」

「一体何の幽霊かいね」

「缶詰の幽霊たい。ほかの幽霊と違ちがうて缶詰の幽霊じゃけに、いつまでも腐らん。その執拗い事というものは……呆ばかれた……」

愚直な林氏は茲（ここ）に於て怫然（ふっぜん）色を作した。

「一体貴様は俺をヒヤカシに來たのか。それとも助けてもらいに來たのか」

「正真正銘、真劍に助けてもらいに來たのじゃないか。これ見い。この寒空に浴衣のお尻がバルチック艦隊……辜丸のロゼスト・ウイスキー閣下が、白旗の蔭で一縮みになつとる。どうかして浦塩（うらじおさ）更紗（さら）のドックに入れてもらおうと思うて……」

「馬鹿……大概にしろ。この忙しい事務所に來て、仁輪加を初める奴があるか……」

しかし篠崎仁三郎はどこへ行つてもこの調子であつた。魚市場の若い連中が何かの原因でストライキを起して、幹部連中が持てあましている場面でも湊屋仁三郎が出て行くと一ペんに大笑いになつて片付いた。

「貴様は○○のような奴じや。撫でれば撫でる程、イキリ立つて來る。見つともない」

結局、彼にとっては人間万事が仁輪加の材料でしかなかった。事窮すれば窮するほど上等の仁輪加が出来るだけの事であつた。彼は洒々落々の博多（はかた）児の生（き）粹（すい）、仁輪加精神の権化であつた。

太閤様を笑わせ、千利休を泣かせるのは曾呂利新左衛門（そろり）に任す。白刃上（こま）に独樂を舞わせ、

扇かなめの要に噴水を立てるのは天てん一いち天勝てんかつに委す。木仏、金仏を抱腹させ、石地藏を絶倒させるに到つては正に湊屋仁三郎の日常茶飯事おてのものであつた。更に拳こす。看よ。

やはり湊屋仁三郎が一文無し時代の事。連日の時化しけで商売は出来ず、仕様ことなしに、いつも仲好しの相棒と二人で、博多大浜の居酒屋へ飛込んだ。無けなしの銭ぜにをハタキ集めてやつと五合枰ます一パイの酒を引いたが、サテ、酒肴さかなを買う銭が無い。向うの暗い棚の上に、章魚たこの丸煮や、蒲鉾の皿が行列している。鼻の先の天井裏からは荒縄で縛つた生鰯ぶりの半身かたみが、森閑とブラ下っているが、無い袖は振られぬ理窟で、五合枰の中に置いて涙ぐましく顔を見交しているところへ天なる哉、小雨の降る居酒屋の表口に合羽包かつばみの荷を卸おろした一人の棕枰しゅろぼう筭うきうり売が在る。

元来この棕枰筭売という人種は、日本中、どこへ行つても他国たぐひの者が多い。従つてどことなく言葉癖が違っている上に、根性のヒネクレた人間が珍らしくない。仁輪加なんか無論わかりそうにないノツソリした奴が多いのであるが、その中でも代表的と見える色の黒い、逞ましそうな奴が、骰子さいの目に切つた生鰯ぶりの脂あぶら肉にくの生姜しょう醬油に漬けた奴を、山盛にした小井を大切そうに片手に持つて、

「ええ。御免なはれ」

と這入つて来た。嘩然として見惚れている仁三郎とその相棒を尻目（くだん）にかけ、件の小井を仁三郎の背後のバンコに置き、颯爽（さつそう）として奥へ這入り、店の親爺（おやじ）を捉まえて商売物の棕櫚（せき）で棕櫚ハタキを押付けて酒代にすべく談判を始めた。ところがその居酒屋の親爺なる人物が又、人氣の荒い大浜界限でも名打ての因業（いんごう）おやじでナカナカそんな甘手（あまて）の元手喰（さやく）式慣用手段（いんちき）に乗るおやじでない。ヤツサ、モツサと話が片付（うち）かぬ中に二人は、代る代る手を出して背後（うしろ）の小井の中味（つま）を抓んだ。

「ハハン。この家のおっさんのガツチリして御座るのには呆れた。両方儲かる話が、わからんチウタラ打出の小槌（づち）でたたいても銭（ぜ）の出んアタマや……ハハン。買うて下はらぬ位なら他の店へ行くわい」

とか何とか棄科白（すてぜりふ）で、大手を振つて棕櫚箒（せき）売が引返して来た時には、小井の中にはモウ濁った醤油と、生姜の粉が、底の方に淀んでいるだけであつた。

箒（せき）売は土間の真中に突立つたまま嘩然となつて、上機嫌の二人を眺めておつた……が、やがてガラリと血相を変えようと、知らん顔をして指を舐（な）めてゐる仁三郎に喰（か）つて蒐（か）つた。

「……アンタ等は……ダ……誰に断つて、この肴（さかな）をば、抓（つま）みなさつたカイナ」

湊屋がゲラゲラ笑い出した。

「アハハ、途方もない美味^{うま}か鯰^{なまこ}じやったなあ。ホーキに御馳走^{ごちそう}様^{さま}じやった。まず一杯差そうと云いたいところじゃが、赤^{あか}柿^{かき}の中はこの通り、逆^{さかさま}様にしても一しずくも落ちて来んスツカラカン……アハハハハ。スマンスマン……」

真青になつて腕を捲^くくつた箸^{しほ}売^うが、怒髪^{どふ}天^{てん}を衝^ついた。

「済^すまんて済^すむか。切肉^{きりみ}を戻^もせッ」

仁三郎は柔道の免許取りであつただけにチツトも驚^{おどろ}かなかつた。

「イヤ、悪^{わる}かつた。猫^{ねこ}に干鰯^{ほしか}でツイ卑^ひしい根性^{こんせい}出^でいたのが悪^{わる}かつた」

「この外道^{ぐわいどう}等……訳^{わけ}のわからん文句^{ぶんく}を云^いうな。ヌスツト……」

「イヤ。悪^{わる}かつた悪^{わる}かつた。冗談^{じょうだん}云^いうて悪^{わる}かつた。博多^{はくた}の人間^{にんげん}なら仁輪^{にんりん}加^かで笑^{わら}うて片付^{ぺい}くが、他^た国^{こく}の人^{ひと}なら腹^{はら}の立つのも無理^{むり}はない。悪^{わる}かつた悪^{わる}かつた。ウチまで来^きなさい。返^ま済^{じよう}てやるけに。ナア。この通り謝罪^{ことわり}云^いうけに……」

元来^{もとより}が温厚^{おんこう}な仁三郎は、見^みず知^しらずの箸^{しほ}売^うの前に鉢巻^{はちまき}を取^とつて平^{へい}あやまりに謝罪^{あやま}つた。
「貴^{あなた}様の家^{うち}まで行^いく用^{もち}はない。金^{かね}が欲^ほしさに云^いいよるのじやないぞ。今^{いま}喰^くうた切肉^{きりみ}を元^{もと}の通^とりにして返^{かえ}せて云^いいよるとぞ」

押が強く執念深いのが簀売の特色である。その中でも特別詵えあつらの奴と見えて、相手は二人と見ても怯ひるまなかった。因縁を附けてイタブリにかかる気配であった。

「他国たぐいの人間と思つて軽蔑するか。一人と思つて侮るか。サア鰯をば返せ。返されんち云うなら二人とも警察まで来い。サア来い」

「まあ待ちなさい。チャンと話は附ける。ブリな事をば云いなさんな」

「又仁輪加を云う。何がブリかい。その仁輪加を警察へ来て云うて見い。サア来い」
湊屋の相棒は市場名物の短気者であつた。

「ええ。面倒な。鰯さえ返せば文句はないか」

と云ううちに、店の天井からブラ下つていた鰯かたみの半身を引卸して、片手ナグりに簀売を土間へタタキ倒した。

「持つて失せうれ外道サレエ。市場おおはまの人間を見損のうたか」

簀屋は剣幕に吞まれたらしい。鰯かたみの半身も、持つて来た井もそのままに起たちあが上つて、棕櫚しんろの荷を担いで逃げて行く奴を、追い縋つた相棒が引ずり倒してポカポカと殴り付けた。商売物の簀が泥だらけになつてしまった。

その間に湊屋は黙つて鰯かたみの半身を拾つてモトの天井の釘へブラ下げるのを、居酒屋の因

業おやじが奥から見ていたらしい。イキナリ飛出して来て仁三郎の前に立ちはだかった。

「その鰯は商あきない売物ばい。黙つて手をかけたからには、そのままには受取れん」

仁三郎は返事をしないままその鰯の半身かたみをクフンクフンと嗅いでみた。

「親爺とつさん、悪い事は云わん。この鰯は腐つとるばい。こげな品物もんば下げておくと、喰うたお客の頭の毛が抜けるばい」

「要らん世話たい。腐つておろうがおるまいがこつちの品物じやろうが、銭ぜにを払え銭を：

…」

「ナニ。貴様もこの鰯が喰いたいか」

歸つて来た相棒が割込んで来たのを仁三郎が慌てて押止めた。

「まあまあそう因業な事をば云いなさんな。折角の喧嘩が又ブリ返すたい」

「その禿頭はげあたまをタタキ割るぞ畜生」

「止めとけ止めとけ。タタキ割つても何にもならん。腐ったブリが忘れガタミじや詰らん」
この洒落がわかつたらしい。親爺が、眼をグルグルさしたまま黙って引込んだ。

二人は連立つて店を出た。

「ああ、久しブリで美味うまかつた」

「俺もチイツと飲み足らんと思つておつたれあ、今の喧嘩でポオツとして来た。二合分ぐらいあつたぞ、箒売のアタマが……オット今の井をば忘れて来た」

「馬鹿な。置いとけ置いとけ。シヨウガなかう」

飄逸、洒脱、纖塵^{せんじん}を止めず、風去つて山河秋色深し。更に挙^こす。看よ。

仁三郎の友人に水野某という青物問屋の主人があつた。その又二人の友人で又木某という他県人の青物仲買人があつた。その又木某は身寄タヨリのない全くの独身^{ひとりもの}者で、兼てから湊屋仁三郎と水野某を保証人として何千円かの生命保険に加入していた。又木曰^{いわ}く、「俺は篠崎にも水野にも一^{ひと}方^{かた}ならぬ世話になつた。俺の家は代々胃癌で死ぬけに、俺も死ぬかも知れぬ。それで万一俺が死んだなら一つ頼むけに俺の葬式をしてくれい。ナア」涙もろい二人は喜んで証書に印判を捺^おしたものであつた。もとより無学文盲の二人の事とて、法律の事なんか全く知らず、盲判^{めくらばん}も同然で金額なども全然忘れたまま仲よく交際していた。

ところがどうした天道様の配り合わせか、間もなくその又木が四十五歳を一期として胃癌で死んだ。お蔭で思いがけない巨額の金が、二人の懐^{ふところ}に転がり込んだので二人は少な

らず面喰つた。

「何でも構わぬ。約束は約束じゃ。出来るだけ賑やかに葬式をしてやれ」

というので立派な石塔を建てた上に永代回向料まで納めてしまったが、それでも余つた相当の金額を持つてソナところは無暗に義理固い篠崎、水野の両保証人が、又木の本籍地へ乗込んだ。色々身よりを探しまわつて又木の後を立てるべく苦心したが、その又木のアトがどうしてもわからない。そこで……これでは詰まらん博多へ帰ろう。又木の菩提追福のためにこの金を潔く女共へ呉れてしまおう……というので仕事の休み序に柳町に押上り、あらん限りの太平楽を並べて瞬く間に残金を成仏させて歸つた。そうして歸ると直ぐに二人で一パイ飲んだ。

「ああ清々した。しかし水野、保険というものはええものじゃねえ」

「ウン。こげな有難い物たあ知らんじやつた。感心した。又誰か保険に加入らんかな」

「おお。そういえばあの角屋の青柳喜平はまあだ三十四五にしかならんのに豚の様ブクブク肥えとる。百四五十斤位あるけに息が苦しいとこの間自分で云いよつた。あの男なら四十位になると中風でコロツと死ぬかも知れんぜ」

「うむ。アイツの親爺も中気で死んだ。彼奴は保険向きに生れとる事をば、自分でも知

らずにいるに違いない」

「貴様は何でも勧め上手じゃケニ一つ行て教えて来やい」

「ウン。よかろう。行て来う。今から行て来う。善は急げ……」

「今度は又木の三倍ぐらい掛けて来やい」

「ウン。飲みながら待つとれ。歸りに今少と、肴は提げて来るけに……」

青柳喜平というのは当時から福岡の青物問屋でも一番の老舗で、双水執流という昔風

の柔道の家元で、武徳会の範士という、仁三郎には不似合いな八釜しい肩書附の親友であ

った。現、角屋の三右衛門氏の養父、現画伯、青柳喜兵衛氏の実父。若くして禅学に達

し、聖福寺の東瀛禪師、建仁寺の默雷和尚に参し、お土産に宝満山の石羅漢の包

みを提げて行つて京都の俣屋と、建仁寺内を驚かした。日露戦争の時の如き、福岡聯隊

の依頼に应じて、露西亞の俘虜の中でも一番強力な暴れ者を猫の前の鼠の如くならしめた

という怪力、怪術無双の変り者で、筆者ともかなり心安かったので自然この話を同氏の直

話として洩れ聞いた訳である。

喜平氏は親友湊屋仁三郎の使者として同業の水野が、白足袋などを穿いて改まって来た

ので、何事か知らんと思つて座敷に上げた。ちょうど時分がよかったので午餐まで出して

一本爛けた。

水野は遠慮なく厄介になりながら熱心に説去り説来^{とききた}ったが、聞き終った青柳喜平氏はこめつき^{こめつき}ね米搗杵^{こめつきね}みたいな巨大な腕を胸の上に組んだ。

「ウムウム。成る程成る程。よう解かった。如何にも貴様の云う通り人間は老少^{ふじよう}不定。いつ死ぬるかわからん。俺の親父^{おやじ}も中気で死んだる故^{けに}、血統^{すじ}を引いた俺も中気でポツクリ死なんとに限らん。実はこの頃、肥り過ぎて子供相手に柔術^{やわら}が取れんで困つとる。技術^{わざ}に乗ってやれんでのう」

「ウン。それじゃけに今の中に保険^{うち}に入れと……」

「まあ待て待て。それは良う解かつとる。這入^こらんとは云わん」

「有難い。流石^{さすが}は青柳……」

「チヨチヨチヨツと待て……周章^{うろたえ}るな。そこでタツタ一つ解らん事がある」

「何が解らんかい。これ位わかり易い話はなからう」

「さあ。それが解からんテヤ。つまりその俺がポツクリ死んだなら、取れた保険の金は貴様達二人が貰われるように、証文をば書いておけと云いよるのじやろう」

「その通りその通り。貴様は話がようわかる」

「そんならその保険に掛ける金は、誰が掛けるとかいネエ。貴様達が掛けるか……」

「馬鹿云え。知れた事。貴様の保険じゃけに、貴様が掛けるにきまつとるじゃないか」

「……馬鹿ツ……帰れツ……」

青柳に大喝された水野は、上り口から飛降りて、下駄を提げたまま二三町無我夢中で走った。その白足袋を宙に舞わして逃げて行つた恰好が、今思い出しても可笑しいと青柳喜平氏は筆者に語った。

「怪しからん親友もあればあるものです。私が肥っているのを見て煮て喰いとなつて保険の鍋に這入れとすすめに来る奴です。彼奴等の無学文盲にも呆れました」

吉報を待つてチビリチビリやつていた仁三郎は、門口から悄然と何か提げて這入つて来た水野を見てビックリした。

「どうしたとや。何をば提げて来たとや」

水野は黙つて下駄を出して見せた。頭を掻きながらタメ息を吐いた。

「詰まらん。青柳は知つとる」

篠崎もソレとわかつて長大息した。

「そうか。知つとつちや詰まらん」

末後の一句、甚だ無造作。本来無一物。尻喰えけつくら観音である。こうなると人格も技養もない。日面仏。月面仏。達磨だるまさん。ちよとコチ向かしやんせである。更に挙こす。看よ。

前述の朝鮮、漁業組合長、林駒生氏は朝鮮第一の漁業通であり且、水産狂である。苟いやしくも事水産に関する話となると、身分の高下、時の古今、洋の東西を問わない。尽くタツタ一人で説明役にまわつて滔とう々数時間、乃至ないし、数十日間に亘り、絶対に他人に口を入れさせないので、歴代の統監、農林、商工の各大臣、一人として煙けむに捲かれざるなく、最少限、朝鮮沿海に関する問題については、視察に来る内地の役人を尽く馳け悩まして、一毫も容よ喙うかいの余地なからしめた。或る材木商の如きは、同氏に話込まれたために新義州の材木に手附を打ち損ね、数万円の損害を受けたという程の雄弁家である。

その林駒生氏が嘗てこれも座談の名士として聞えた長兄、杉山茂丸氏と福岡市吉塚みすみ三角ざい在、中島徳松氏の別荘に会し、久濶きゆうかつを叙じよし、夕食の膳に就いた。同席のお歴々には故八代大将、前九大教授武谷医学博士、福岡随一の無鉄砲有志、古賀壮兵衛氏、現釜山ふざん日報主筆、篠崎昇之助氏、その他、水茶屋券番みずぢやけんばんの馬賊五人組芸者として天下に勇名を轟おどろかしたお艶えん、お浜、お秋、お楽、等々その中心の正座が勿体なくも枢密院顧問、八代大

将閣下であつただけに極めて嚴肅な箸はしの上げ卸おろしで、話題は八代閣下の松葉の食料法を武谷博士、林駒生氏が固くなつて謹聴し、記者として列席していた筆者がシキリにノートを取っている……といった場面であつたように思う。

ところへ表の扉ドアがガラリと開いて、湊屋の仁三郎が這入つて来た。春雨に濡れた問屋といやば張の傘を畳んで、提げて来た中鯛を五六匹土間に投出したスタイルは、まことに板に附いたもので、浴衣の尻を七三に端折はしおつた素跣足すはだしである。親友の林駒生氏が振返つて声をかけた。

「おお。湊屋じゃないか。この寒いのに風邪を引くぞ」

湊屋は頬ほ冠おかむりを取つて手を振つた。

「イカンイカン。これは医学博士でも知らん。自動車に乗る人間には尚更わからん。日本人一流、長生きの法たい」

「今その長生き話が出るところじゃ。貴公の流儀を一つ説明してみい」

「説明もヘツタクレもあれあせん。雨の降る日に傘さいて跣足はだしで歩きまわれば、それで結構……そこで『才才寒む』とか何とか云うてこの中鯛で一杯飲んでみなさい。明日あした死んでも思い残す事はない」

「アハハハ。賛成賛成」

武谷博士が妙な顔をした。^{けだし}蓋、同博士は同大学切つての謹嚴剛直の士で、何事に限らず科学的に説明の出来ないものは一毫も相容れない性分であつたので、八代大将の松葉喰いの話で少々お冠^{かんむり}を曲げて御座るところへ、湊屋一流の無学文盲論が舞込んで来たのでまさか議論の相手にもならず、ますます御機嫌が傾いた次第であつた。しかし湊屋仁三郎は博士であろうが元帥^{げんすい}であろうが驚ろかなかつた。サツサと裏へ廻つて足を洗つて上つて来た。

「へエ。皆さん。今晚は……今台所の婆さんに洗わせよる、昨夜^{ゆんべ}まで玄海沖で泳ぎよつた魚じゃけに、洗いに作らせといた」

「ちようど今長生きの話が出るところじやつたが、ええところへ来た。貴公なんぞは長生きの大將と思うが……そんな氣持ちはせんか」

と杉山茂丸氏が水を向けた。

「ハハハ。人間はアンマリ長生きせん方が良^ええと思ひますなあ。人間一代山は見えとる。長生きしようなんて考えるだけで寿命が縮まるなあ。八代さん。美味^{うま}い酒をば飲むだけ飲むで、若い女子^{こしも}は抱くだけ抱いて、それでも生きとれあ仕様がな。又、明日^{あした}の魚は糶^せる

だけの話たい……なあ武谷先生……」

八代閣下と武谷博士がグウとも云えないまま苦々しい顔になった。社交家の杉山茂丸氏が透^すかさず話題を転じた。鍋の中でグツグツ煮えている鯨のスキ焼の一片を挟み上げて令弟、林駒生技師に提示した。

「オイ。駒生。この肉は鯨の全体でドコの肉に当るのかね」

サア事だ。林水産狂技師の得意の話題に触れたのだ。油紙に火が附いた以上の雄弁の大光焰がどうして燃上らずにおられよう。八代大将の松葉も、湊屋仁三郎の短命術も太陽の前の星の如くに光を失わずにはおられなかった。

「そもそも鯨というものは」……というので咳^{がい}一咳。先ず明治二十年代の郡司大尉の露領沿海州荒しから始まって、肥後の五島列島から慶南、忠清、咸^{かんきよう}竟^{きやう}南北道、閔^{ツイメン}們^{キヤン}江、沿海州、樺^{からふと}太^と、千島、オホーツク海、白^{ペーリング}令^{りやう}海、アリユウシャン群島に到る暖流、寒流の温度百余個所をノート無しでスラスラと列挙し、そこに浮游する褐^{かつそう}藻^{そう}、緑^{りよくそう}藻^{そう}の分布、回游魚の習性を根拠とする鯨群の遊^{ゆうよく}弋^{よく}方向に及び、日本の新旧漁法をスカンジナビヤ半島の様式に比較し、各種の鯨の肉、骨、臓器、油の用途、価格、販路、英領加奈陀^{カナダ}との競争状態といったような各項に亘^{わたり}つて無慮、数千万語、手を挙げ眉を展^のばして熱弁す

る事、約二時間半、夕食が終つて、電燈が灯いてもまだ結論が附かない。やつと二度目のお茶が出てから、

「今の鯨の肉は、鯨の尾の附根に当る処で、肉の層がアーチ型になっている処です。鯨肉の中でも極上飛切とびきりの処で、小鳥や牛肉でも追付かない無上の珍味だったのです」

という結論が附いた。しかし残念な事にこの時には流石さすがに謹嚴剛直の国家的代表者、八代大将閣下も、武谷広博士も完全に伸びてしまっていた。勿論、二人とも最初は林技師の蘊蓄うんちくの物凄いのに仰天して膝を乗出して傾聴していたものであったが林技師大得意のスカンジナビヤ半島談あたりからポツポツ退屈し初めたらしく、二人ともアンマリ欠伸あくびを噛み殺して来たためにスツカリ涙ぐんでしまっていた。令兄の杉山茂丸氏の如きは、そのズツと以前から後悔の臍ほぞを噛んでいたらしい。警告の意味で、故意と声を立てて大きな欠伸あくびを連発していたが、それでも白浪を蹴つて進む林技師の雄弁丸が、どうしてもSOSの長短波に感じないので、とうとう精も気魄きはくも尽き果てたらしく、ゴリゴリと巨大なイビキを掻き始めた。それを笑うまいとしている芸者連が、必死にハンカチで口を押えている始末……。

しかし林技師の雄弁丸は物ともせずグングンチームを上げて行つた。俄然がぜんとして英

領加奈陀カナダの缶詰業に火が移った。続いて露領沿海のタラバ蟹に延焼し、加察加カムサツカの鮭にしん、鰯いわしと宛然さながらに燎原りやうげんの火の如く、又は蘇国ソヴェートの空軍の如く、無辺際あまかけの青空に天翔あまかける形勢を示したが、その途端、何気なく差した湊屋の盃を受けて唇に当てたのが運の尽き、一瞬うちの中に全局面を、無学文盲の親友に泄さわってしまった。

「フウム。これは感心した。日本中で鯨の事を本格に知もつとる者もんなら私一人かと思つておつたが、アンタもいくらか知つとるなあ」

「失敬な事を云うな仁三郎。林駒生はこれでも総督府の技師だ。事、水産に関する限り、知らんという事は只の一つも無いのが職分だぞ。そのために中佐相当官の待遇を……」

「ふむ。わかつたわかつた。それなら聴くがアンタは鯨の新婚旅行をば、見なさつた事があるかいな」

「ナニ。鯨の新婚旅行……」

芸妓連中げいしやが一斉に爆笑した。八代、武谷両聖人が今更のように眼をパチクリして湊屋の顔を凝視しているところへ、軒いびきを搔き止めた令兄杉山茂丸氏がムクムクと起上つて、赤い眼をコスリコスリ、

「ハハア。新婚旅行……誰が……」

と云ったので今一度、爆笑が起った。

林水産技師は慚然として投出した。

「……そんなものは……見ん……元来鯨は……」

「それ見なさい。知るまいが。イヤ。それは大椿事おおごとですばい。鯨の新婚旅行チュータラ……」

と仁三郎が間髪を容れず引取った。

「イヤ。トテモ大椿事おおごとですばい。アンタ方は知りなさるまいが、鯨はアレで魚じゃない。

獣類けだものですばい」

「ウム。それはソノ鯨は元来哺乳類……」

「まあ待ちなさい。それじゃけに鯨は人間と同じこと、三々九度でも新婚旅行でも何でもする。私や大事な研究と思うだけに、実地じつちについて見物して来た。しかも生命いのちがけで……」

「アラ。まあ。アンタ見て来なさったと……」

「お前たちに見せてやりたかったなあ。その仲の良え事えというものは……お前たちは人間に生れながら新婚旅行なんてした事あ在るめえ」

「アラ。済まんなあ。新婚旅行なら毎晩の事じゃが」

「アハハ。措きなはれ。阿呆らしい」

「阿呆らしいどころじゃない。権兵衛が種蒔きなら俺でも踊るが、鯨のタネ蒔きバツカリは真似が出来ん。これも学問研究の一つと思つて、生命がけで傍へ寄つて見たが、その情愛の深いことというもんなア……あの通りのノツペラボーの姿しとるばつてん、その色気のある事チュタラなあ。ちよつとこげな風に（以下仁三郎 懐手をして鯨の身振り）」

「アハハハ……」「イヒヒヒ」

「オイ仁三郎……大概にせんかコラ……」

「海の上じやけに構わん。牡も牝も涎を流いて……」

「アラッ。まあ。鯨が涎をば流すかいな……」

「流すにも何にもハンボン・エックスちうて鬱紺色のネバネバした涎をば多量に流す」

「……まあ。イヤラシイ。呆れた」

「ハンボン・エックス……ハハア。リウマチの薬と違いますか」

と武谷博士が大真面目で質問した。

「違います……そのハンボン・エックスの嗅い事というたなら鼻毛が立枯れる位で、それを工合良うビール瓶に詰めて、長崎の仏蘭西人に売りますと、一本一万円ぐらいに売れま

すなあ。つまり世界第一等の色気の深い香水の材料になります訳で、今の林君の話のスカン何とかチュウ処の鯨よりも日本の鯨の新婚旅行の涎の方が何層倍、濃厚いそうで……」

「オイオイ仁三郎……ヨタもいい加減にしろ」

林技師がタマリかねて口を出した。

「ヨタでも座頭唄でもない。仏蘭西の香水は世界一じやろうが」

「……そ……それはそうだが……」

「それ見なさい。それは秘密に鯨の涎をば使いよるげに世界一たい。自分の知らん事あ、何でも嘘言ソラゴトと思いなさんな」

「……フーム。何だか怪しいな」

「怪しいにも何も、私は、そのヨダレが欲しさに生命いのちがけでモートル船に乗って随ついて行きましたさが、その中うちに又、世界中で私一人しか知らん奇妙な魚類さかなをば見付けました」

「フーン。そんな魚が居おるかな」

「居るか居らんか、私も呆れました。鯨の新婚旅行に跟つ随いて行く馬鹿者が私一人じゃないのです。ちようど大きな鯨さめのような恰好で、鯨の若夫婦のアトになりサキになり、どうしても離れません。鯨の二匹が、私の船を恐れて水に潜くぐつても、その青白い鯨の姿を目当て

に行けば金輪際、見のがしません」

「ウーム。妙な奴が居るものだな」

「アトから古い漁師に聞いてみましたら、それは珍らしいものを見なされた。それはやっぱり鯨の仲間で、鯨の新婚旅行には附き物のマクラ魚うおチウ奴さかなで……」

「馬鹿。モウ止めろ。何を云い出すやら……」

「イイエ。決して嘘は云いまっせん。生命いのちがけで見えて来たのですから。これからがモノスゴイので……私はそのマクラ魚を見た時に感心しました。流石さすがに鯨はケダモノだけあつて何でも人間と同じこと……と思つて、なおも一心になつて跟ついて行くうちに夜になると鯨の新夫婦が浪なみの上で寝ます。青海原の星天井で山のような浪また浪の中ですけに宜ようがすなあ……四海浪しかいなみ、静かにてエー……という歌はこの事ばいと思ひましたなあ。しかし何をいうにもあの通りのノツペラボー同志ですけに浪の上では、思う通りに夫婦の語らいが出来でまっせん。そこで最初さいぜんから尾ついて来たマクラ魚が、直ぐに氣を利かいて枕になつてやる……」

「アハハハハ。馬鹿馬鹿しい」

「アハアハアハアハ。ああ苦しい。モウその話やめてエッ」

「イヤ。笑いごとじゃありません。鮫という魚は俗に鮫肌と申しまして、鱗が^{うろこ}ずらんに出来ておりますけに、海の上の枕としては誠にお^{あつち}詭え向きです。しかし何をいうにも何^{ひろ}十尋という巨大な奴が、四方行止まりのない荒浪^{あらうみ}の上で、アタリ憚らずに夫婦の語らいをするのですから、そこいら中は危なくて近寄れません。大抵の蒸気船や水雷艇ぐらいは跳ね散らかされてしまう。岸近くであつたら大海嘯^{おおつなみ}が起ります。その恐ろしさというものは、まったくの生命^{いのち}がけで、月明りをタヨりに、神^{かみ} 仏^{ほとけ}の御名^{おんな}を唱えながら見ておりましたが……」

「……ああ……ああ……もうソノ話やめて……あたしや……あたしや死ぬるツ……」

「それから夫婦とも波の上で長うなつて夜を明かしますと又、勇ましく潮を吹いて、鰯^{いわし}の群^おを逐^おいかけ逐^おいかけサムカツタの方へ旅立つて行きます」

「サムカツタじゃない。カムサツカだろう」

「あつ。そうそう。何でも寒い処^{ところ}と思いました。ヒヨツトすると鯨の若夫婦が云うたのかも知れませんか。ネエちよいと……昨夜^{ゆんべ}はカムサツカねえ……とか何とか……」

「馬鹿にするな」

「そこで感心するのは今のマクラ魚です。若夫婦の新婚の夜が明けますとコイツが忽ち大

活躍を始めますので、若夫婦の身のまわりにザラザラした身体からだをコスリ付けて、スツカリ大掃除をしながら、アトから跟ついて行きます、つまるところこのマクラ魚という奴は鯨の新婚旅行が専門に生れ付いた魚で、枕になつてやつたり後あとの掃除をしてやつたりしながら、カムサツカでもベンガラ海でもアネサン島の涯はてまでも、トコ厭いとやせぬという……新婚旅行のお供がシンカラ好きな魚らしいですなあ」

爆笑。又爆笑。狂笑。又死笑。皆、頭を抱え、畳の上を這いまわつて笑い転げた。流石さすがの謹厳な八代大将も総義齒いればをハメ直しハメ直し鼻汁はなと涙を拭い敢えず、苦り切つてシキリに汗を拭いていた武谷博士も、とうとう落城してニヤリとしたのが運の尽き。しまいにはアンマリ笑い過ぎて眼鏡の玉の片方をなくする始末。その中うちにタツタ一人林技師が如何にも不満そうにグビリグビリと手酌でやっているのを見た人の悪い令兄が、

「オイ。駒生。何とか註釈を入れんか」

と嘲弄したが、林技師が額の生なま汗あせを拭いて坐り直した。

「ハイ。註釈の限りではありません」

と云つたので満座又絶倒……。

(下)

かくして篠崎仁三郎の名は、次第次第に博多ツ子の代表として、花川戸の助六や、一心太助の江戸ツ子に於けるソレよりも遥かにユーモラスな、禅味、俳味を帯びた意味で高まって行つた。

どんな紛争事件でも仁三郎が呼ばれて行くと間違ひなく大笑いに終らせる。しかも女出入り。金銭出入り。縄張りの顔立てなぞに到るまで、決して相手を高飛車にキメ附けるような俠客式の肌合いを見せない。そうかといって下手に出て御機嫌を取ったり、ヨタを飛ばして煙に巻いたりするような小細工もしない。いつもザツクバランの対等の資格で割り込んで行つて、睨み合い同志の情をつくさせ、義をつくさせて、相互の氣分にユトリを作らせ、お互い同志が自分の馬鹿にウスウス氣付いたところを見計らつてワツと笑わせて、万事OKの博多二輪加にして行く手腕に至つては、制電の機、無縫の術、トテモ人間業とは思えなかつた。通夜の晩などに湊屋が来ると、棺の中の仏様までも腹を抱えるという位で、博多魚市場の押しも押されもせぬ大親分として、使つても使つても使い切れぬ金^{かね}が、二三万も溜まつていようかという身分になつた。そうして篠崎仁三郎の一生はイトも朗ら

かに笑い送られて行つたのであつた。

しかも天の配剤というものは誠に、どこまで行き届くものかわからないようである。その篠崎仁三郎の一生が、あまりにも朗らかであり過ぎたために、その五十幾歳を一期として死んで行く間際に當つて一抹の哀愁の場面が点綴てんてつされることになつたのはコトワリセメて是非もない次第であつた。

しかもその悲哀たるや尋常一様の悲哀でなかつた。笑うには笑われず、泣くにはアマリに非凡過ぎる……といったような、実に篠崎仁三郎一流のユーモラスな最期を遂げたのであつた。それは地上、如何なる凡人、又は非凡人の最期にも類例のない……同時に如何なる喜悲劇、諷刺劇の脚本の中にも発見出来ない、セキスピアもバナードショオも背後に撞ぶき着うちやく、倒退うしろたい三千里せしむるに足る底ていの痛快無比の喜悲劇の場面を、生地きじで行つた珍最期であつた。

…註曰…篠崎仁三郎氏の晩年には、他人ばかりの寄合世帯で一家を作つていたために、色々と複雑な事情が身边にまつわり附いていたが、ここにはそのような事情の一切を省略し、それ等の中心問題となつていた事実のみを記載するつもりである…。

篠崎仁三郎氏が五十四の年の春であつたか……腎臓病に罹^かつて動きが取れなくなつた。そこで自然商売の方も店員任せにして自宅で床に就いていたが、平常^{へいぜい}でさえ肥つていたのに、素晴らしく腫れ上つてまるで、洪水^{おおみず}で流れて来たみたような色と形になつてしまつた。瞼^{まぶた}なんか腫れ塞がつてしまつて、どこに眼があるのかわからない位で、そのままグングン重態に陥つて行つた。

枕頭に集まる者は湊屋の生前の親友であつた魚市場と青物市場の連中ばかりで、一人残らず無学文盲の親方^{おやぶん}連中であつたが、それでも真情だけは並外れている博多ツ子の生^{きつす}粋^いが顔を揃えていた。最早湯も水も咽喉^{のど}に通らなくなつて、この塩梅^{あんばい}ではアト十日と持つまい……という医師の宣告を聞くと、一同の代表みたような親友中の親友、青柳喜平氏が二十四貫^{かん}の巨軀を押し出し、篠崎仁三郎氏の耳に口を附けた。

「……オイ仁三郎……貴様はホンナ事に女房と思う女も、吾^わが後嗣と思う子供も無いとや……」

篠崎仁三郎は生前、妻子の事なんか一度も口にした事がなかつた。しかし長崎に居た頃一人の情婦みたような女があつてソレに女の児を一人生ませているという噂を、皆、聞いていたので、それを慥^{たし}かめるために青柳喜平氏がこう聞いたのであつた。

湊屋仁三郎は仰臥したまま黙つてうなずいた。やっと眼をすこしばかり開いて、布団の裾すその方の筆筒たんすの上の小筆筒を腫れぼったい指で指すので、その中を探してみると手紙がパイ詰まっている。それが皆、長崎から来た女文字の手紙ばかりで、金釘流の年増らしいのは母親の筆跡であろう。若い女学生らしいペン字は娘の文章らしかった。焼野やけのの雉子夜きぎすの鶴……為替の受取なぞがチラチラ混っている。そこで一同の中から二人の代表が選まれて、その手紙の主を長崎へ迎いに行く事になった。

その手紙の主は仁三郎が長崎に居る時分に關係していた浮気稼業の女であつたが、なかなか手堅い女で、仁三郎と別れた後のちに、天主教の信仰に熱中し、仕送つて来た金かねで一人の娘を女学校に通わせて卒業させていたものであつた。

湊屋仁三郎の余命がモウ幾いくばく何もない。だからタツタ一人の血のキレとして残っている娘にアトを継がせたいために迎えに来たと二人の代表が説明すると、彼女は娘と手を執り合つて泣き出したので、二人の代表が覚悟の前ながら相当貰い泣きさせられた。しかしここに困ることには天主教の教理として、母親と父親が神様の御前で正式の結婚式を挙げていない限り、娘と親子の名乗りをさせる訳に行かない事になっている。しかもそのような事態ではトテモ結婚式を挙げる訳に行くまいが……耶蘇教やその荳かる荳かや道どう心しんみたような事に

なりはしないか、という母親の懸念であつたが、そこは大掴みな豪傑代表が二人も揃つていたので、大請合いに請合つて、首尾よく母子二人を連れて博多に戻つて来た。直ぐに福岡市大名町に在る赤煉瓦の天主教会へ代表二人で乗込んでこの今様荻萱道心問題を解消さすべく談判を試みる事になつたが、そこへ出て来た宣教師のジョリーさんという仏蘭西人^{フランス}が、日本人以上に日本語がよくわかる上に、日本人以上に^{すい}粋を利かせる人だったので助かつた代表二人の喜びと安心は非常なものがあつたという。

その時の談判の結果、いよいよ結婚式の当日になると、湊屋の病床を中心にして上座に、新婦と娘、天主教会員、花輪なぞ……下座には着慣れぬ紋付袴の市場連中がメジロ押しに並んだ。が、^{さすが}流石に盛装した新婦と娘は、変り果てた夫であり父である仁三郎の姿を見てシクシクと泣いてばかりいた。

そこへ宣教師の正装をしたジョリーさんを先に立てた和洋人の黒服が四五人ばかり、銀色の十字架を胸に佩^おびてゾロゾロと乗込んで来たので、^{いずまい}居住居を崩していた羽織袴連中は、今更のように眼を聳^{そはだ}てて坐り直した。

式は型の如く運んだ。ジョリーさんが羅馬綴^{ローマ}で書いた式文みたようなものを読み上げる

時には皆起立させられたが、モウ足が痺^{しび}れて立てない者も居た。

ウワアルエールアヌオ　キヨダイガ　クワミイサアマスオ　オボスイメスイニ　イヨルイモアシタイ
「吾等　の　……兄弟が……神様の……思召に……よりまして……」

というのを、一同は英語かと思つて聞いていたという。以下引續いて儀式の模様を、済んだあとからの彼等の帰り途の批評に聞いてみる。

「耶蘇教の婚礼なんてナンチいう、フウタラ、ヌルイ（風多羅緩い？　自烈度の意）モンや」

「そうじゃない。あれあ大病人の祝言じゃけに、病氣に障^{さわ}らん様、ソロオツと遣つてくれたとたい。毛唐人なあ氣の利いとるケニ」

「一番、最初に読んだ分は何じやつたろうかいね」

「あれあ神主がいう高天^{たかま}が原たい。高天が原に神づまり在^ましますかむろぎ、かむろぎの尊^{みこと}

——オ……」

「うむ。そういうえば声が似とる。成る程わからん事をばいうと思うた」

「ところでそのあとからアイツ共が歌うた歌は何かいね。オオチニ風琴鳴らいて……」

「花嫁御のお化粧の広告じゃなかつたかねえ。雪よりも白くせよなあ……てクタビレたよ
うな歌じやつたが……」

「ウム。俺あ西洋洗濯の宣伝かと思うた」

「立てて云うけに俺あ^{おら}立つて聞きおつたら、気の遠うなつてグラグラして来た。今^ま一時間も立つとつたなら俺あ^{おら}仁三郎より先に天国へ登つとる」

「うむ。長かつたのう。あの歌をば聞きおる中^{うち}に俺あ、悲あしゆう、情のうなつた。この間死んだ嬢^{かかあ}が、真夜中になると眠つた儘^{なり}にアゲナ調子で長い長い屁をば放^{はな}きよつたが」

「死んだ嬢よりも俺あ^{おら}、あれを聴きよるうちに仁三郎がクタビレて死にあしめえかと思うてヒヤヒヤした。歌が済んでからミンナ坐つた時にやホツとした」

「あのあとの御祈祷は面白かつたね」

「ウム。面白いといえは面白い。馬鹿らしいといえは馬鹿らしい。（以下^{こわいろ}声色）ああら、

我等の兄弟よ！ 神様の思^{おぼしめし}召に依りまして、チンブンカンブン様の顎タンを結ばれま

した事は——越^{えつちゆうべこ}中禪のアテが外れた時と全く全く同じように、ありがたい、尊^もい、勿^も体^{たい}ない、嬉しい嬉しい御恵みで——ありや——す……アーメン。と来たね」

「ようよう、うまいうまい貴様、魚屋よりもキシタンの坊主になれ、どれ位人が助かるか判らん。あの異人の坊主の云う事を聞きよる内に俺あ^{おら}死にたいような氣持になつたもんじゃが、今の貴様の御祈祷を聞いたりや、スウーとしてヤタラに目^め出^で度^どうなつた。あーら

目出度^{めでた}や五十六億七千万歳。鶴亀鶴亀」

「あの黒い鬚を生^はやいた奴は日本人じやろうか」

「うん、あれがあゝの女のキリシタンの亭主らしい」

「あいつが篠崎の耳に口ば附けてあなたはこの婦人を愛しますかと云うた時には、俺は死ぬほどおかしかったぞ」

「うん。俺^{おら}もマチツトで我慢しとつた屁をば屁^へ放り出すところじやった。あん時ばかりは……」

「花嫁御も娘御も泣きござつたなあ——」

「そらあ悲しかろう。いくら連れ添うても十日と保^もたん婿どんじやけんになあ。太閤記の十段目ぐらいの話じやなか」

「仁三郎が黙つて合点合点する内に、夫婦で指^{いび}輪^{がね}ば、取り換えたが、あの時も、可笑^{おか}しかったぞ」

「うん。仁三郎の指は、平生でも大きい上に、腫れ上つとるけに指^{いび}輪^{がね}も三十五円も出いて○○の鉢巻位の奴をば作つとる。それに花嫁御の分は亦^{また}、並外れて小さいけに取り換えでもアパアパどころじやない。俺あ、それば見て考えよると可笑^{おか}しゆうて可笑^{おか}しゆうてビ

ツシヨリ汗かいた」

「誰か知らんが、その後の御詠歌のところで大きな声でアクビしたぞ」

「あれは俺たい。あの御詠歌の文句ばかりは判らんじやった。恵比須様^{えべす}が味噌^{みそ}瀧^{とし}でテンブラをば、すくうて天井へ上げようとした。死ぬる迄可愛がろうとしたバツテン^{てんぶら}天婦羅^{てんぷら}が天井へ行かんちうて逃げた……なんて聞けば聞く程馬鹿らしいけに俺がそうつとアクビしたところがそいつが寝ている篠崎に伝染^{うつ}つて、これもそうつとアクビしたけに、俺^{おら}あ良^いい事^{こと}したと思うた。病人^{さぞ}も嘸^{さぞ}アクビしたかつたろうと思うてな——」

「何時間かつたろうかい」

「俺あ時計バツカリ見よつた、二時間と五分かつたが、その最後^{しまい}の五分間の長かつた事。停車場で一時間汽車ば待つとる位長かつた」

「うん。何^{なん}にせい珍らしいものば見た」

「仁三郎も途方もない嬢^{かか}アば持ったのう」

「仁三郎はやつぱりよう考えとるバイ。達者な内にあげな嬢^{かか}アばもうて、あげな歌バツカリ毎日毎晩歌わにやならんちうたなら俺でも考える」

「第一魚市場の魚が腐る」

「アハハハツ……人間でも腐る。俺は聞きよる内に腰から下の方が在るか無いか判らんごとなつた、生命いのちにやかえられんけに引っくり返つてやろうかと何遍思ふたか知れん」

「俺は袴の下に枕を敷いとつたが、あのオチニの風琴の音をば聞きよる内に、自分の首が段々細うなつて、水飴みずあめのごとダラアと前に落ちようとするけに、元の肩の上へ引き戻し引き戻ししよつたらその中に済んだけに、思はずアーメンと云うたら、涎よだれがダラダラと袴へ落ちた、まあ大変な氣持がする」

「ああ非道ひどい目に遭うた。どこかで一杯飲み直そうじゃないや」

「ウアイー賛成！ 賛成！ 助かりや助かりや、有難や有難や、勿体なや、サンタ・マリ
ア……一丁テレスコ天上界。八百屋の人参、牛蒡ごぼうえ——」

「踊るな馬鹿！」

「アーメン、ソーメン、トコロテン。スツテンテレツク天狗てんぐの面めんか。アハハハハ。鶴亀鶴
亀」

以て当時の光景を察すべしである。

而も、こうした儀式が済んだ後牧師等が引上げると、一座が急にシーンとなつた。後には可憐な母親と娘が仁三郎の枕許に坐つてシクシクと泣くばかりになつた。

その時に湊屋仁三郎は、ホンの少しばかり腫ればつたい目を開いて、左右を見た。下座に居流れていた市場連中を見て、泣くようにシカめた顔で笑って見せた。

「何チウ妙なモンヤ」

一同が腹をかかえて笑い転げたというが、そうしたサ中にも仁三郎一流のヒョウキンな批判を忘れないところが正に古今独歩と云うべきであろう。

ところが話は、未だ済んでいない。仁三郎の珍最期はこれからである。しかも、仁三郎が完全に呼吸を引取ったアトの事で、御本尊の仁三郎のお陀仏自身にすら思い付かない：しかも仁三郎一流の専売特許式珍劇がオツ初まって、オール博多の人口に膾炙する事になったのだから痛快中の痛快事である。

その仁三郎が係^{かかり}医^いの予言の通り結婚後キツチリ十日目に死んだ。

もちろんその時には、何の変哲もなかった。一同が眼をしばたいて快人篠崎仁三郎の一代を惜しんだだけの事であつたがここに困った事には、一旦、天主教に入った以上、葬式もやはり、大名町の赤煉瓦の中で執行せなければならぬというので、市場連中は相当ウンザリさせられたものらしい。

然し仕方がない。何にしろ博多ツ子の中の博多ツ子、湊屋仁三郎の葬式じゃけに、一ツ思い切つて立派にしてやれというので、生魚、青物両市場の大問屋全部が懸命の力ちからこぶ瘤を入れた。

「相手がアーメンと思うと、いくら力瘤を入れても、入れ甲斐がないような気がして、チット力瘤を入れ過ぎたようです、とうとう大椿事おおことになりましたなあ——」
とその時の有志の一人が語った。

当日は予想以上の盛会であつた。

「仁三郎さんが、ヤソ教で葬式されさつしやるげな、天国へ行かつしやるげなけに、死んでも亦と会われんかも知れん」

というので、知るも知らぬも集つて来た結果会衆は会堂に溢れ会堂を取り囲み、往来に溢れるという素敵な人気であつた。

同時に、その時の葬式が亦、師父ジョリーさんの全幅を傾けて計画した天主教本格的盛大、長時間のものであつたらしい。但し今度は会堂の中が椅子席だったので、重立った連中は、大部分脚のシビレを助かつたというが、それでも中央の通路に突立っていた者は二

三人引くり返ったくらい盛大莊重なものがあつたという。

そのうちに正午から夕方迄かつて、やつと葬式が済んだので会衆一同は、思わずホツと溜息をした。その音が、ゴーツと堂内に溢れて、急行列車の音に似ていたというが、マサカそれ程でもなかったらう。

そこへ棺担ぎが出て来て棺桶に太い棒を通した。そのまま、市営の火葬場へ持つて行くうとすると、一番前の椅子に腰をかけていた市場の親友二三人が何事かタマリかねたらしく立ち上つて馳けよつた。

「……チヨ……一寸待ちなさい。ちよつとこげな葬式で仁三郎が成仏出来るもんじやない。ふうたらぬるい。もう辛棒が出来ん。カンニン袋の緒おが切れた。一寸貸しなさい。私達が担いでやるけに……オイみんな来い、ついでに前の花輪をば、二ツ三ツ借りて来い」

魚市場だけに乱暴者が揃つていたからたまらない。得たりや応うちという中にテンデに羽織をぬいで棺桶を担ぎ上げた。牧師連中が青い目をグリつかせている前で花輪を二ツ三ツ引つたくとその勢で群衆を押し分けて、

「ウアーイ。ワツシヨイ、ワツシヨイ」

と表の往来へ走り出した、生魚さかなを陸上あげるのと、おんなじ呼吸でどこを当てともなくエツ

サエツサと走り出したので消防組と市場の体験のある者以外は皆バタバタと落伍してアトにはイキのいいピンピンした連中ばかりが残つて了^{しま}つた。

そこで、ヤツと棺桶が立ち止つた。

「オーイ、みんな揃うたかーア」

「後^{あと}から二三人走つて来よーる」

「ああ草臥^{くたぶ}れた。恐ろしい糞^{くそ}袋^{ふくろ}の重たい仏様じゃね——。向うの酒屋で一杯やろうか」

「オツと来たり、その棺桶は門口へ降^{おろ}いとけ。上から花輪をば、のせかけとけあ、後^{おく}れた奴の目印になろう。盗む者はあるめえ」

一同はその居酒屋へなだれ込んで、テンデにコップや杓を傾けてグイグイと景氣を付けた。

「サアサアみんな手を貸せ手を貸せ。ヨーイシャンシャン、ヨーイ、シャンシャンウアーイ」

と一本入れた一同は、又もや棺桶を担ぎ上げて、人通りを押分け始めた。すると上機嫌で先棒を担いでいた湊屋の若い奴が向う鉢巻で長持唄を歌い始めた。

「アーエー女郎は博多の——え——柳町ちゃ——エエ」

「柳町へいこうえ」

「馬鹿！ 仏様担いで柳町へ行きやあ花魁おいらんの顔見ん内に懲役に行くぞ」

「ああ、そうか」

「とりあえずお寺へ行こうお寺へ行こう」

「仁三郎は何宗かい」

「仁三郎が宗旨を構うかいか」

「そんなら成丈なるたけ景氣のええお寺へ行こう」

「あッ。向うで太鼓をば敲たたきよる。あすこが良かろう」

「よし来た。行け行け。アーリヤアーリヤアーリヤ。馬じや馬じや馬じや馬じやい」

「エート。モシモシ和尚おしょうさんえ和尚さんえ。一寸すみませんがア……お葬式の色直しイ。

裏を返せばエー」

「いらん事云うな、俺が談判して来る」

博多蓮池町はすいけ○○寺の和尚さほは捌けた坊主であつたらしい。

「どうも後口あとくちが悪うて悪うてまあだムカムカします。一ツ景氣のえいところで一ツコキ

つけて、つかあさい」

という交渉を心よく引受けた。直に中僧小僧をかり集めて本堂の正面に棺を据え、香を焚いて朗かに合唱し始めた。

「我昔所造諸悪業——一切我今皆懺悔エエ——」

まだ面喰っている小僧が棒を取り上げて勢よくブツ附けた。

「グワ——アアアンン……」

一同グツタリと頭を下げた。

「あッ。あああ……これで、ようよう元手取った」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集11」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年12月3日第1刷発行

底本の親本：「近世快人伝」黒白書房

1935（昭和10）年12月20日発行

初出：「新青年」

1935（昭和10）年4月号～10月号

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2006年7月26日作成

2011年4月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

近世快人伝

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>